

奄美大島龍郷町秋名の八月踊り

(注1)

久万田晋 寺内直子

はじめに

本論は、鹿児島県大島郡龍郷町秋名（あぎな）集落に伝わる民俗芸能、八月踊りの実態を年中行事との関わりの中から報告するものである。

秋名集落は重要無形文化財指定のショチョガマ、平瀬マンカイの伝承集落として知られている。その他にも本論の対象である八月踊りや種下し行事、三味線民謡など一年のサイクルの中で互いに密接に絡み合った個性的で豊かな民俗伝承の世界が練り上げられてきた。しかし近年の社会基盤の急速な変化、マスメディア・都市型生活様式の浸透、また慢性的な過疎化によって、かつての生活様式と結び付いた行事・芸能伝承の在り方やそれを支えてきた人々の意識も変化を余儀なくされている。こうした状況の中で、本論が秋名集落の行事・芸能の全体像を把握する一助となれば幸いである。

(注2)

筆者の久万田、寺内は、東京芸術大学民族音楽ゼミナールが1981年以来継続的に行っている奄美諸島の民俗音楽調査に参加してきた（調査日時は文末の一覧参照）。本論稿作成にあたっては筆者の収集資料の外に、同ゼミナールの資料を使用させていただいた。

秋名集落概況

龍郷町は、奄美大島の中央よりやや北部、名瀬市の北東、笠利町の南西に位置する。^(図1)龍郷町内の集落は、北部東シナ海外洋に面する秋名（幾里を含む）、嘉渡、円、安木屋場、笠利湾内西部に位置する龍郷、久場、瀬留、浦、屋入、同中部に位置する芦徳、赤尾木、川沿いの内陸部に位置する大勝、川内、中勝、南部太平洋外洋に面する戸口、加世間、手広などがある。いずれも険しい山系の台間の川沿いや河口付近のわずかな平地に開かれた集落で、近代的な道路網が整備される以前はほとんどの場合、隣の集落に行き着くためには海路を

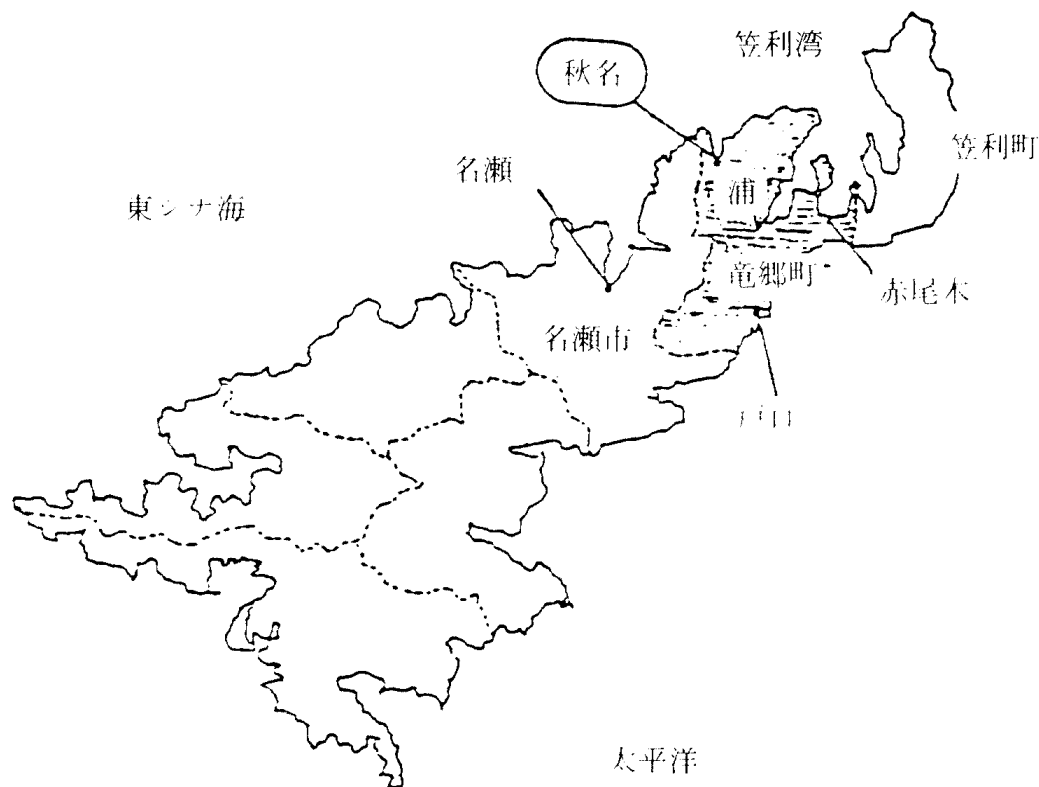


図1 竜郷町地図

行くか、険しい山越えをしなければならなかった。

竜郷町北部、東シナ海沿いの集落は、北側に海を臨み、他の三方を山に囲まれた立地で、山奥から流れ出た川が河口付近で形作るわずかな平野部分に集落が形成されている。名瀬市に編入されている芦花部、有良もこれらの集落に連なる。空から見ると、これらの集落はいずれも似通った景観を呈しているが、その中で河川が最も長大で平野部が広いのが秋名集落である。平成2年現在の人口は638人（含幾里 『1991町勢要覧』）で、嘉渡（256人）、円（323人）、安木屋場（218人）など付近の集落の中では最も人口が多い。名瀬方面へは、現在芦花部、有良、大熊を経由する県道を車で30分、竜郷町役場のある浦へは、嘉渡から長雲峠の尾根筋を経由して20分程度で行ける。

現在は農業が中心で、わずかに漁をする人もいる。農作物は、米、柑橘類などを作っている。砂糖黍はあまりつくっていない。紬は戦前はかなり作っており、「秋名バラ」という柄もある。現在はかなり減ったとはいえ、平野が広い分、米の収量は多く、夏、一面に実った田の風景は、「今年ほろ年や 果報年どありょる 来年（ヤネ）の稲（ニ）がなしや 畦（アブシ）まくら」という

歌詞にふさわしい。

現在、行政上は秋名と幾里という二つの大字があり、それぞれ区長がいる。ここでは便宜上、この平野部全体を「秋名」と呼ぶことにする。集落内はさらに細かくいくつもの小字に分かれるが、集落の共同体行事を行う上での単位として、里、金久、幾里、東（アガレ）という四つの字に分けることができる（図2、3参照。以後場所を図中番号で示す）。なお、東（アガレ）については、方角を表す東（ヒガン）と紛らわしいので、以下「アガレ」とカタカナ表記する。

里は海岸からやや離れた西の山際に位置するこぢんまりとした集落である。「秋名の始まりは里から」という言い方もよく聞く。集落の一番山側にウントノチと呼ばれる豪農の屋敷の石垣が残っており^(注3)（4）、ノロ屋敷（2）、ネトロ（カミヤシキ）（1）、タカン（5）と呼ばれる高倉あとなど、昔の生活、信仰をしのばせる場所が残っている。集落南西の山の中腹にはショチョガマ祭場のあと（3）がある。里から南に行った所、現県道が大きく湾曲する所に松の木が有るが、ここをイケハナ（6）といい、陸路旅立つ人の見送りをここでやっていた。

現在の秋名川は里集落の脇を過ぎて北東に流路を変えるが、これは江戸時代末、安政年間に里の北、金久の南部の山際の通称クズレというあたりが大雨で崩れたため、流路が現在のようになったのだという。それ以前は秋名川は里の北からまっすぐ山際を現・厳島神社（10）付近まで北上して海に注いでいた。^(注4)

金久・幾里は秋名川以北の海岸地帯で、秋名の中でもっとも人口が多く、郵便局、学校、農協など公的機関もここにある。図の中央の道路を隔てて西側を金久、東側を幾里という。ノロ屋敷（12）、ウドゥン（15）、墓地などは南半分集中しており、集落としては南の方から漸次北の方向へ拡大発展していったと考えられる。金久の北西にある厳島神社は、オミヤと呼ばれ、もとは現在地から北西に1時間くらい山道を上ったブブン崎の山の中にあつた^(注5)（11）。それ以前はアガレ集落のヒゴ（川）の上流にあつたとも、里の奥にあつたとも言う^(注6)。現在地に移つたのは昭和35年である^(注7)。ショチョガマ祭場は金久の南西、ナカザトの山の中腹（9）、平瀬マンカイの祭場はオミヤのさらに先の海岸にあ

図2 秋名集落地図

『竜郷町誌 民俗篇』所蔵「秋名民俗地図」をもとに作成。

地図の番号は文中の番号と一致する。

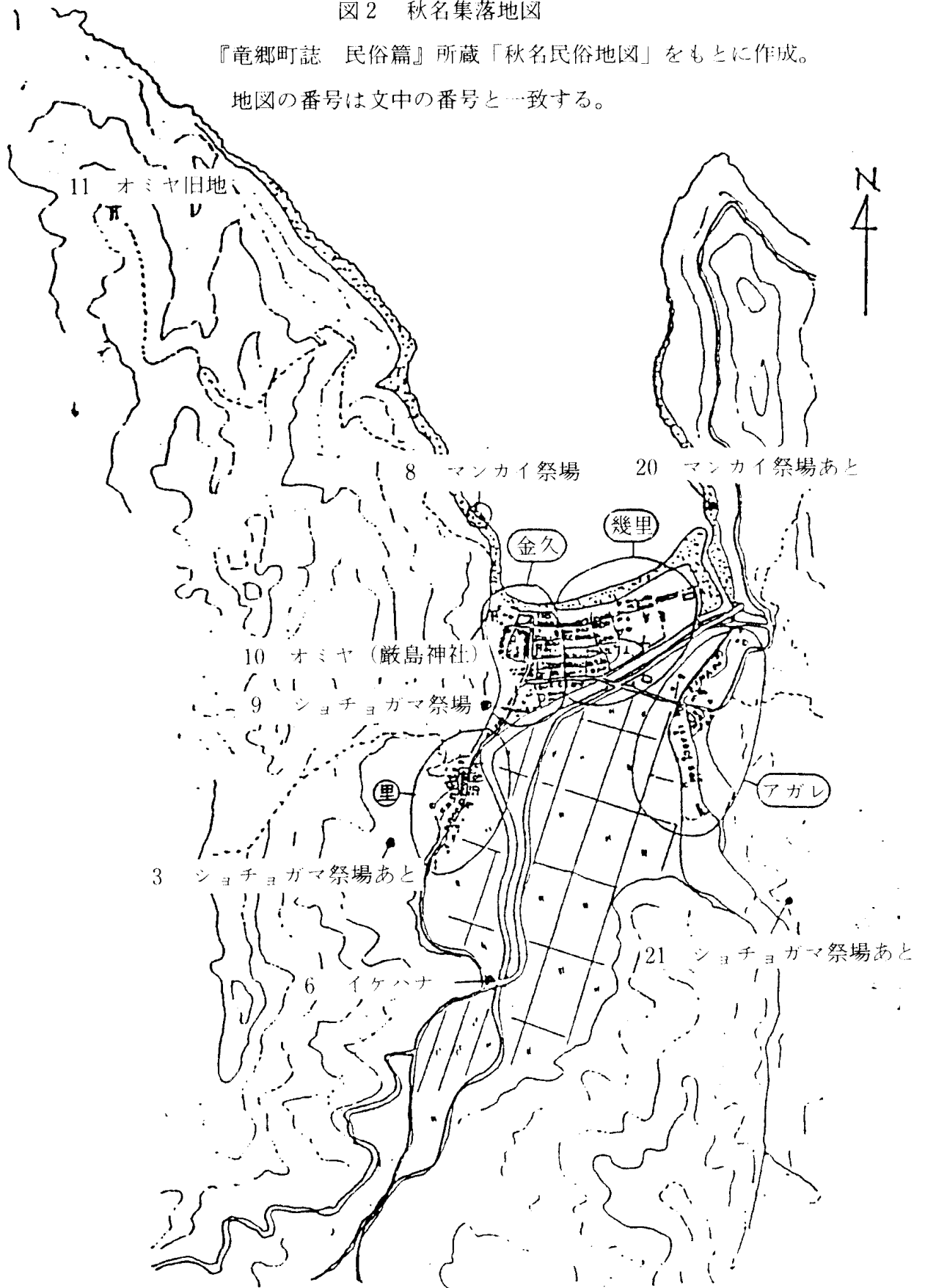
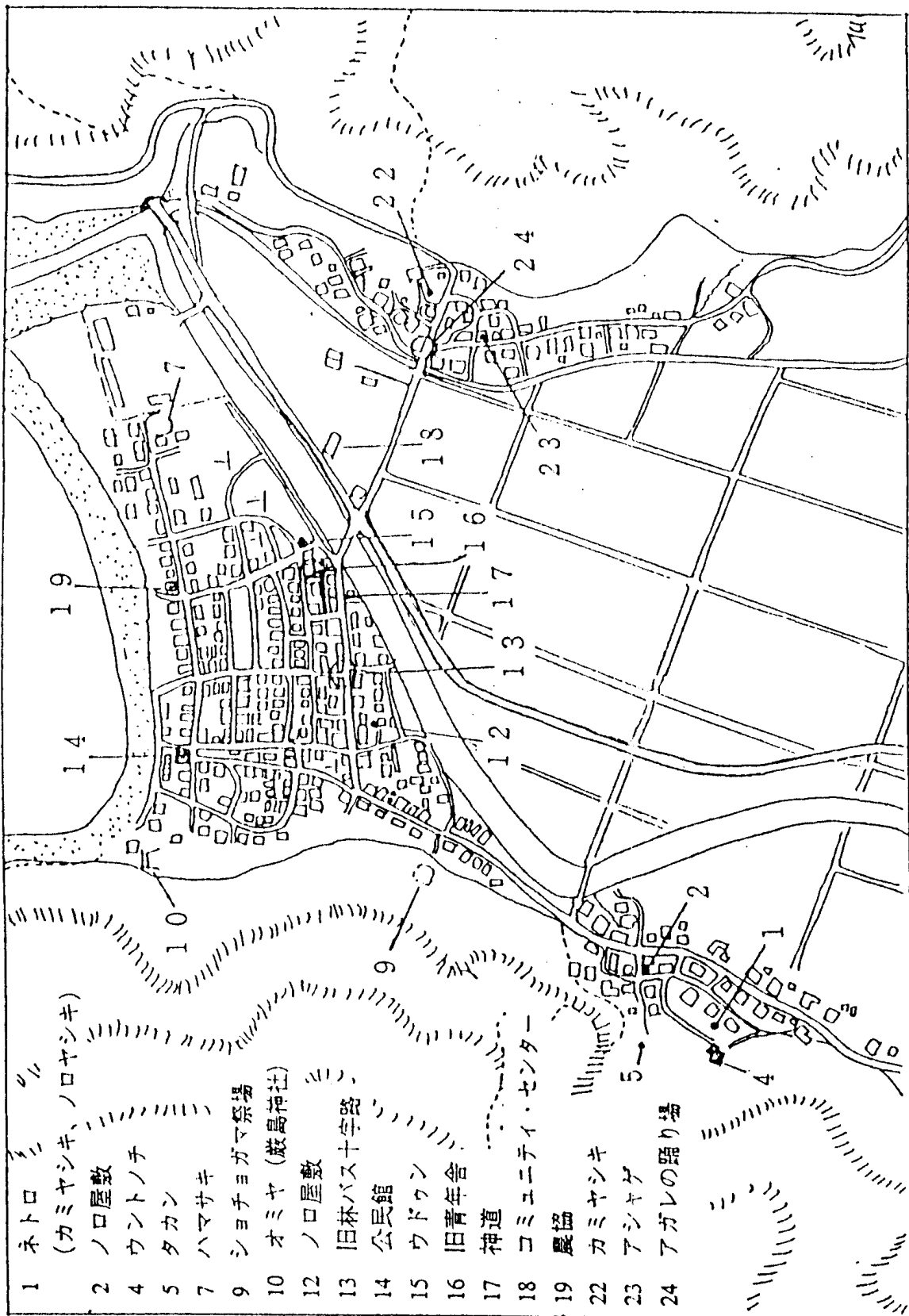


図3 秋名集落地図拡大図
『竜郷町誌 民俗篇』所載「秋名民俗地図」をもとに作成。地図の番号は文中の番号と一致する。



る(8)。現在、八月踊りを踊る場合は金久では公民館前の広場(14)、幾里は農協前の広場(19)などで踊っている。

アガレは東の山際、山田川に沿った集落で、ちょうど里に対峙した位置にある。古い集落で、やはりカミヤシキ(22)、アシャゲ(23)などのあとがある。アガレの南方の山の中腹にはアガレのショチョガマ祭場のあとがあり(21)、北方の海岸にはマンカイ祭り場のあとがある(20)。八月踊りはコミュニティーセンター前の道をまっすぐ東へ行き、山田川を渡ったところで踊っている(24)。

各種団体

集落の諸行事の時大きな役割を果たすのが、青年団、壮年団、婦人会、老人クラブなどの各種団体である。処女会も戦前はあった。

青年団は明治末期または大正初期に組織された。戦後一時、戦地からの復員によって人口が増えたが、現在は少ない。加入は任意で、年齢制限は30才までである。若者の都市流出の激しい近年は、活動の中心は壮年団や婦人会にうつっている。

婦人会は昭和26年に、壮年団は昭和30年代に、老人クラブは昭和39年に組織された。原則としては結婚すると婦人会、壮年団に入る。が、結婚しても青年団にとどまる人もいる。同様に、60才を過ぎても老人クラブに加入せず、壮年団のままの人もいる。必ずしも年齢によってきっちり分けられているわけではない。^(注8)

一般に、過疎化の進んでいる地域では高齢化が進んでいるが、その一方で残っている高齢者たちは、非常に元気、闊達である。60、70代といっても、ここ秋名ではまだまだ現役である。いわゆる足腰が弱り、杖をつくという老人のイメージは90才近くのお年寄りにやっと当てはまる。特に八月踊りなどの場では、10年くらい前までは明治末生まれのお年寄りたち、現在は大正生まれの70代の人々が歌も踊りもよく知っている中心的存在で、3、40代の「若い連中」がそれに習って踊り、歌うのである。

これまでの研究

ここでは秋名集落の民俗・行事に関わる文献を概観しておく。『龍郷町誌 民俗篇』（1988）は字毎に民俗行事が報告されている点で、民俗伝承の比較考察の為の又とない資料となっている。秋名集落に関しても年中行事を含む貴重な諸情報が記されており本論と重複する記述も多いが、話者の世代が異なる点や芸能との関わりに注目する点で本論が補助資料として役立てば幸いである。また同書には町内各地の八月踊り歌・しま歌（三線伴奏民謡）等の歌詞も収録されており、歌謡資料として貴重である。

ショチョガマ、平瀬マンカイに関する実態報告としては小野 1971、林 1982、小川 1986 等がある。また林 1976 では近隣地域のショチョガマ類似習俗が報告されている。湧上・山下 1974 では、近隣地域の諸伝承からショチョガマが子供組の行事、平瀬マンカイはノロ中心の神人行事と位置づけている。松原 1990 には集落発行歌集等各種文献から秋名を含む龍郷町内各集落の八月踊り曲目が紹介されている。こうした私家版資料の早急な翻刻化も望まれよう（本論文資料2はその試みの一つである）。『日本民謡大観 奄美諸島編』（1992 日本放送出版協会から出版予定）には、秋名集落のショチョガマ、平瀬マンカイ関係の歌謡も掲載される予定なので本稿と併せ参照されたい。

秋名の年中行事

ここでは旧暦による行事を中心に聞き取り記述する。戦後から現在の町主体の各種行事は含まれていない。筆者が話を伺ったのは、ほとんどが金久地区にお住まいの方なので、金久を中心とした行事の記述となっている。金久を含む秋名全体で行う行事についても記した。また話者は秋名の諸々の行事・芸能の中心的存在として活躍されている方々だが、大正以後生まれが殆どである。従ってここに記す各行事も、大正末から昭和の戦前あたりの様相が中心となっていることを断っておく。『龍郷町誌 民俗編』と重複する箇所も多いが、異なる点も若干あるので併読されたい。旧八月のアラセツ行事（ショチョガマ、平瀬マンカイ）に関しては既に前述諸文献に記述があるが、本論の主題である八

月踊りとも密接に絡み合っているので、その点から概略を記した。

・正月準備

シチギィ

旧暦十二月二十日頃、山で4尺5寸から5尺程の長さの椎木を枝を落とし丸太にして切ってきて、それを真ん中から二つ割にして15本ほど中の白いほうを外側になるように藁縄で束ね、その束を三つ叉状にして各家の庭の真ん中に立てた。これをシチギィといった。子供達は近所から集まって、シチギィを取り囲んで手を繋ぎ、次のような歌を歌って遊んだ。

しちぎいぬたちゆり まついぎいぬたちゆり
うややしんぱい くわーやゆるくみ
きゅらのろいったん こていとらそ

(シツギィが立つ、門松が立つ、親は心配、子は喜び、着物を一反買ってあげよう)

「きゅらのろ」とは紬、反物のことで、正月になったら親が子供に対して着物を買ってあげようといっている。シチギィは大晦日、門松を立てる時に倒し、正月内の薪に使用した。

ワークッチ (豚殺し)

師走の二十五日頃から秋名川で豚を屠殺した。戦前は殆ど家で豚を飼っていたので各家毎にやったが、自分の豚がまだ小さいような場合は親戚の家と一緒に屠殺して肉を分け合うこともあった。捌きは上手な専門的な人が各家から頼まれて手伝ってやった。豚は川で溺れさせて殺し、肉から毛をとり、内蔵は川の水で洗い、後は家に持ち帰り庭に戸板を置き、その上に肉を乗せて捌いて塩漬にしていった。さばく作業が終れば、食事には豚の料理が出た。さばいた豚の血は釣糸や網を染めるのに使った。ワークッチは戦後も4、5軒で1頭買って屠殺するという形で10年ほどは続いた。

大晦日

午前中は正月用の餅を搗いた。鏡餅は、昔は三重ねで下にウラジロを敷き、

葉の付いたアスコ（橙）を乗せた（現在はほとんど二重ねだという）。床の間には鏡餅の右に松とユズルを花瓶に立てて飾った。寒い年には松の先を切って白い木屑をつけて雪をかたどり、ユキマツィといった。また午前中に山から木を準備してきて夕方門松を作って立てた。門松の材料は松、竹、椎木、ユズルだった。現在では秋名では殆ど椎木は使わなくなっている。里集落では昔ながらに椎木を使用しているそうである。

・元日（グワンジツ）

早朝、秋名川へバケツを持って若水を汲みに行った。「人が行かないうちに」といって普通は母親が夜の明けないうちから行った。特別女の人の役と決まっているわけではないという。各々家から近い所で川の流れの真中から水を汲み、その中にコガネイシといって石を一つ拾って入れた。その水でお茶を沸かして仏壇にお茶のハツをあげ御飯を炊いた。

朝はグワンジツのお祝いを家族で行う。オミキ（焼酎）^(注9)を頂いた後、サンゴン（三献）^(注9)といって、高膳に習字紙を敷き、その上に左右の吸い物と刺身の三つを載せ右の吸い物、刺身、左の吸い物の順に頂いた。右の吸い物には魚、豚、椎茸、餅、昆布、野菜、葱かにんにくなどの葉野菜の内五つか七つ、九つという奇数の品を入れた。左の吸い物は鶏のスープに葱を刻んで入れた。刺身は年末中に釣って薄塩をしておいたものを三切れと生姜を二切れ入れた。

またサンゴンの時、シュムリ（塩盛り）^(注10)といって、足付の椀に湯呑一杯の塩をひっくり返して盛り付け、塩の前に昆布と、するめやキビナゴ等の魚を置いた。これは厄払いと、昆布は「喜ぶ」、魚は海の幸を示しているという。現在ではサンゴンを頂いた後、シュムリを一回頂くようになっているが、昔はサンゴンの右の吸い物、シュムリ、刺身、シュムリ、左の吸い物、シュムリ、という順番で頂いていた。これは結婚式・年の祝い等の場合にも行った。^(注10)こうしてグワンジツの祝いを各家でやった後、昼頃から本家（親元）の家を集まった。本家でもまずサンゴンが行われ、その本家の方からオミキを注いでもらった。その後<オコレ節>を歳とった方が中心となって歌った。ウタアソビ(歌遊び)などをしてから、ヤーマワリ^(注11)といって本家に集まってきた親戚の家を一軒一軒回^(注11)る。10人集まっていれば10軒回った。

最近では集落の話し合いによって生活改善の一環で簡略化するという
ことで、ヤーマワリも各家の入口で挨拶して帰るだけにしている。しかし回って来
る人にオミキだけは一杯だすという。

- 一月二日

二日はハツワク（初仕事）といって、その家の一番上の男が田に鋤を持って
いって耕した。その年の初仕事として午前中2時間ぐらい耕作をして、仕事始
めだということで帰ってきてからお吸物を頂いてお祝いををした。

- 一月三日

三日の日は一日中自由に休んだ。昔は正月は三日までということを決めてい
た。

- 一月七日

七日はナンカンセクといって各家で雑炊を作り、その年数えて7才になる
子供達が鉄鍋をもって親戚の家を7軒雑炊をもらって回った。昔は重い鉄鍋し
がなく、鍋に紐をつけて棒で担ぎ、付き添いが二人ほどついて行ったという。
雑炊は特に大和のように七草にこだわらず、餅、野菜類、豚肉を入れた。この
行事は現在でも行われているという。終戦後食料不足の折は、一人で10軒
15軒と回る子供もいたらしい。

この日の夕方夜が暮れるとすぐ、山で猟をする人が一人、鉄砲の空砲を一発
打った。それを合図に各家では家内の四隅に行って「福はうち、鬼はそと」と
いいながら戸を三回ずつ叩いた。この時豆は撒かなかった。戦後はこの代わり
に二月三日の節分に豆まきを行うようになってきた。

- 一月十一日

十一日はムチススムン（餅の吸物）といって、朝鏡餅を開いて雑煮を作って
頂いた。現在は鏡開きということが多くなった。

- 一月十四日

十四日日はナリムチ^(注12)といって、ブクギの枝を切ってきて餅を作って飾る。

ブクギの枝に紅白、緑、黄などの色に塗った餅を花のように差して、床の間、家の軒下、玄関に差す。またお墓に持ってゆき墓参りし、ナリムチはお墓に置いてくる。次の墓参りの時に捨てる。戦前は食料が困難で、夕方になると子供が墓に飾ったナリムチを取って食べた。ナリムチは普通の糯米で作り、餅には味はついていない。ナリムチのナリというのは実のようになるという意味。現在では名瀬方面の商人が売っており、各家ではこれを買って細かく切って枝につけるだけとなっている。

・一月十五日

ジュウゴンチショウガツ。この日は正月のお祝いをして、夜はウタアシビ（歌遊び。三味線伴奏の民謡を歌って遊ぶ）を朝が明けるまで行っていた。歌遊びではまずく朝花（アサバナ）>を歌い、その後は様々な曲を歌った後、最後にはくワカレ節>（長雲節のこと）、<朝花>を歌って終わる。

またこの日、台所の竈の入口に線香を立てて火の神様を拝んだ。正月・五月・九月の一日と十五日にはこうして火の神様を拝む人がいたという。

・一月十六日

16日は休みの日で、「山には行くな」と言われていた。女性は「盆の十六日(注13)と正月の十六日は針仕事もしてはいけない」といわれた。また夫婦の交わりもこの日はしてはならないといわれた。戦前にはこの日午後から集落で敬老会を行った。70歳以上の老人を全員招待して演芸、歌、踊などの出し物を出し、一日楽しく過ごした。出し物は集落に班が地域別に11班あり、班毎に出した。戦後敬老の日が九月十五日になってからは、敬老会は新暦九月十五日に変わった。

またこの日、山の神、セクガミ（大工の神）を拝んでいる人は各家で神拝みを行った。山に行く時は、怪我をしないように、ハブに会わないようにと拝んだ。家のセク神様の神棚の下にシュギ（米を水につけて、臼で搗いて丸めて湯飲み茶碗に入れたもの）、線香、バンジョウガネ、墨壺を膳にのせて拝んだ。この神拝みは正月、五月、九月（この三月をカミヅキ（神月）という）の各々十六日に行われた。拝んでから山の神様をはばかり山に入らないようにした(注14)という。

- 一月十八日

この日は「ヨウカとハツカ」^(注15)とって、カシャムチ（柏餅）を作って食べた。これは糯米に芋を少し混ぜ臼でついてからサネンの葉に包んで蒸す。このカシャムチの餅の葉を門の入り口に下げていた。これはこの一年悪いことが家庭で起きないように、子供が健康に育つようにという一種のキトバライ（厄払い）の意味だろうという。

またこの日、カメザライとって正月の一番最後の日ということで、正月準備に塩漬けして瓶に貯蔵した豚の食べじまいをした。豚の耳を塩焼きして食べた。ただしこの日豚の肉を全部食べるということではなく、実際には昔の人なら三月四月の田植えの頃まで豚肉は置いていたという。

- 二月三日

節分の豆撒きをする。これは戦後の新しい習慣で、それ以前は前述のように一月七日に類似の行事を行っていた。

- 三月三日 桃の節句

サングッツサンチという。この日はフツィムチ（蓬餅）を作って食べ、その後海に出て貝をとったりして遊んだ。餅は蓬の葉をどろどろにゆでておき、臼でその蓬と砂糖と芋を先にこねる。それからもち米の粉を併せて杵でつき、サネンの葉に包む。それを藁で束ねて一時間半程蒸す。出来た餅はムチヌハツ^(注16)とってまず仏壇に供え、次に親元や親戚に配って回った。^(注17)

二月末頃から砂糖黍製糖のために各家がヤドリ（砂糖小屋）に泊まり込む家が多く、三月三日の節句はヤドリで過ごす家庭も多かった。^(注18)ヤドリにいる人も海に行かないと「スクフなりゆんかな、いすわっちゃいかなば」（ふくろうになるから（陸に）居座っていてはいけない）とって必ず海に出るようにした。

この日は晩になると現在の小学校付近に松の木の生えた踊りに適した場所があり(7)、そこでハマオドリとって八月踊りを踊った。踊りの輪の真ん中に焚火を焚いて踊ったという。その時は太鼓は叩かなかった。太鼓を叩けばイナダマガナシ（稲霊様）がびっくりすると言って、稲を刈り取らない間は太鼓は

叩かなかった。八月踊りで太鼓の叩き初めは旧の七月の盆からであった。

- ハツマネ

旧の四月の一番始めの午の日はハツマネといって、ムジムチ（コウシンムチともいう）という麦の粉で作った餅を食べた。これは麦粉に芋と黒砂糖を混ぜお湯を入れて練り臼でついて作る。これを粉をつけて包丁で切って食べる。茶色っぽい色でとても香ばしくて美味しいという。ハツマネはその月に午の日が三回ある時はミマネといって三回ともムジムチを作って食べた。午の日が二回の時は初めの一回で済ました。

またこの日は蕪を油炒め等にして晩御飯やお茶の時間に食べた。^(注20)

- 五月五日 男の節句

ゴガツゴンチ。この日は三月三日と同じようにフツィムチ（蓬餅）を作り、親元、親戚にムチヌハツを配って回った。蓬餅の他にもつき餅、じょうひ餅を作った。各家ではご馳走を食べてお祝いをした。晩は小学校付近（7）でハマオドリ（八月踊り）を太鼓無しで踊った。

- ハマオリ

旧の五月の節句後最初の寅の日、田圃の虫取りのマツリをハマオリといって、午前中は田圃に行って稲についた虫・蛹を取り、その虫を海岸で芭蕉などの色々な葉に包んで沖に流した。その後ご馳走を弁当こしらえにして親元に集まり、タカグラ（高倉）の柱の地面から70 cm程にある桁に材木を渡し、そこに畳を敷いて座敷をつくってお祝いをした。夕方になってから一重一瓶で弁当をもって浜に出た。海岸では馬競争と船競争をして集落中の人を楽しんだ。馬競争は海岸の端から端まで600 mほどで行った。馬に乗れる人でないと危険なので大体二、三頭から多くても四、五頭だった。船競争はこの後潮が満ちてきてから秋名と幾里の集落対抗で行い、小学生、婦人会、青年団、壮年団毎に一槽6, 7名乗りの船で競争した。

晩になると小学校付近（7）でハマオドリ（八月踊り）を太鼓無しで踊った。

- イモケェ

旧六月のある日、田圃から一番綺麗に実った稲穂を三本、別々の元から一本ずつとってきて床柱や壁に次の年のイモケェまで下げておいた。3本の穂の、各々から一粒ずつ米粒を取り、それを混ぜて御飯を炊いた。それをミーゴメヌハツとって仏壇に供えた。このイモケェを済ませると次の日から稲の刈り入れをしてよいことになっていた。この干支は一月に二回くらい回ってくるので、最初の日イモケェをする人は後の日にする人が刈り入れを始める頃にはもう終わっていた。

またこの日の晩、その一年の間に身内がハブに噛まれるか、亡くなった家は御馳走とお酒（焼酎）を持って浜に出た。浜に親戚が集まり歌遊びなどをして二、三時間ほど過ごした。この浜に出る人をイジチュと云った。

- アンガシキ

稲を刈り入れ脱穀をすませた後、もち米をカシキ（強飯）にして、家族で食べた。残りを少しだけ家の隅々に置いた。これは稲刈りの後、蟻が増えるので蟻よけの為に行った。

- タナバタマツリ

旧の七月七日。子供達は夜が明けるのを待って里芋や草花の葉に溜まっている朝露を取ってきて、その露で墨をすって短冊に「天の川」とか自由に書いて竹の枝に下げた。この竹枝はタナバタデーといい、前日山から枝ぶりのいいのを採ってきた。朝飯はお祝いに素麺をゆでて食べた。昔は素麺は珍しくて御馳走であった。この日はタナバタアメと云って雨が降る日が多かったという。

- 盆行事

ミズマツリ 盆のムケェ（迎え日）

旧の七月十三日。その家の御先祖様である仏様をグショウ（後生）から迎える。盆の迎え日は島口ではムケェというが、この日は特にミズマツリと呼ぶ。各家では山から椎の木の生枝を切ってきて表戸の軒下にシバヤと呼ばれる簡単な小屋を作り、そこにお水のハツ、お菓子のハツ、お酒（焼酎）のハツを供え

た。これは 50cm 四方で四尺位の高さに四本椎の枝を立て、それに立割にしたキンチクを桁にして横に渡して藁縄で編んでつなげてゆく。^(注22)シバヤで手を洗った仏様が家に入ってきて、手をふくために、屏風に手ぬぐいをさげて置く。^(注23)シバヤは現在では殆ど作っている人はいないという。

この日の夕方墓参りして仏様をお供して来る。お供してきて初めて家の仏壇に明かりを灯す。昔は十三日の夕方迎えて来ると十四日の朝また墓から迎えてきて、また夕方には墓に送り、また十五日の朝迎えてきて夕方送っていくというように迎え送りを三回繰り返していた。現在では十三日に仏様を迎えてきたら、送るのは十五日一回と簡略化して行方家が殆どになっている。

七月十四日 盆の中日

朝、お墓に行ってお参りし、仏様を家まで迎えて来て仏壇にお茶のハツ、お菓子のハツを供える。またこの日は昼までに糯米で迎え団子を作って仏壇に供える。昼御飯にはお粥と、素麺などの吸い物を作って仏壇に供える。午後三時頃になると精進料理ということで里芋やカボチャなど色々野菜を炊き、御飯のオハツを供える。家族もその御馳走を食べてから、夕方提灯を点して仏様をお墓まで送っていった。提灯はお墓では家によっては4つも5つも点す。中のろうそくが消えたら持ち帰るといふ。晩は各家で御飯を食べた後、公民館前で八月踊りを踊った。^(注24)

ホリボン (盆の送り日)

朝、お墓に行ってお参りし、仏様を家まで迎えて来る。昼御飯には十四日と同じようにお粥、吸い物を仏壇に供える。夕方提灯を点して仏様をお墓まで送っていった。^(注24)夜、公民館前で八月踊りを踊った。この日は翌日が休みなので夜通し踊った。

盆の十六日

盆の休み。「盆の十六日と正月の十六日は針仕事もしてはいけない」といって、女性にとっては身体を休める休日であった。

・アラセツ行事

アラセツ、シバサシ、ドンガはミーハチガツ（三八月）とって、旧暦八月にある一年の重要な節目にあたる。奄美各地ではこの季節、さまざまな行事が行われ、八月踊りが踊られる。アラセツ（新節）は旧暦八月の初丙の日で、竜郷町秋名では、この日一年で最大の祭、ショチョガマと平瀬マンカイが、ゆたかな実りをもたらしてくれた「稲だまがなし」への感謝と、次の豊穰の祈願をこめて行われる。ショチョガマと平瀬マンカイは、戦争で一時的に絶したが、昭和35年、秋名の人々の熱意と努力により、十数年ぶりに復興された。昭和60年には、国の重要無形民俗文化財の指定を受け、これを機に、秋名重要無形民俗文化財保存会が発足し現在に至っている。^(注25)

ショチョガマと平瀬マンカイは、かつては、名瀬市と竜郷町の東シナ海側の複数の集落で行われていた。秋名の隣、嘉渡では明治の末までショチョガマを、^(注26) 昭和8年頃までマンカイをやっていた。^(注27) また、名瀬市の大熊、仲勝、有屋、浦上では大正時代まで、有良、芦花部などでは明治末までショッチョガマ（シチャガマ、ヒチャガマとも）が行われていた。^(注28)

秋名でもショチョガマは金久（幾里を含む）、里、アガレとそれぞれ別に行っていた。また平瀬マンカイも西の浜では金久（幾里）と里の祭を、東の浜ではアガレの祭を行っていた。今日では秋名のショチョガマもマンカイも金久（幾里を含む）地区で伝承されているのみである。

アラセツの前日（「スィカリの日」という）、各戸では、三つの膳に供えものをして、南に向かって置く。一つの膳には仏様のために線香、神酒、果物を供える。残りの二つの膳には、赤飯、酒、煮物、野菜、果物などを盛る。赤飯には箸を一本立てる。二つの膳はコーソガナンに供えるといわれ、^(注29) 一つはアラセツの豊年の神のため、一つは家の神（ミカタサマ）のためである。ミキ（神酒）は昔は各戸でスィカリの1日か2日前に作った。米を搗いて炊いたものに薩摩芋をおろして混ぜ、1晩か2晩ねかせると発酵して、祭りの日にちょうどよい味になるという。砂糖は使わない。芋の甘さで十分甘いという。

昔は、スィカリの日に、若者が仮装し、太鼓や三線を鳴らしながら、夜通しにぎやかに村の家々を回った。家をまわる様子は種おろしの時と同様で、^(注30) 道

行に〈オボコリ〉を歌い、家に着くと〈六調〉を歌い踊る。家から飲物や食べ物かふるまわれると〈天草〉を歌い踊る。またそれにつづいて八月踊りも踊られた。このようにして一晩かけて村中の家を回り、その勢いで翌朝、ショチョガマの祭場へと繰り込んだようである。また若者達は夜明け前になるとサンバラという大きな籠をもち、各家を回ってカシキのハツをもらった。ショチョガマが終ると、ショチョガマの上でヒラクとって、参加者がそれをもらって食べたという。

アラセツ当日の行事は、早朝、集落の裏手の山の中腹で行われるショチョガマ祭と、午後4時すぎに海岸で行われる平瀬マンカイとに分けられる。ショチョガマで山の神に、平瀬マンカイで海の神に感謝と祈願をすると考えられるが、^(注31)祭祀者の唱える祭詞や歌われる歌謡の内容は、いずれも「稲だまがなし」を招き寄せ、稲の豊穰を祈願するもので、ノロを中心とする稲作儀礼の趣を残している。

ショチョガマ

ショチョガマは木や藁などで作った、屋根のような建物である。秋名集落が一望のもとに見渡せる西側の山の中腹、かなりの急斜面にせりだすように構えられる。この上に大勢の男が乗り、これを踏み倒すのがショチョガマの行事である。原則として男しかショチョガマの上には乗れないが、現在は女の子も上っている。山の斜面にどっと倒れたショチョガマは、稲穂が実って畦に垂れる様をあらわすものと言われている。地形の具合から、北側に倒すと危険なので、^(注32)南側に倒す。ショチョガマの語源については定かではないが、「節構え」がなまったという説、「ガマ」ということばを「崖」と解して「節屋崖」とする説、^(注33)節の子供の遊びとする説などある。

ショチョガマは、かつては、集落で満15才になった少年のうち、くじに当たった者が一週間くらい前に山に材料となる木を切り出しに行き、アラセツの前日、スィカリの日につくった。現在は、青壮年団が中心となって、木を切り出し、祭の前の日曜日などを利用して作っている。屋根を葺く藁は各戸から2束ずつ出す。

その作りは図4のようになっている。二本の親柱は南に立てるものは秋名か

ら、北に立てるものは幾里から出す。親柱の前にはそれより細い柱（スィーバリャ）を2本ずつ立てる。スィーバリャの前には割竹で編んだスダレのようなシルを垂らす。屋根は藁で葺く。南北の柱の上には俵のようなマクラを乗せる。^(注34)

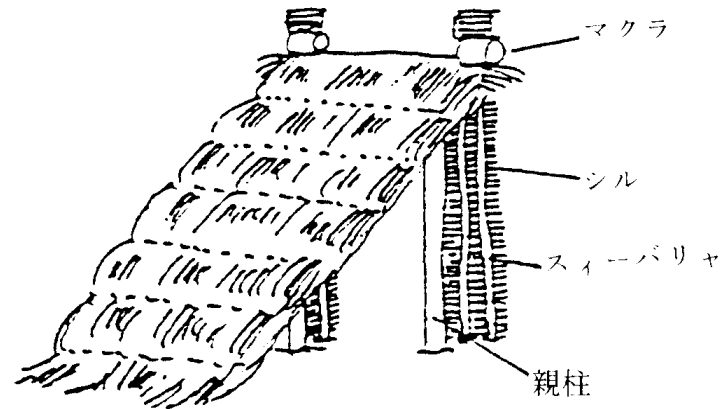


図4 ショッコガマの構造

アラセツ当日、夜明け前（午前5時半頃）に集落の男たちが次々にショッコガマの祭場へと集まってくる。このころはちょうど、海が満ち潮になる頃でもある。まず、グシと呼ばれる男性の祭祀者がショッコガマの先端のマクラの前に供え物（ミキ、カシキ）をし、祭詞を唱える。その詞は次の通りである。グジは以前は金久と幾里と各々一人ずつ出て、祭詞を唱えていたが、現在は金久から一人だけ出ている。

新節（あらせつ）ぬきようて
 ショッコガマぬ祭り
 祭（まつ）ておしょろーろ
 屋仁佐仁（やんさん）田袋（たぶくろ）ぬ
 稲（にゃ）だま加那志（がなし）や
 秋名田袋ち寄りみしんしょうし
 西東（にしひぎゃあ）ぬ稲だま加那志や
 伊津部田袋（いつぶたぶくろ）ち
 ゆりみしんしょうれ

伊津部田袋ぬ稲だま加那志も
 秋名田袋ちゆりみしんしょし
 北（にし）風ぬ吹けば 上（うー）ぬ畦枕
 南（ふーん）風ぬ吹けば 下（しゃ）ぬ畦枕
 生（ま）れはちぎらしんひち
 なあ あがりんしょうれ
 ショッチョガマぬ祭り 祝ておしょろーろ
 とうと加那志

（『竜郷町誌 民俗編』 P.154参照。一部表記を改めた）

去年のアラセツ以後に生まれた男の子は親に抱かれてショッチョガマを踏むと、健康になると言われている。

次に男たちはショッチョガマの上で、〈ショッチョガマの歌〉を1節歌い、歌が終わると「ユラ、メラ」のかけ声に合わせて、足を強く踏み、ショッチョガマを倒そうとする。ショッチョガマの最も迫り出した端に太鼓を持った男たちが並び、歌をリードする。2本の太い柱に支えられたショッチョガマはそう簡単には崩れず、〈ショッチョガマの歌〉一足踏みの動作を2時間近くにわたって何回も繰り返し、倒壊させる。太陽が東側の山に上るまでに倒さなければならないと言われているが、実際には太陽が上がってから倒れることもある。倒れたショッチョガマの上で、男たちは八月踊りの〈アラシャゲ〉と〈今の踊り〉、続いて六調（三味線は用いない）をひとしきり踊って、ショッチョガマ祭は終了する。八月踊りは、本来、男女が交互に1節ずつ歌い掛け合う。秋名では歌い出しは女で、ツィヅィン（太鼓）も女が打つが、ショッチョガマの上には男しか乗れないので、男同志で掛け合い、ツィヅィンも打つ。

ショッチョガマはかつては、この金久・幾里のほかに、里、アガレでも同時に行われ、歌声やチヂンの音が互いに聞こえたものという。

平瀬マンカイ

夕陽が西に傾き、再び潮が満ちてくる午後4時半頃、海岸の平瀬で「平瀬マンカイ」が行われる。平瀬には、「神平瀬」「メラベ平瀬」「インガ平瀬」とい

う三つの大きな岩がある。このうち神平瀬にノロの系統を引く人を含む5人の女性が白衣装で上り、メラベ平瀬にグジを含む男女数名が上り、神への感謝と祈願を行う。かつて、岩の上に乗る神役には、ノロのほか、グジ（「グージ」と発音する人もいる）、ウッカン（オッカム、オッカンともいう）、シドワキなどノロを補佐する神役があった。^(注35)昔はその家筋の人が勤めたが、現在は必ずしも家柄によって選ばれるわけではなく、歌をよく知った人が中心となっている。「マンカイ」とは普段島口では踊りの手の動きのことを言う。^(注36)この場合は岩の上で歌に合わせて行われる手の動きを、稲霊を「招く」意と地元でも解釈している。

岩の上では、まず〈平瀬マンカイの歌〉が歌われる。神平瀬の神女たちがまず第一節を歌い、この間、メラベ平瀬では、歌は歌わず、手を大きく左右に揺らしたり、手を合わせたりする「マンカイ」の所作を繰り返す。第2節はメラベ平瀬側が歌い、神平瀬側がマンカイをする。このように、奇数節は神平瀬側、偶数節はメラベ平瀬側が歌い、交互に掛け合う。ツィヅィンはメラベ平瀬上の女性のみが打つ。

〈平瀬マンカイの歌〉が終わると、神平瀬では神女たちがひさまずいて、シヨチヨガマの時と同じような祭詞を唱える。メラベ平瀬では八月踊りの〈アラジャゲ〉と〈今の踊り〉を男女掛け合いで歌い踊る。

この後、全員岩から下り、浜辺で〈すす玉踊り〉を踊る。〈すす玉踊り〉は八月踊りとは異なる踊りで、旋律の後半には奄美地方に広く分布する〈稲すり節〉が昭和40年代につけ加えられた。この時、浜に集まっている集落の主だった人々も踊りに参加する。つづいて、八月踊り〈アラジャゲ〉〈今の踊り〉^(注37)など数曲が踊られる。

平瀬マンカイの日は、集落の人々も手に手にご馳走（一重一瓶）をもって浜に集まる。神平瀬にはカシキと呼ばれるおこわを珊瑚の石にはさんだものや、酒などが供えられる。また、去年のアラセツ以降生まれた子は、男ならインガ平瀬を、女ならメラベ平瀬を踏ませると丈夫に育つと言われている。祭を見学に来た人々も暖かく迎え入れ、浜では踊りに興じたり、ご馳走を食べたり、楽しい一時が過ごされる。

平瀬での行事が終わると、集落寄りの海沿いの広場（公民館前）に場所を移

して、八月踊りが行われる。夕方6時ごろから9時ころにかけて行われ、踊りも10曲前後踊られる。最初は必ず〈アラシャゲ〉を踊り、次に〈今の踊り〉を踊る。以下の曲目は順不同である。

- シバサシ

シバサシはミーハチガツのひとつで、アラセツから7日後の壬（みずのえ）の日に当たる。前日のスィカリの日、各家の門口で、藁、粉がら、山羊草（ヒンジャクサ）、牛のふんをまぜたものを燃やす。一種のキトバライであるという。シバサシの当日は、アラセツと同じく膳を供え、トウズキ（ススキの一種）を切って来て軒にさす。

夜には八月の遊びと言って、八月踊りを深夜1時、2時まで踊った。ただし、アラセツほど盛んには踊らなかった。踊っても一晩くらいであった。この踊りは各字でそれぞれ行われ、字秋名（金久）では公民館前、幾里では農協前^(注24)の広場で踊られた。現在は八月踊りが踊られることはない。

- ドンガ

ドンガはミーハチガツの最後の節で、スティドンガ（捨てドンガ）などという。アラセツ後の甲子（きのえね）の日である。十干の甲と十二支の子が会うのは60日に一度なので、ドンガは九月に来る場合も十月になる場合もある。八月踊の歌詞にも「打ちはてぬ鼓 踊りはてドンガ 女童若者や にゃわかぐるしゃ」という歌詞があり、賑やかさの中に名残惜しげな雰囲気のためよう節である。ドンガでは、アラセツ、シバサシと同様の供え物をし、早朝7時頃に墓参りをする。今はやっていないが、昔は墓の側に、にわか作りの土俵を作り、墓に供えられた神酒を飲みながら相撲をとる青年もいたという。この日は、墓まいりがすむと、親せきや友達の家に行って遊んだ。あまり出歩いて仕事をしてはいけない日であった。

晩になると、公民館前^(注24)などで八月踊りを踊ったが、現在では踊らない。

- 八月十五夜

かつて、旧暦八月十五夜には秋名の全集落をあげて相撲と八月踊りが行われ

ていた。幾里地区の秋名川そばのウドゥンと呼ばれる広場の土俵で相撲と八月踊り、その他の余興が行われていた。ウドゥン（15）はかつてはノロたちの集会所であり、集落でも神聖な場所である。ウドゥンのそばには神道といって、神役の人々の通る特別の道も残っている。戦後しばらくは高倉も残っており、幾里の集会所として利用されていたが、現在は民家と畑になっている。

相撲は東・幾里組と金久・里組の対抗で行った。アガレの力士はアガレ集落内のアシャゲ（23）で、金久の力士はノロ屋敷（12）で、幾里の力士は旧青年舎（16）にまず集まる。^(注38)この日ノロ屋敷などでは集落内から米や野菜を持ち寄り、ごちそうを作る。力士は神酒を飲んで、願を立ててから、太鼓を鳴らしながら相撲場のウドゥンへと向かった。集落の人々はウドゥンに集まり、めいめい場所をとって、相撲に興じながら弁当を食べる。

相撲は午後一時過ぎから始まり、三時頃に「中入り」という休憩がある。中入りでは、秋名全集落合同の婦人たちの八月踊りが、土俵の回りで行われる。この時、婦人たちは頭から風呂敷をかぶるなどの仮装をし、観衆を大いにわかせたとのことである。「ヨーイヤ、ヨイヤヨイヤヨイヤヨイヤ」というかけ声の踊り〈ヨイヤ踊り〉で土俵のまわりを3周し、輪を作る。この時、婦人たちと一緒に、この日の御馳走や餅をかついだ力士達も土俵の回りを回る。次に婦人達が八月踊り〈アラシャゲ〉〈今の踊り〉ほか1曲、計3曲おどる。

このあと、踊り足りない婦人たちは思い思いの場所で踊り、これに有志の男たちも加わったようである。一方、土俵では相撲が再開され、夕方4、5時ころまで続けられた。相撲が終わったあと、力士達はふたたび、出発したノロ屋敷などに帰り、願を直してから解散する。

日が落ちると、すぐに月があがる。いったん家に帰り、夕飯をすませたあと人々は三々五々、各字内の踊り場にあつまり、十五夜のこうこうと照る月明かりの下で深夜12時、1時まで八月踊りを踊った。

八月十五夜の行事は多少簡略化されているが、現在の九月十五日の敬老会行事に引き継がれている。

・敬老会（新暦九月十五日）

かつての八月十五夜の行事をとりこんで、現在新暦の九月十五日敬老の日

に、相撲を行っている。敬老の行事自体は、もとは旧正月十六日に行われていたが昭和41年に敬老の日が制定されてからは、八月十五夜の相撲とも合体して九月十五日に行われるようになった。場所はコミュニティーセンター（18）である。現在の相撲は年齢によって、保育園児、幼稚園、小学校、中学校、青・壮年団の部などに分ける。午前中は、子供の相撲や中高生の親子相撲、中入り後に班対抗の勝負相撲になる。昔のように字の対抗ではなく、秋名全体で6つの組に分けて対戦させる。その区分は、里で1組、金久で3組、幾里2組、東1組、計6組である。名瀬の郷友会から力士が来て対抗相撲をすることもあ

る。
午前11時ころより相撲が始まり、昼頃中入りの婦人会の踊りがある。〈ヨイヤ踊り〉で御馳走を担いだ力士とともに土俵を一周し、こののち八月踊りを1、2曲踊る。〈ヨイヤ踊り〉がある時は、〈アラシャゲ〉は踊らず〈今の踊り〉から踊る。これは〈ヨイヤ踊り〉が反時計回りであるため、同じ反時計回りの〈アラシャゲ〉は踊らず、時計回りの〈今の踊り〉を踊り「よりを戻す」のだという。^(注39)これはかつての八月十五夜の形が簡略化されたものである。最近はさらに簡略化されて八月踊りは、〈アラシャゲ〉〈今の踊り〉以外の1曲しか踊られないことが多い。昔のような仮装ではなく、現在はそろいの浴衣を着た婦人たちが土俵の回りで八月踊りを踊る。

・九月九日（オミヤ参り）

今日ではほとんどいないが、戦前、戦中は九月九日にオミヤ（厳島神社）参りをする人が大勢いた。その頃オミヤはブブン崎の山の中にあり、現・厳島神社の裏手から1時間くらい山道を行ったところにあった。弁当を作り、神酒（焼酎）を持って前の晩から登り、神社の前に火を焚き、男も女も夜通し歌遊びや踊りなどして過ごした。芦花部の方から拝みに来る人もいたという。

翌、九日の朝に神社の神主が願たてや願直しをした。願をたてる時はお神酒とお賽銭を供え、願がかなうと餅をついてくるなどして願直しをした。祈願する内容は、子供の健康や、戦中は出征している肉親の無事を祈願する内容が多かった。不幸があってオミヤに参れない人は「浜ジュガン」といって、浜で願たてをした。その時はシュギという、米を水につけ、ついたドロドロのものを

二つの椀に入れ、椎の木を割って束ねたものとともにお膳にのせて祭をした。

オミヤ参りが終わると、集落に戻ってきて、若い人たちは現・公民館そばの広場に土俵を作り、相撲をとることもあった。晩になると八月踊りを踊ることもあった。

・月待ち

九月は十五夜、十八夜、二十三夜、二十八夜に月を拝む習慣があった。現在はほとんど行われていないが、戦前は各家庭で行われていた。内地へ出た家族の無事・健康を祈るもので、床の間のそばに、お膳に榊の花を立てたものと団子をのせたものを飾る。月が高く上るまでいろいろな遊びをして待ち、上がったところで月を拝む。月が上がるのは二十三夜では午前1時頃、二十八夜では午前3時頃になる。

この月待ちは九月だけでなく、正月、五月にも行う（ただし正月十五日は夜通しウタアソビをしたので、月待ちは行なわなかったようである）。九月を含んだこの3月を「神月」と呼んでいる。

・ムチムレ（餅もらい）

収穫を終え、一年の節目の祭を八月に行うと、九月はまた新たな種をおろし、次の農作の準備をする季節である。この時期、秋名では、踊りながら集落の1軒1軒を回り、集落の運営資金を集めるムチムレ（餅貰い）と呼ばれる行事を行う。現在は現金を集めているが、古くは餅（つき餅）を各戸から集めていた。道行の歌〈オボコレ〉の歌詞の中に、「餅もらいがきゃおた」とあるのは、その名残である。別名「種おろし」ともいうが、秋名では、現在、実際の農作業の種おろし（種つけ）とは関係がないそうである。

ムチムレは、旧暦九月の月の晩（9月15日前後）を選んで行われる。以前は各集落、各字で独自に日時を選んで行っていた。このため、若者などは、自分の集落以外の餅もらいに出かけて行って踊りに参加していたようである。現在は竜郷町の区長の会合で日にちを決め、同じ日に一斉に行う。^(注40) だいたい旧暦9月15日に近い週末に行っている。

秋名のムチムレは、金久、里、幾里、アガレの各字で別々に行われる。金久

ではもとは青年団の踊り、壮年団と老人の踊りは別々に、都合2組が字内を回っていたが、現在は合同で回っている。また各字のムチムレとは別に日を取り、老人会のムチムレも10年くらい前から行われている。こちらは、全字合同となっている。各字のムチムレは子どもから7、80才のお年寄りまで非常に多くの人に参加して行われる。また、日を改めて行う老人クラブの餅もらいも、老人だけでなく、壮年、婦人も多数参加して盛り立てている。

ムチムレは、二日かけて各字ごとに全戸を回っていたが、1985年頃より、4、5軒で1カ所の踊りをするという簡略化した形に変わった。金久地区の場合、1日目に4、5箇所、2日目に4、5箇所回っている。1箇所の所用時間は約1時間である。現在は、1日目は夜9時ころから、翌日未明の2時頃まで、2日目は午後11時頃から明朝まで夜通し踊る。昔は、1日目、夜9時から10時頃始めて夜通し、2日目はまた夜9時から10時頃から始めて夜通し、次の日の昼の11時頃に解散したとのことである。

踊りの参加者は多い時で6、70人に達する。その中には、太鼓をたたく女性数人、〈六調〉〈天草〉の三味線を引く男性2、3人がいる。また、アトザレ（アトバライ）、サキザレ（サキバライ）とあって、踊りの集団が来る前に先回りして御馳走を食べていたり、遅くまで残って話をする人もいる。

家々を回ることをヤケェブリという。これは正月の親戚まわりのヤーマワリとは区別されている。ヤケェブリは次のような手順で行われる。

1. 家から家までの道行に〈オボコレ〉（旋律1）を歌う。家の門に入るところで〈オボコレ〉の旋律を替える（旋律2）。〈オボコレ〉は太鼓の伴奏。道行の時は特に1列に並んだりすることはなく、三々五々歩いて行く。現在はほとんどやる人は無いが、もとは右足を出す時に右手をあげ、左足を出す時に左手をあげるいわゆるナンバの歩き方をしていた。秋名ではこの動作について特に名称はない。

2. 庭先でまず〈六調〉をやる。三味線、太鼓の伴奏。

3. お花（現金）をもらう。「東西、東西」の掛け声をまずあげ、その家からもらったお花の金額を披露する。

4. 〈天草〉をやる。三味線、太鼓の伴奏。

5. 八月踊り〈アラシャゲ〉〈今の踊り〉ほか1曲ほど踊る。

現在は集まったお金は集落の年間の運営資金として、老人会、青年、壮年団、婦人会などに分配しているが、戦前は「お開き」と言って、日を改めて宴会を開き、その費用に当てていた。豚をつぶしたり、当時としてはめずらしい素麺などを買ったりして盛大に飲み食いしたようである。

ムチムレはかつては、2晩3日にわたって行われ、三味線、太鼓と歌声が集落中に響きわたる、一年でもっともにぎやかな行事の一つであった。現在、その形はやや簡略化されたとはいえ、アラセツ行事と並んで、集落の人々のもっとも楽しみにする行事の一つであることに変わりはない。

- ・十月ガタメ（日にち不明）

ヨウカトハツカ（正月）のようにカシャモチを作って、家の入り口、門に下げておく。この時、前述のムチムレ（種おろし）とは別に、ムチムレをする事があった。これは、部落の資金を集めるといった主旨はなく、楽しみのため、人々の気が向けば行われた。

- ・カジマヤ

旧の十一月八日はカジマヤとって鍛冶屋の家で祭りを行った。近所から沢山人が拝みに来ていた。

秋名の八月踊りの概況・奏演形態とレパートリー

秋名のさまざまな行事において八月踊りは重要な役割を果たしてきた。八月踊りは集落の誰でも参加できる。集落の人々で一つの輪を組み、古老から子供まで互いの顔を見合わせながら歌と踊りを共体験する。若者や子供にとっては見よう見まねで歌と踊りを習得する鍛錬の場であり、踊りの高揚・熱狂の中で一体感を共有し、自らもシマの一員であることをしみじみと味わう体験であった。八月踊りは同じく集落の芸能として重要な手踊りとも、ムチムレ行事の場などを通じて密接な関係を持つが、手踊りがはやし方の伴奏に乗って個々人が自由乱舞するのに対して、八月踊りは全員が基本的には同じ振りの踊りを太鼓のリズムに合わせて群踊するところに独特の意義があるのである。

ここで、あらためて八月踊りを行う機会を列挙すると、以下のようなになる。
現在は行っていない行事、または、行事は行っているが踊っていない行事は
[] でくくった。

行事	日時	場所	太鼓
[桃の節句]	三月三日	小学校付近（ハマサキ）	なし
[男の節句]	五月五日	小学校付近（ハマサキ）	なし
[ハマオリ]	五月節句後の初寅日	小学校付近（ハマサキ）	なし
[盆]	七月十五、十六日	公民館前（※1）	あり
アラセツ	八月初丙		
ショチョガマ祭		ショチョガマ祭場	あり
平瀬マンカイ		平瀬、浜	あり
夕方		公民館前（金久・幾里）	あり
[シバサン]	アラセツ後の壬	公民館前（※1）	あり
[ドンガ]	アラセツ後の甲子	公民館前（※1）	あり
[八月十五夜]			
相撲の中入り		ウドゥン	あり
夜		ウドゥン（幾里）	あり
		林バス（金久）	あり
敬老会	（新暦九月十五日）		
相撲の中入り		コミュニティセンター	あり
ムチムレ	九月十五日前後の3日間	ヤケェブリで集落内十数カ所（※2）	あり

※1 金久の場合、以前は林バス十字路。ここでする踊りをフミチ
ウドゥイ（大道おどり）という。

※2 以前は各戸の門前、庭

こうして見ると、現在よりはるかに多くの行事で八月踊りが踊られていたこ

とがわかるが、これらの行事の中で、八月踊りが行事自体と深く関わって行われる場合と、楽しみのために踊られる場合とに大別できよう。三月三日、五月五日、ハマオリ、盆、シバサツ、ドンガなどでは、主に夜になってから楽しみのために踊る。これに対して、アラセツ、敬老会、ムチムレなどでは、夜に楽しみのために盛大に踊られる一方で、行事（祭祀）の次第の一部に取り込まれて八月踊りが重要な役割を果たしている。

たとえば、敬老会の相撲の中入りの踊りは、相撲という勝負事の中間で行われる。いうまでもなく、勝負とは一種神聖な世界であり、土俵という空間もまた神聖である。仮装などして「余興として」行うとはいえ、勝負に付随する芸能が儀式的に重要な意味をもっていることは古来から変わらない。^(注41)

またムチムレにおいて、踊りが各戸を回る意味も重要である。現在は、集落の運営資金を集めるという目的が強いが、かつては、集めた金（餅）をすべてお開きで使っていたことから、資金集めより、踊りが各戸を回ること自体に意味があったのだろう。踊りが各家を訪れることはキトバレ（厄払い）^(注42)の意味があり、その踊りに対して各家では酒や御馳走を出してもてなすのである。かつてはアラセツの日にもムチムレと同様ヤケヅブリをしたということであり、アラセツとムチムレの儀礼上の同質性・二重性が考えられるかもしれない。

アラセツ行事においても、ショチョガマの歌、平瀬マンカイの歌とともに、八月踊りが重要な位置を占める。アラセツ行事での踊りと歌をまとめると以下のようになる。

- | | | | |
|------------|-------------|-------------|---------------|
| • ショチョガマの歌 | ショチョガマの上 | 立ったまま歌う | (男のみ) |
| • 八月踊り | 倒れたショチョガマの上 | 輪を作り掛合で踊る | (同上) |
| • 六調 | 倒れたショチョガマの上 | 一、二人ずつの乱舞 | (同上) |
| • 平瀬マンカイの歌 | 神平瀬、メラベ平瀬の上 | 立ったまま手だけの踊り | (神平瀬とメラベ平瀬の人) |
| • 八月踊り | メラベ平瀬の上 | 輪を作り掛合で踊る | (メラベ平瀬の人) |

- | | | |
|--------|----|--------------------------|
| ・すす玉踊り | 海岸 | 輪を作り掛合で踊る |
| | | 「神・メラベ平瀬の人と集落
の主だった人」 |

- | | | |
|-------|----|----------------|
| ・八月踊り | 海岸 | 輪を作り掛合で踊る (同上) |
|-------|----|----------------|

- | | | |
|-------|---------|----------------|
| ・八月踊り | 公民館前の広場 | 輪を作り踊る (集落の人々) |
|-------|---------|----------------|

アラセツ行事の中心は、前述の通り、早朝のショチョガマ祭と夕方の平瀬マンカイである。ショチョガマ祭の中心はショチョガマを倒すという行為であるが、倒れるまでは〈ショチョガマの歌〉を歌い続け、倒れた後は八月踊りを踊る。また、平瀬マンカイでは〈平瀬マンカイの歌〉の直後、神平瀬で神女が祈願している最中に、メラベ平瀬側では八月踊りを踊る。そしてムチムレ、相撲の中入りも含め、こうした行事と強く結びついた八月踊りでは、曲目は〈アラシャゲ〉と〈今の踊り〉と決まっている。この二つは八月踊りの中でも常に最初に続けて踊られる曲で、特に〈アラシャゲ〉は極めて儀礼的な意味の強い曲である。〈アラシャゲ〉の旋律の一部は〈ショチョガマの歌〉〈平瀬マンカイの歌〉とも共通している。^(注43)すす玉踊りの後に海岸で踊られる八月踊りは、〈アラシャゲ〉〈今の踊り〉のほか1曲(1986年の場合)踊るが、参加者は平瀬の上で祭をおこなった神役の人々や区長など集落の主だった人々で、人数はあまり多くない。これに対し、夜、公民館前で踊られる八月踊りは、踊りを楽しむための踊りで、老若男女大勢が参加し、踊られる曲数も十曲以上である。

次に秋名の八月踊りの奏演形態について説明する。秋名においては、歌は原則として女から歌い出し、太鼓も女が打つ。太鼓は、奄美地方に広く見られるくさびを胴に打ち込んだ太鼓で、ツィヅィンという。胴の両面に直接皮をあて、紐で締める。くさびをたたいて紐の張力を調節する。歌いだす人のことを「サキダチ」という。図5のように太鼓を持った女性が6、7人、ほぼ年長あるいは歌をよく知っている人の順に時計回りにならぶ。女のサキダチの脇に、男が、年長あるいは歌をよく知った人の順に、今度は反時計まわりに並ぶ。踊りの参加者は最も多くて6、70人くらいである。それ以上になると内側にも

う一つ輪を作り、子供を踊らせる。昔は踊りの輪が二重、三重になることが多かったが、最近は少ない。

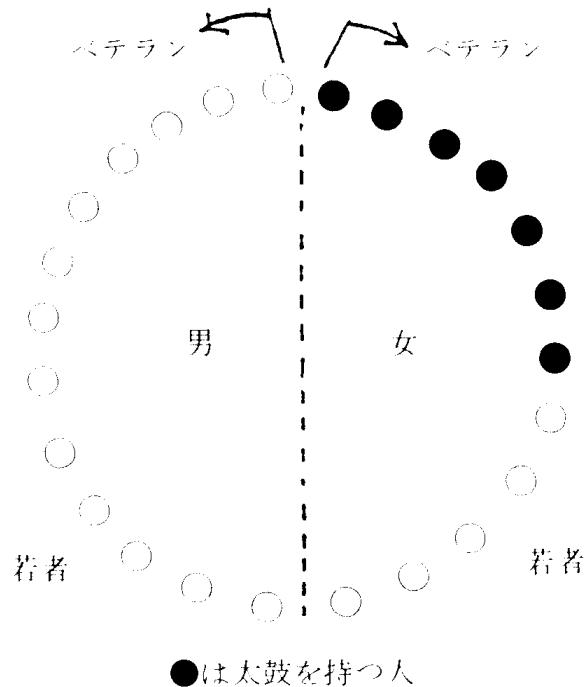


図5 八月踊りの輪の構成

踊りの進行は、まず、太鼓役が太鼓をたたきながら、踊り始める。太鼓のリズムパターンの一周期と踊りの一周期は一致している。踊りの一周期くらいで歌（女）が入る。それに合わせて全員が踊る。女の一節を歌い終わらないうちに男のサキダチが歌い始め、男が全員それにつけて歌う。以下、一節ずつ相手の歌の後半に重ねるように女男交互に歌う。相手の歌の途中で歌い始めるのは、最後まで相手に歌わせると間が開いて踊りが盛り上がらないからだという。こうして歌が進行すると、テンポが次第に速まり、ある速さを過ぎると、原則として女の打ち出しが同じ踊りのまま別の付随旋律を歌い出す。これをホラン(注44)という。曲によってホランのないものから、複数持つものまである。どの曲にどのホランを用いるかは決まっている。名称は、単にホランと呼ばれるものと、「ドンドン節」などのように固有名称を持つものがある。

寄付金や飲物、食べ物のカンパがある場合は、踊りと踊りの間に「東西」のかけ声をかけ披露する。

八月踊りの最後には＜六調＞などの手踊り曲が行われ、歌・太鼓・三線の伴

奏に乗って各人が自由に乱舞してその日の踊りを締めくくる。

八月踊りや三味線つきの歌の旋律のことをマゲという。八月踊りの男と女のマゲは音の高さが異なるだけでなく、旋律自体が少し異なっている。ベテランのサキダチになると、男と女両方のマゲを覚えており、相手方の人数が少ない場合に、相手のマゲを歌って加勢したりする。

八月踊りの歌詞は、多くの場合曲名の由来ともなっている元歌の歌詞が数節あって、後は共通歌詞の中から自由に選んで歌い継いでいく。ただし、まったくめちゃくちゃにどれを選んでもよいというわけではなく、和歌の縁語のように歌詞の中に歌われているテーマに沿って歌詞を選びとっていく方法や、前の歌詞の下句をとってしりとりに近いやり方で歌い継いでいく方法もある。後者を三味線歌ではアブシナラベというが、八月踊りではあまり言わない。6、70代の年配の人であれば、決まった歌詞をどんどん返して歌い継いで行くことができるが、若い世代はなかなかふさわしい返しをできないと嘆く古老もいる。

現在、秋名には八月踊りのレパートリーとしては、以下の13曲が伝承されている（重田『奄美民謡（秋名） 八月踊歌集録』、『秋名民謡集』および、1986年、89年、90年の実況録音による）。各曲において、詞型とは最もよく歌われる歌詞の詞型、唱歌形式とは旋律一節における各句の反復と（8886、7775 調歌詞の各句を ABCD と表している）ハヤシ詞の入り方を簡略に示した（注45）ものである。

1. <アラシャゲ>

詞型 8886 踊り周期 6 拍 反時計回り

唱歌形式 AB ハレ CD ヨンドハレ C (エヤリヤヤレヤ) CD ヨンド

八月踊りで一番最初に踊られる儀式性の強い踊り。旋律の一部は〈ショチョガマ〉の歌、〈平瀬マンカイの歌〉と共通する。

ホラシ 詞型 8886

2. <今の踊り>

詞型 7775 踊り周期 6 拍 時計回り

唱歌形式 AB ソリヤ (オヨ) CD ヤイキュラサノハリヤコリヤショシヤ

イキュラサ

〈アラシャゲ〉に続いて必ず踊られる。〈今の踊り〉以降はどの踊りを踊ってもよい。詞は大和ことばの 7775。

ホラシ 1 詞型 4775 7775 の 1 句目の 3 シラブルを歌わない。

唱歌形式 A へへヤレコレ BCD

ホラシ 2 (ドンドン節)

7775 でも 8886 でも歌われる。このあとにホラシ 3 (口説)^(注46) がつくことがある。また、さいごに「ヨーイヤ ヨイヤ ヨイヤ ヨイヤ ヨイヤ」というカケ声がつくことがある。

3. <喜界湾泊まり>

詞型 8886 踊り周期 14 拍 (7 拍)

唱歌形式 AB ハレ C コリヤ D ヤヨント C (マタオセオセ) C コリヤ D

足の動きが難しいため、若い人は不得意。

4. <ほーこらしや>

詞型 8886 踊り周期 20 拍

唱歌形式 ABCD アナレイショナ CD

ホラシ 1 詞型 8886 唱歌形式 AB ハレ CD ヤショレ

ホラシ 2 (ドンドン節)

踊りやすい踊りという。

5. <ほーめらべ>

詞型 8886 踊り周期 16 拍

唱歌形式 AB ヨハレ C ホリヤ D ヤショレハレ C ホリヤ D ヤショレ

ゆったりした速さの踊り。歌は「なつかし」く、踊りは「temanuki がゆったりした」踊り。最近はあまり踊らない。年輩の人は踊れるが若い人は踊れない。旋律は男と女とかなり異なる。

6. <あまだ^さ下がりや>

詞型 8886 踊り周期 18 拍

唱歌形式 A ハレ BC ハレ D ヤショレ C ハレ D ヤショレ

ホラシ (ドンドン節)

中間の速さの踊り 6、70 代の人は踊るが若い人は不得意。

7. <あがんむらくわ>

詞型 8886 踊り周期 20 拍

唱歌形式 AB ハレ CD ヤシ ヨレハレ CD ヤシ ヨレ

ホラシ (ドンドン節)

旋律は <波打際ぬいぶ> に酷似しているが、踊りが異なる。ふだんあまり踊らない。

8. <波打際ぬいぶ>

詞型 8886 踊り周期 14 拍

唱歌形式 AB ハレ CD ヤシ ヨレハレ CD ヤシ ヨレ

旋律は <あがんむらくわ> に酷似しているが踊りが異なる。

9. <シュンカネクワ>

詞型 8886 踊り周期 14 拍

唱歌形式 ABCD サーサシュンカネクワ CD サーサシュンカネクワ。

踊りの手数が多いが、覚えてしまうと踊りやすい。ホラシのテンポが速くなると踊りきれなくなることもある。盛り上げる踊り。

ホラシ 1 (ウントノマイ) 詞型不定 踊り周期 11 拍

踊りが変わる。ウントノマイとは昆虫のかまきりのこと。かまきりが狂って踊る振りに似ている。

ホラシ 2 (口説)

ホラシ 3 (ドンドン節)

ホラシ 1 の後はホラシ 2、3、1 を適宜繰り返す (順不同)^(注47)

10. <曲がりよたかちぢ>

詞型 8886 踊り周期 13 拍。

唱歌形式 AB ハレ B (ハレ B) CD ハレ D

<ちょちんぐわ> ともいう。

11. <赤木名観音寺>

詞型 8886 踊り周期 14 拍

唱歌形式 ABCD ハレヨイサヨイサ

ホラシ (ドンドン節)

12. <てらましょ>

詞型 8886 踊り周期 16 拍 反時計回り

唱歌形式 AB ハレヨハイ CD ヤシヨレ D

ホラシ (ドンドン節)

13. <ヒヤスガヘー>

詞型 8886 踊り周期 14 拍

唱歌形式 AB ヒヤスガヘー CD ヒヤスガヘー CD ヒヤスガヘー

ホラシ (ドンドン節)

資料解説

・資料1 秋名八月踊り歌詞一覧 あいうえお順

本資料は秋名集落の八月踊りにおいて現在伝承されている歌詞を記録するものである。作成に当たっては、『奄美民謡（秋名） 八月踊歌集録』（資料2に翻刻）および『秋名民謡集』をもとにした。両歌集に含まれない歌詞を一部実況演唱歌詞から補充した。利用の便宜の為に歌詞の冒頭をアイウエオ順に並べ、歌意を記した。歌意については主に金久地区在住の重田留蔵氏および山田武丸氏にうかがった。重田氏に関しては次項を参照されたい。山田氏は大正5年金久地区に生まれ、戦前は一時大阪に出られた。戦後復員してからは秋名在住の歌者として各種コンクール、大会で活躍されている。また長らく秋名重要無形民俗文化財保存会（ショチョガマ・平瀬まんかい）の会長も勤められ、八月踊りでもリーダーとして伝統行事・芸能の継承に尽力されている。

・資料2 『奄美民謡（秋名） 八月踊歌集録』翻刻資料

本資料は秋名金久地区在住の重田留蔵氏が作成された同名歌集を翻刻したものである。重田氏は大正3年金久地区に生まれ、終戦後復員してからは村の古老達から八月踊りを含む民謡・行事歌の歌詞を丹念に聞き集め、1985年にこの歌集を発行された。現在秋名で民謡教室を開いて集落の人々に民謡を教えるなど、伝統文化の継承と普及に尽力されている。重田氏はさらに『秋名民謡集』も発行されているが、収録歌詞がかなり本歌集と重複しているため、重複した

い歌詞については資料1に載せた。

本資料は、外から訪れる筆者のような者からは伺い知れないほど、地元の方が深く統合的に体得した自らの口承文化を、いかに自己把握しいかに文字として対象化しようと試みているかを示す貴重な民俗誌的資料といえることができる。

・資料3 実況演唱歌詞資料

本資料はある一晚の踊りの場で、実際にどのような歌詞が演唱されたのかを示す記録である。八月踊りの演唱では、常に男女が一節ずつ歌を掛け合って進行していく。そこにおいて、一回々々男対女の機知をこらした歌詞の掛け合いが交わされるのであり、いかに歌詞のナラベが展開されるかが八月踊りの盛り上がりや参加する人々の共感を決定する重要な要素である。しかしこの掛け合いにおける歌詞の選択は、男女各々の打ち出しのリードに任されており、演唱毎に変化する動的なものであり、資料1, 2のような静的な資料からは浮かび上がってこない。

そこである日の八月踊りの奏演において演唱された全歌詞の記録を試みとして提示するものである。^(注48)ただし八月踊り各曲旋律は、各々固有のはやし詞や句の反復構造を持っている(資料4の旋律採譜参照)。その点は本資料では省略し、元の歌詞の形(8886, 7775)で示した。

本資料からは、秋名の八月踊り演唱において、どのような歌詞が尊ばれ、あるいは好まれるのかを今後考察する場合の基礎資料となるであろう。

・資料4 秋名八月踊りの旋律採譜・舞踊採譜

本資料は秋名八月踊りの旋律採譜、舞踊採譜記録である。旋律採譜については、実際の場合での演唱方法のできるだけ忠実な記録となりうるように男女旋律のピッチ、男女旋律の重なり方、一曲中のテンポの変化などの要素を考慮した。もちろん同じ曲といえども演唱毎にこれらの要素は変化するし、個人によって旋律の動きが微妙に異なる場合があるので、一回の演唱の記録だけではなお不完全であることは充分認識しておくべきであろう。

舞踊採譜については、八月踊りの基本的な動きの記録を目的とした。秋名の八月踊りの各曲の踊りは決まった振り付けの周期をもっている。全員その踊り

のパターンに合わせて踊るのである。ただしこの踊りの拍周期は、旋律一節の拍数とは無関係である。踊りと旋律は、共に太鼓が作り出す等拍リズムに乗って、お互いには独立的に進行するのである。ただし全員が同じ踊りのパターンで踊るといっても、例えば男と女、ベテランと初心者では微妙に踊り方は異なっている。一つの振りを女性はより優雅に、男性は力強く踊る傾向があり、初心者や若者は直線的・大振りになりがちだが、ベテランは円熟した柔らかさを感じさせるのである。つまり同じ踊りパターンの中で、各人が十分に個性を発揮させることが可能なのである。しかし今回はそこまで細かな各人の動きの違いの記述は諦め、女性の踊りの動作を中心とした基本的な踊りのパターン記述に止めることとする。踊りに関しては金久地区在住の隈元秋広氏(大正12生)、隈元シズ氏(大正12生)、永吉サユ氏(大正12生)に、筆者らの撮影したビデオを見ていただき、踊りの周期の始まりなどについて御教示いただいた。3人とも、八月踊りの中心的な歌い手、踊り手として活躍されている方々である。踊りの記譜法については、沖縄の民俗舞踊採譜研究で多大な成果を上げている小林公江氏の記譜法(通称鳴坂譜。小林1982参照)を採用した。

おわりに

本論は秋名八月踊りの実態報告を目的とするものであるが、今後の他地域との比較検討などに向けて、現時点で気づかれることを不完全ながらいくつか指摘しておきたい。

第一には、種々の年中行事での八月踊りの意味付けについてである。奄美では秋名にしか伝承されていないショチョガマ・平瀬マンカイ行事において、これまで見てきたように八月踊りは欠かせない重要な役割を担っている。しかしショチョガマ・平瀬マンカイに類する行事が行われていたと確認できる地域は竜郷町・名瀬市東シナ海側だけである。一方八月踊りの方は奄美大島では行われない集落はなかったと言えるほど広く分布しており、しかもミーハチガツと呼ばれる旧暦八月の行事と密接に結びついている。すると、ショチョガマ・平瀬マンカイと八月踊りは淵源から分かち難く結びついていたというよりは、行

事としては元々別個の要素がある契機によってアラセツ行事で複合したと見るのが妥当ではないだろうか。

また秋名では前述のように旧暦九月のムチムレ（種下ろし）行事でヤケェブリ（家回り）が行われ、集落の各家では〈六調〉などによる手踊りと共に、八月踊りも踊られている。

この種下ろしの家回りにおける手踊りと八月踊りの関係はどのように考えるべきだろうか。年中行事の項で述べたように、秋名ではかつてアラセツの日にもムチムレと同様のヤケェブリをしていたという。竜郷町の他集落ではタネオロシの家回りも手踊りではなく八月踊りで行ったという集落もあり、家回りはアラセツ・シバサンに八月踊りで行ったという集落もある。^(注49)^(注50)

〈六調〉、〈天草〉など手踊りの曲は 7775 調の大和的歌詞で歌われることや、曲名が南九州との関連を思わせるものが多いことなど、八月踊りと比べて比較的新しい時代に薩摩経由でもたらされたものと考えられる。^(注51)

元来はアラセツ・シバサン、種下ろし行事いずれに関わらず家回りは八月踊りで行っていた所に手踊りが流行後混入したか、もしくは種下ろしの家回りは初めから手踊りと結びついた形で広まりそこに後から八月踊りも加わった、という二つの可能性が考えられる。ちなみに笠利町方面では（段々減少しつつあるが）一般にアラセツ・シバサンに八月踊りを踊りながら家回りが行われ、旧暦九月の種下ろしは手踊りで家回りするという傾向がみられる。いずれにせよ今後他地域のデータと比較考察すべき問題である。

第二に、秋名では八月踊りのレパートリーとして笠利町諸集落の〈祝つけ〉（内田 1990、久万田 1991 参照）、西仲間〈おぼこれ〉（内田 1991 参照）等に対応する儀式性の強い長大旋律を持たないことである。この旋律は実は秋名では〈平瀬マンカイの歌〉と〈くいり歌〉が対応する。^(注52) 笠利方面では〈祝つけ〉において、この長大旋律に引き続きテンポを早めて〈アラシャゲ〉旋律（秋名の〈アラシャゲ〉と同系統）が演唱される。つまり〈アラシャゲ〉は〈祝つけ〉中に組み込まれた形となっている。

秋名の平瀬マンカイ行事においては、神平瀬・メラベ平瀬両岩の間で〈平瀬マンカイの歌〉が歌われた後、メラベ平瀬側で八月踊りの〈アラシャゲ〉、〈今の踊り〉が踊られる。ここから二様の解釈ができる。つまり秋名の〈平瀬

マンカイの歌>に<アラシャゲ>を続けるやり方が他地域に模倣されて<祝つけ>が八月踊りのレパートリーに加わり、今なお特別な儀式歌としての性格を保っているのか、あるいは逆に笠利方面などの<祝つけ>後半に<アラシャゲ>旋律を歌う様式が先にあり、秋名ではそれから長大旋律部分を取り出して<平瀬マンカイの歌>として独立させたという見方である。つまり平瀬マンカイという行事は他地域八月踊り様式成立の淵源なのか、もしくは他地域八月踊りから派生的に成立したものなのかという問題である。このことは奄美大島の八月踊りの成立過程を想定する上で非常に重要な鍵を提供しているが、諸地域資料との厳密な比較考察を要するので本格的な検討は別稿に譲りたい。^(注53)

21世紀をあとわずかに控えた現在、人々の暮らしも一昔前とは大きく様変わりした。また奄美全域に共通の慢性的過疎状況により、秋名でもシマを支える活力である青年層が減少している。これまで集落の人々の心を求心的に結び付けてきた八月踊りも、そのあり方と意味の変化を余儀なくされている。しかし八月踊りという見事なまでに洗練と奔放、厳粛と歓喜とが一体化した芸能の中に、脈々と伝わってきたシマのウヤフジ達の精神と情念の振幅が、どのような形であれ未来まで受け継がれていくことを願わずにはおれない。

[追記]

本研究は「沖縄・奄美の民俗舞踊の構造比較研究」の一環として、平成3年度沖縄県立芸術大学振興財団の助成を受けることができた。ここに関係者の方々に謝意を表します。また筆者が長年参加してきた東京芸術大学民族音楽ゼミナールからは、秋名に関する貴重な資料を多数提供していただき、ここにお礼申し上げます。

筆者が1986年に初めて秋名を訪れてから足掛け7年になる。その間、いつもお忙しい仕事の合間をぬって快く私達のお相手をして下さった秋名の皆様に心から感謝いたします。

調査日時

- 1986年9月8日 アラセツ行事についてインタビュー 於 山田武丸氏宅
話し手：山田武丸氏（大正5生）、隈元秋廣氏（大正12生）、重田留蔵氏（大正3生）
聞き手：東京芸術大学民族音楽ゼミナール（含寺内直子）
- 1986年9月9日 ショチョガマ祭実況収録 於 ショチョガマ祭場
演唱：ショチョガマにのった男性達
調査者：東京芸術大学民族音楽ゼミナール（含久万田晋、寺内直子）
- 1986年9月9日 平瀬まんかいの祭歌などインタビュー 於 林貞子氏宅
話し手：林貞子氏（大正3生）
聞き手：東京芸術大学民族音楽ゼミナール（含寺内直子）
- 1986年9月9日 平瀬まんかい、公民館前八月踊り実況収録 於 平瀬、公民館前
演唱：山田武丸氏、林貞子氏ほか秋名の方
調査者：東京芸術大学民族音楽ゼミナール（含久万田晋、寺内直子）
- 1986年9月10日 八月踊り、イトゥ、種おろしについて 於 山田武丸氏宅
話し手：山田武丸氏、隈元秋広氏、林貞子氏、壙サカ氏（大正8年生）
聞き手：東京芸術大学民族音楽ゼミナール
- 1986年11月21日 第36回全国民俗芸能大会リハーサル 於 日本青年館
演唱：山田武丸氏、林貞子氏ほか秋名の方々
調査者：東京芸術大学民族音楽ゼミナール（含久万田晋、寺内直子）
- 1987年9月9日 年中行事について 於 山田武丸氏宅、肥後奥実氏宅
話し手：山田武丸氏、重田留蔵氏、肥後奥実氏（明治27生）
聞き手：久万田晋、寺内直子
- 1988年8月28日 年中行事について 於 山田武丸氏宅
話し手：山田武丸氏 聞き手：久万田晋、寺内直子
- 1989年9月1日 年中行事、イリ歌について 於 山田武丸氏宅
話し手：山田武丸氏 聞き手：久万田晋、寺内直子
- 1989年9月3日 アラセツ当日 ショチョガマ実況収録、隈元秋広氏インタビュー
話し手：隈元秋広氏、山田武丸氏
聞き手：東京芸術大学民族音楽ゼミナール（含寺内直子）
- 1989年9月3日 平瀬まんかい、八月踊り実況収録 於 平瀬、公民館前
演唱：秋名の皆さん 調査者：東京芸術大学民族音楽ゼミナール
- 1990年9月28日 アラセツ当日 ショチョガマ、平瀬まんかい、八月踊り実況収録
演唱：秋名の皆さん 調査者：東京芸術大学民族音楽ゼミナール

- 1990年9月28日 林貞子氏インタビュー 於 林貞子氏宅
話し手：林貞子氏 聞き手：東京芸術大学民族音楽ゼミナール
- 1990年9月28日 年中行事について 於 窪田圭喜氏宅
話し手：窪田圭喜氏 聞き手：東京芸術大学民族音楽ゼミナール
- 1991年10月17日 種おろし、八月踊り、イリ歌について 於 山田武丸氏宅
話し手：山田武丸氏 聞き手：久万田晋、寺内直子
- 1991年10月19日 山田武丸氏インタビュー、種おろし実況（金久・2日目）収録
演唱：山田武丸氏、金久の皆さん 調査者：寺内直子
- 1991年10月21日 老人クラブ種おろし実況収録
演唱：金久の皆さん 調査者：寺内直子
- 1991年12月11日 八月踊り歌詞について 於 重田留蔵氏宅
話し手：重田留蔵氏 聞き手：久万田晋、寺内直子
- 1991年12月12日 八月踊り、種おろしについて 於 山田武丸氏宅
話し手：山田武丸氏 聞き手：久万田晋、寺内直子
- 1992年1月24日 年中行事について 於 山田武丸氏宅
話し手：山田武丸氏 聞き手：久万田晋、寺内直子
- 1992年3月13日 年中行事・八月踊りの歌詞について 於 山田武丸氏宅
話し手：山田武丸氏 聞き手：久万田晋、寺内直子
- 1992年3月14日 八月踊りについて 於 隈元秋広氏宅
話し手：隈元秋広氏、隈元シズ氏（大正12生）、永吉サユ氏（大正12生）

注記

- 注1：本姓 久万田. 沖縄県立芸術大学非常勤講師。
- 注2：現在代表は東海大学小柴はるみ教授。同ゼミナール参加者によるこれまでの奄美調査成果としては、内田1990、1991、酒井1989、久万田1990、1991等がある。また同ゼミの執筆により『日本民謡大観 奄美諸島篇』を日本放送出版協会から今年刊行予定である。
- 注3：ウントノチは嘉渡の豪農、麻福栄志の家。林1982 p.15 参照。
- 注4：『竜郷町誌 民俗篇』 p.131
- 注5：同上 p.141
- 注6：『竜郷町誌 歴史篇』 p.588
- 注7：『竜郷町誌 民俗篇』 p.142
- 注8：同上 p.149-151
- 注9：いわゆる米から作る白いお神酒は、旧暦八月の行事でしか作らない。
- 注10：最近ではサンゴンの料理を作る家も少なくなり店に頼んだ折詰でやるようになってきた。
- 注11：旧暦九月のムチムレのヤケェブリとは区別されている。
- 注12：ブクギィはとても堅い木で、食堂などで組板に使うという。
- 注13：名瀬市有良では正月の十六日と盆の十六日は必ず男がその日は一日中炊事の方を行い、正月の十六日の晩はわざわざ夫が弁当を作って奥さんに持たせ、女性が集まって遊ぶ。この習慣は現在でもずっと続いているという。
- 注14：山田武丸氏によればこの日山に行くと木を倒す音がするとか不思議な出来事を何回か人から聞いたという。
- 注15：なぜ十八日のことをヨウカとハツカトいうかは、山田武丸氏もよく分からないという。
- 注16：現在は蒸し器を使うので20分ほどでできるが、昔は二升、三升と作ったので女性は一日仕事であったという。
- 注17：五月五日にも同じようにムチヌハツを配って回った
- 注18：他集落ではこの日をヤドリセックというところもあるが、秋名ではいわないという。『竜郷町誌 民俗編』参照。
- 注19：海側の金久の人は内陸の里集落の人を「サトぬマヤスクフ」（里集落の猫顔のふくろう）と行ってからかうこともあったという。
- 注20：昔は小学校のそばにある小川で子供がよく魚釣りをしたが、夕暮れまで釣りをしていると必ずケンムン（かっぱ）が出るから、もし出てきて「相撲取ろう」

といわれた時は「御飯にピラヅネ（蕪）を食べてきた」と言い返せばなかなか向かってこないからと子供は親から教えられたという。ケンムンは蕪が嫌いということだ。また八月のコウソガナシのまつりにも蕪を必ず使う。

注21：山田武丸氏は、はっきりと日取りは記憶にないということであった。『竜郷町誌 民俗編』には旧五月の丑の日と記されている。(p 792)。

注22：編み方は旧八月のアラセツのショッチョガマで作るシルと同じ要領という。

注23：屏風は高さ1メートル、長さ一間くらい。最近では屏風を使う家はなくなった。

注24：さらに以前は旧林バス十字路前。ここでする踊りをフミチウドゥイという。

注25：秋名重要無形民俗文化財保存会『記念誌』参照。

注26：『竜郷町誌 民俗編』 p.169, 171。

注27：大熊のヒチャガマでは少年が中心として小屋を作り、家族がご馳走を作ってきて食べる。「船頭」という役の少年二人が小屋に上って唱える言葉は、秋名のグシの唱える稲の豊作を願う祭詞によく似ている。『名瀬市誌 上巻』 p. 538 - 540)

注28：林 1982。

注29：盆の時に迎える仏様とアラセツのコーソガナシは別のものと認識されている。

注30：種おろしのような現金の寄付は行なわなかったという。

注31：秋名重要無形民俗文化財保存会『記念誌』参照。

注32：北に倒れると「下あぶしまくら」、南に倒れると「上あぶしまくら」として来年が豊年になるという。『竜郷町誌 民俗編』 p. 154-155。

注33：林 1982、『名瀬市誌 上巻』 p. 177、小川 1986 参照。

注34：『竜郷町誌 民俗編』 p. 152、『記念誌』 p. 8。

注35：『竜郷町誌 歴史編』 p. 562。『竜郷町誌 民俗編』 p. 155。

注36：「マンカイ」または「マンキ」「テマンキ」などは現在会話でも使われている言葉である。たとえば、子供に「テマンキしてごらん」（踊ってごらん）、「あの人のテマンキは上手だ」などというふうに使う。

注37：1986年には、「今の踊り」の後、「てらましょ」が踊られた。1990年には、「今の踊り」の後、「てらましょ」が踊られた。

注38：『竜郷町誌 民俗編』 p 143, 144

注39：窪田圭喜氏談。

注40：他集落への若者の移動の際に事故がおきてからこうなったという。

注41：奄美各地での豊年相撲の「中入り」において、イッソと呼ばれる仮装者や握り飯を担いだ力士らによる行進の形態は、秋名の例も含めて儀礼と芸能の関わりという観点から考察する必要がある。

注42：不幸があった家は回らない。

注43：旋律の類似について、地元の人には似た部分もあるがまったく違った歌と認識している。〈アラシャゲ〉の旋律の持つ儀礼的意味については稿を改めて述べたい。

注44：大島各地でこの付随旋律の名称は様々である。例えば笠利町笠利ではクズシ（久万田 1990、1991）、笠利町宇宿ではアラシャゲ（内田 1990）という。

注45：小川 1979 p. 15 参照。

注46：このホランに地元の呼称はないが、旋律は奄美、沖縄に広く分布している「口説」と同じなので、ここでは便宜的に〈口説〉と呼ぶ。）

注47：1990年の演唱ではホラン 1 2 3 2 1 3 2 1 の順で歌った。

注48：久万田1990において同様の観点から資料を提示している。

注49：『竜郷町誌 民俗編』において円 p. 213 竜郷 p. 256 大勝 p. 350 川内 p. 369。

注50：同上において瀬留 p. 298 赤尾木 p. 785。

注51：もちろん八月踊り曲にも 7775 調の歌詞で歌われるものがあり、これらについても当然九州からの伝播を考えなければならない。

注52：この旋律の特色としてヨシナ系のハヤシを持つこと、ABCDCCD の反復形式をもつこと（小川 1979）、一晩の踊りの最初や輪の組み始め、家回りにおける各家での一曲目に踊られること等が指摘できる。この旋律を八月踊りのレパートリーとして〈いり歌〉と呼ぶ地域も多い。内田 1991 p. 150 参照。

注53：小川学夫氏は、この〈平瀬マンカイの歌〉や八月踊り〈アラシャゲ〉、笠利の〈祝つけ〉等が反復形式、ヨシナ系ハヤシという点から沖縄の古典音楽の儀式歌〈かぎやで風〉と同系統である可能性を指摘している（小川 1979, 1986）。秋名がノロ制度の伝承されていた地であることから、沖縄からの儀式歌の伝播の可能性も想定できる。

参考文献

- 秋名重要無形民俗文化財保存会『記念誌』1985
- 内田敦「奄美大島笠利町宇宿の八月踊り」1990 『民俗芸能研究』11
- 内田敦「奄美大島住用村西仲間の年中行事における八月踊り」1991 『南日本文化』23
- 小川学夫「秋名の平瀬マンカイと八月踊」1986 『民俗芸能』第67号
- 小川学夫『奄美民謡誌』1979 法政大学出版局
- 小野重朗『奄美民俗文化の研究』1982 法政大学出版局
- 小野重朗「ショッコガマ・平瀬マンカイ（大島郡龍郷村秋名）」1971 『鹿児島県文化財調査報告書』18
- 久万田晋「奄美大島城前田の八月踊りー歌詞の局面を中心としてー」1990 『東京芸術大学音楽学部紀要』15
- 久万田晋「奄美大島笠利町城前田の八月踊り歌」1991 『沖縄芸術の科学』4。
- 小林公江「本部町のウンデーク 国頭、大宜味、旧久志村との比較を中心として」1982 『南日本文化』14
- 酒井正子『奄美・徳之島の民俗音楽における伝統と変化の研究ー音楽文化の創造性の原点を考える』1989 トヨタ財団1987年度研究助成研究報告書
- 重田留蔵『奄美民謡（秋名） 八月踊歌集録』1985 私家版
- 重田留蔵『秋名民謡集』私家版 発行年不明
- 竜郷町誌歴史編編さん委員会『竜郷町誌 歴史篇』1988 竜郷町教育委員会
- 竜郷町誌民俗編編さん委員会『竜郷町誌 民俗篇』1988 竜郷町教育委員会
- 竜郷町企画課『1991 町勢要覧』1991
- 名瀬市役所『名瀬市誌 上巻』1968（再版1983）
- 林蘇喜男「ショッコガマと平瀬まんかい」『奄美のまつりと芸能ーまつり32・33・34号合冊』1982 錦正社。
- 林蘇喜男「田神祭『ひちやがま』について」『奄美の文化 総合的研究』1976 法政大学出版局。
- 松原武実「笠利町・竜郷町・名瀬市の八月踊資料」1990 『南日本文化』22。
- 湧上元雄・山下欣 -『沖縄奄美の民間信仰』1974 明玄書房

資料1 秋名八月踊り歌詞一覧

あいうえお順

凡例

本資料は、秋名集落の八月踊りにおいて現在伝承されている歌詞を記録するものである。作成にあたっては、秋名金久地区在住の重田留蔵氏による歌集『奄美民謡（秋名）八月踊歌集録』（資料2参照）および『秋名民謡集』をもとに、両歌集に含まれない歌詞を一部実況演唱から補充した。

- ・本文は漢字仮名まじりで表記した。
- ・ルビ、および平仮名部分はなるべく発音に近い表記を心がけた。
- ・漢字は重田氏の歌集の漢字表記をもとにしたが、沖縄の琉歌集等の漢字づかいも参考に、一部改めた箇所もある。
- ・歌詞は、冒頭の語句によってあいうえお順に並べ、001から順に通し番号を付けた。
- ・歌詞のヴァリエーションについては、4句のうち2句以上異なる場合は別番号を付したが、1句以下の場合は〔 〕内にヴァリエーションを記した。
- ・歌意は本文下の（ ）内に記した。7775調の大和言葉の歌詞は歌意を略した。

001	アカナカノミヅ 赤木名観音寺や	イツブ 材 伊津部かち直ろ	材 材 直ろ直ろに	朴 な音ばかり
	(赤木名観音寺を伊津部から移そう、移そう移そうとかけ声ばかり)			
002	シラキ あがる白雲に	ナ 縄かけてぬしゆり	およばらぬかなに	テ 手さしぬしゆり
	(あがる白雲に縄をかけてどうするとか、身分違いの恋人に手を差しだしてどうするとか)			
003	アガムラアカクワ あがんむらあかくわ	ユキムラヌハグキ 雪むらぬはぐき	キヤンメニナレバ きやんめになれば	ユバシチュミチ ゆばしちゆみち
	(あがん村のアカクワは雪のように白い歯ぐきだ、恋しいになれば男を呼んで来て一緒にしてやろう)			
004	アキナカ 秋名親ノロや	ダミソトヨマルル だみそとよまるる	シマ ヨ 島そろてお祝べ	シヤヌキヨラサ しゃぬきよらさ
	(秋名親ノロは何とおっしゃる方でしょう、島をあげてお祝いをする美しさよ)			
005	アキナカ 秋名親ノロや	ダミソトヨマルル だみそとよまるる	シマ 島ぬあるなげや	ウ 祝ておせろ
	(秋名親ノロは何とおっしゃる方でしょう、島をあげてお祝いをしてさしあげましょう)			
006	アキナ 秋名ノロみとろ	ダミソトヨマルル だみそとよまるる	ヨ アソ ももそとり寄せて	キ 遊ばしやる美らさ
	(秋名ノロ様は何とおっしゃる方でしょう、百草を取り寄せて遊んでいらっしやる美しさよ)			

- 007 あげらしやもあらぬ あざらしやもあらぬ とかくうてんとぬ つむりさだめ
(語意未詳 すべては太陽(天)の定めるところだ)
アサシ シュ ヒサセ
- 008 朝汐みちやがりや しよちよがまぬおよべ よね汐みちやがりや 平瀬およべ
(朝汐が満ちる時はシヨチヨガマのお祝いだ、夕方の満ちる時は平瀬のお祝いだ)
アセハタ テノゲエ カミ ト ウシ
- 009 汗肌ぬ手拭 形見取てからや 後ろかるがると いもりしよせら
(汗肌をふいた手ぬぐいを 形見にもらったからには、後に思い残すことなく旅だって下さい)
アソ リ シマ
- 010 遊びずき吾ぬや とめてとめららぬ 鳥ぬしりくちに とめてあそほ
(遊び好きの私は相手を捜しても見つからない、村のはずれで捜して遊ぼう)
アソ ヨ アサ ヨネ メエ ヨカ トリウタ メエ ヨ ア
- 011 遊ぶ夜ぬ浅さ 宵と思ば夜半 鳥歌うと思めば な夜ぬ明ける
(遊ぶ夜は短いもので宵と思うともう夜半だ、鳥が鳴いたと思うともう夜が明ける)
ハマ ウタ アトト
- 012 あのよめえわらべえの今ぬ歌きけば やはや後々に ちしよるごとに
[あのよねせんきゃの]
(さあさあ娘さん [若者たち] の今の歌を聞いたら、順序よくその後に歌をつけましょう)
アブラ ハネ コメ ウタ コ
- 013 油おしみて 早寝をしたら 米の高いのに 子ができた
(歌意略)
アブラ ガマシ アメフ ウ ヨル
- 014 油つけ頭 雨降ればしわじゃ きゅらさ生まれれば 夜ぬしわじゃ
(びんつけ油をつけた頭は雨降りが心配だ、美しく生まれれば夜が心配だ)
ウサ メ トウジ メ
- 015 あまだ魚ぬ下がて まやぬ目ぬだるさよ きゅら妻かめて わん目ぬだるさ
(あまだに魚が下がって見つめる猫の目はだるい、美妻をもらって見つめる私の目もだるい)
サ サ
- 016 あまだ下がりややひゅんかまち やんくぶ下がりややとちぶる
(あまだにはマンビキの頭が下がり 軒には大かほちゃが下がっている、
いじ
出ていもれうっちゅんきゃ にしゆておせろ
(私の所へいらっしやいお年寄り達 煮てさしあげましょう)
アメ シ カ
- 017 雨ぬなまぶりや 道ぬなびろさり かなとなまあそび 別れぐるしゃ
(雨のしよは降りは 道がすべりやすい、恋人と中途半端な遊びは 別れるのがつらい)
シツ
- 018 あらしついてもいきゆりしばさしもいきゆり 節としばさしや やねどきやおろ
(アラセツもシバツシも過ぎて行ってしまった、アラセツとシバツシは来年またやって来て下さい)
アソ トリ ウタ
- 019 あらしゃげてなきやと 遊ばやらめば てだのあがるがれ 鳥ぬ歌うがれ
(盛り上げて貴方たちと 遊びましょう、太陽があがるまで 鳥が歌うまで)
ア トケル ウス
- 020 荒れればもたちゆり 凧ればもたちゆり かながおもかけや 忘れぐるしゃ
(海が荒れても 凧でも立つのは、忘れられない恋人の面影だ)
ア ヨル
- 021 合わんてのげえに あわそにすれば 夜ぬよがらすの なきわかれ
(合わない手拭のように 無理に合わそうとしても、夜の夜鳥のように泣き別れになるだけだ)

- 022 あんま想影や 時々どたちゆる かながおもかげや 朝またちゆり
(お母さんの面影は時々たつが、恋人の面影は朝な夕なたつ)
タマカニ シツ ヲカ
- 023 いきよ玉黄金 よしでよしまれめ かほな節あらば またち拝も
(いきなさい恋人よ、別れは惜しんでも惜しみきれないが、めぐり合わせがよければまた会いましょう)
クラ キ トク ニ ハナ フユ
- 024 いくつ比べても 気の毒どなりよる もとに似る花の 一もとねらぬ
(いくつならべても気の毒である、もとの花(死んだ夫や妻)に似た人は一人もいない)
ウケ キョ ニワタ
- 025 池うけて美らさ おしどりめえどり 庭立ててきよらさ くがにいうなりい
(池に泳ぐ美しい おしどりのつがい、庭に立っている美しい私の姉妹よ)
アトメカ タ オ オ キリ
- 026 いこいこにすれば 後想影ぬ立ちゆり 居ろ居ろにすれば 義理ぬうとるしや
(行こうとすれば面影が残るが、居ようとすれば義理だてが恐ろしい)
イナ マチ トコ
- 027 一代ちどいしゃる 末代ちどいしゃる 男あやばなや あれやこれや
(一生ずっと末代までずっとと契った夫であるが、男の浮気心はあの女この女と目が移る)
イツ タマカニ ノテ リ
- 028 何時もこのごとに あれば玉黄金 何故にこのしのき 吾ぬや[わがえ]とりゆり
(いつもこのごとくにあればいい人よ、どうしてこのつらさを私は味わうのだろう)
イマ ト セ トナラ ナ
- 029 今の踊りは よう勢がそろた 踊り習わば いま習え
(歌意略)
ウカ シ ウカ シ ウカ 托カ タ
- 030 拝みばど知りゆる 拝まず知りゆめえ 拝で想影ぬ 立てばきゃししゆり
[まさて立ちゆり]
(会ってはじめてあなたを知りました会わなかったら知り合うこともなかった
会ったからこそ面影がたってどうしようもない(まさって思い出されるのだ))
ウヨ ヲカ オ ヨ
- 031 浮き世かりじまに 永さ居らりよめえ あそでとくみしよれ かりぬ世さめ
(浮き世仮の住処に永くいられようか、楽しいこともしなさい仮の世なのだから)
ウキ キ ナ ワキ ウア アツ ハツ マゴ オメゴ
- 032 老木切ち後や 若木めてつぎゆり 親しよ跡継ぎしゆ 初のう孫[思子]
(古木を切った後は若木を継ぐ、親の後を継ぐのは初の孫[親思いの子])
ナ ナ
- 033 うしうかば鳴りゆめえ さげてうしゃんち鳴りゆめえ わんかなおもがねが ひちどなりゆる
(置いておいても下げておいて鳴るものか、私のいとしい彼が弾いてこそ鳴る(三線な)のだ)
ウスジ ミスイ カ
- 034 分水嶺はる水や 川とめえてとまる わぬやかなとめて かなととまら
(分水嶺に湧き出る水は川を探して行き着く、私は恋人を求めて恋人と一緒に落ち着こう)
ウカ ナ ウカ ナ
- 035 歌かわせかわせ 節かわせかわせ 歌のかわりばど 節もかわる
(歌かわせかわせ節かわせかわせ、歌の変わり目が節の変わり目だ)
ウカシ テフ テフ タマカニ
- 036 歌知りよかな ななほがれ手振れ 手振りぎよらしゃてど わ玉黄金
[手ふりふりよかな]
(歌知りの[手ふりする]恋人よ ななほがれ手振れ、手振りも上手なわたしの恋人)

- 037 うた うた うた
歌すればよかな 歌ごなすれよ 歌にこなされて いこかしのき
(歌おうと思って歌をこなそうとしたけれど、歌についていけなくてつらいよ)
- 038 うた うた
歌まむぎしゆしや ことやありよらぬ 歌ぬいきめえぐり おめどしゆたる
(歌の返しを戸惑っているが何でもない、歌の行き巡り(返し)を考えていたところだ)
- 039 うた や
歌やわが役ぬ きながめどなりゆる きながめぬうたば ゆしゆでぬしゆり
(歌は私たちの役目だ、楽しみのための歌である、楽しみのための歌をどうして惜しんだりしようか)
- 040 う た モ ヒト う た
打ち出さぬうちや いきやきやがと思てよ 一つ打ち出せば さみやしらぬ
(歌を打ち出さない内は おまえ達など(歌を知るまい) と思っていたが、一つ打ち出すとあとは果てしなく続く)
- 041 う ト
打ちはてぬつづみ 踊りはてどんが めえらべわかものや にやわかぐるしゃ
(鼓は打ち果てないが 踊りおさめのドンガ、娘や若者たちはまだまだ別れたくない気持ちだ)
- 042 う プ ツギミ ヨ ヨ プ
打てばうち欲しゃや よなりしゆる鼓 寄れば寄り欲しゃや かなかおそば
(打てば打つほどよく鳴る夜の鼓、寄れば寄る程一緒にいたくなる 恋人のお側)
- 043 仁 カ アキナ テ
うまれ稲がなしや 鎌かけてみぶしゃ 秋名きよらめえらべえ 手かけみぶしゃ
(ゆたかに実った稲ガナシ様は 鎌で刈ってみたいものだ、秋名の美しい娘はこの手で抱いてみたい)
- 044 ミ タマカニ ミ
うらきれて見ぶしゃ かくれ玉黄金 見ればなつかしや むんやいやらじ
(落ちぶれて見れば 愛人だった人よ、見れば懐かしいけれど(哀れで) 言葉もかけられない)
- 045 うんとのみが にっさいな さようんた にっさいな
(歌意未詳)
- 046 イエン タマカニ
縁と玉黄金 ぬかばちゆどさらめ うちふらいふらて ぬかばきゆらく
(縁と恋人というのは 別れたら他人というもの、仲良く努力して(だめな時は) 別れるならきれいに)
- 047 柿 マツタ 柿 タ 舟 マ
沖のとなかに さよ松立てて 上り下りぬ 舟を待つ
(歌意略)
- 048 和 和 ハマジヨ 和 トカ タ シュセタノ
送れ送れよかな 浜門がれ送れ 洋上のり出せば 潮風頼も
(送りましょう浜の下り口まで送りましょう、洋上に乗り出せば潮風が頼りだ)
- 049 ジュゴキ ツキ キュ テ 天
お十五夜のお月 かね美らさ照りゆり かながじよにたてば 曇てたはれ
(十五夜の月がこんなに美しく照っている、恋人の家の門に立ったら 曇って下さい)
- 050 ウト トウジ イチ
夫ふしゃもちゆとき 妻ふしゃもちゆとき あやはじきふしゃや 命まざり
(夫が欲しいと思うのも一時 妻が欲しいと思うのも一時だが、美しい入墨は 命あるかぎりしたい)
- 051 木コ バナ ナナサ 木コ バナ チユナサ
男きゆら花や 七花咲きゆり 女いえしゃ花や 一花咲きゆり
(いい男は あの女この女と恋もできるが、醜く生まれた女は 一度しか咲かない)

- 052 想影ぬたてば 言沙汰しゆりと思え 胸ぬつまぐみば 泣しゆりとおもえ
(面影が浮かんだら噂をしていると思いなさい、胸が切なくなれば泣いていると思いなさい)
- 053 想影や立ちゆり 浜うれてみれば 白浪や立ちゆり 愛人やみらぬ
(恋人の面影がたつて 浜に下りてみれば、白浪ばかりがたち 恋人は見えない)
- 054 思てさえ居れば 後さきどなりゆる 節や水車 めえぐりあゆり
(思ってさえいれば 何年先になっても、会う機会は水車のようにめぐり 戻って会えるものだ)
- 055 片枝や枯れて 片枝や咲きゆり 咲かぬ片枝も 咲ちたほれ
(片枝は枯れて片枝は咲いた、咲かない片枝も咲かして下さい)
- 056 かなげましょかれて しばかれどしよたろ 今日しよましょかれて なおてつしゃろ
(こんなに長い間待ちこがれて身も細る思いでしたが、今日願いがかなってもう安堵しました)
- 057 かなと話そは 枕もいらぬ 互いちがいの 腕枕
(歌意略)
- 058 枯木くだめえしゆて なり木ひきよせて 落てらばもはかれ かなとちゆみち
(枯木に上り足をふんばり果物の実った枝を引寄せ、落ちることがあっても 恋人と一緒に生きて行こう)
- 059 喜界湾泊まり 汐なり声きけば ちらげちようるし ちらぬやぐら
(喜界湾泊まりに汐の打ち寄せる音を聞けば、なかなか上がらない井戸のつるべ)
- 060 きも医者もあらぬ あげらしゃもあらぬ とかくうてんどの つもりさだめ
(体を看てくれる医者などいらぬ すべては太陽(天)の定めるところだ)
- 061 きやんめになとて ゆるくで居れば あんまふれもんや ゆたばともし
(恋しいになったとって喜んでいけば、お母さんは気が狂ったのかユタなど呼んで来て)
- 062 きゆらさ生まれれば 花かずいと染みゆり わぬやいえしゃ生れてつぶし抱きゆり
(美しく生まれればたたくさんの男と恋もできるが、私は醜く生まれて一人膝を抱く)
- 063 下りはる水の 上りはるなれば 磯のつふる石に 花の咲きゆり
(下り流れる水が上り流れたならば、磯のさんご石に花が咲く)
- 064 雲ぬよどみばど 風ぬよどまじや わぬが歌ながれ ここでとまら
(雲が淀むから風も淀むのだ、私の歌ながれもここで止めましょう)
- 065 今日のほこらしやや 何時よりも勝り 何時もこのごとに あらしたほれ
(今日のほこらしさはいつよりも勝っている、いつもこのごとくにあらして下さい)
- 066 今日の佳日に 祝つけておせろ 今日よりも先や およべばかり
(今日のよい日にお祝いしてさしあげましょう、今日からはお祝いばかりでありますように)
- 067 けさぬうやふじぬ 島建てぬ悪さ かながしまわしま 間切わかそ
(昔のご先祖さまの間切分けの悪さよ、愛しい人の村と私の村との間切を分けて)

- 068 ゴシヤク ナエ ソ テ リ テ
五尺でのげに 名前ば染めて かなが手とたり 吾の手とたり
(五尺手拭に名前を染めて、愛しい人の手を取り 愛しい人は私の手をとる)
- 069 コシ ヤネ ニイ
今年はろどしや かほどしどありよる 来年ぬ稲がなしや あぶしまくら
(今年よい年 果報な年です、来年の稲様、田が畦枕になるほど実りますように)
- 070 コシヨ イ
今年世ぬかわて おとまらしゃへんで 磯ぬあやそびぬ あざばぬふて
(今年世が変わって不思議なことでもあるものだ、磯のあやそび(魚の名)が陸に登った)
- 071 コシヨ イ シ ハ サ
今年世ぬかわて おとまらしゃへんで 磯ぬつふる石ぬ 花の咲きゆり
(今年世が変わって不思議なことでもあるものだ、磯のさんご石に花が咲いた)
- 072 ヌガ カ
こねだこのごろや 夢しげさやしが きもちやげぬかなば 拝もちおもて
(近ごろはあなたの夢をよく見る、いとしいあなたにこうして会いたいと思って)
- 073 ナキ アト ナメ アエ
先降らばふらじ 後降らばふらじ 今ふりゆる雨ぬ うらみぶしゃや
(先に降るなら降ればいいのに 後で降るなら降ればいいのに、今降る雨は恨めしい)
- 074 サシヤク カク サト ハ カク
三尺のあがれ じじむきゆる金久 なつかしややま里 花や金久
(三尺のあがれ、にぎやかな金久、なつかしいのは里、華やぐのは金久)
- 075 カコガネ
さんだまけまけ 煙草種おろせ おろしそだてて のだばかり
(息子よまけまけ煙草種をまけ、まいて育てて呑むだけだ)
- 076 シイ ナカ
節としぼさしや 七日へえざめりゆり きもちやげぬかなや ぬへえざめりゆり
(アラセツとシバサシは七日隔たっている、いとしい恋人とは何の隔たりがあろうか)
- 077 シイ ミズイガナ ミズイ シイシイ
節や水車 水しまわさりよめえ かなが節わ節 まわしぐるしゃ
(節是水車のように 水で回されようか、恋人と私の会う節(機会)は なかなか回って来ない)
- 078 シマ トキ マチ
島ぬしりくちに とめてとめららぬ時や ひるぬ灯ついでとめてあそほ
(村のはずれで 相手を捜して見つからない時は、昼の明りをつけて 捜して遊ぼう)
- 079 シマ シマ カ ミズイ コハ
島やだぬ島も 変るぎやねらぬ 水にいかされて 言葉どかわる
(村はどの村も 変わるものではないが、水のおかげで 言葉が違ってくる)
- 080 シュンカチゴロ ヨ マ ヨ
十七八頃や 夜のくれど待ちゆる いついが夜のくれて あそほやかな
(十七八才頃は 夜の暮れるのが待ち遠しい、いつ夜が暮れて あそべるのか恋人よ)
- 081 シュガチ イ
汐口ある石や かくれたりめたり かくれよそのぎや おれがごと
(波打ち際にある石は 隠れたり見えたりする、人目を忍ぶ逢引も 同じようだ)
- 082 シュガチ ナ ミラビ
汐口打つ波や うちがさねがさね わぬやかな [女童] とどみしよかさね
(波打ち際を打つ波は 重なり重なる、私は恋人と からだを重ねる)
- 083 シン ジャセン
しゅんかねくわが節や わがくなしうかば 三味線もちいもれ ついでとおせろ
(シュンカネクワの節は 私が歌いこなしている、三味線をもっていらっしゃい、つけてあげましょう)

- 084 シラネ ハナ ミズイ イ ナケ イ
 白金ぬ花や 水かけて活ける 情かけみしょし 活けてたほれ
 (白金の花は 水をかけて活けなさい、(私には)愛情をそそいでいつくしんで下さい)
- 085 シラネ せ け け け
 白雲やまさり 風つれていきゆり 吾ぬやかなつれて いこかしのき
 (白雲は(私より)勝っている、風を連れて行くが、私は恋人を連れて行くのがつらい)
- 086 しるわしるわ しどろのもゆるもゆる
 (語意未詳)
- 087 シロ イガキ ナキ
 白し石垣に はゆるおもかずら はい先やねらじ もとにもどら
 (白い石垣に生えるオモカズラは、生える先が無くなってもとに戻る)
- 088 スハ ム ヨラシ
 側やどぐちあけて かなまちゆる夜や 夜嵐やしげく かなやめらぬ
 (側やどの戸口を開けて 恋人を待つ夜、夜冷えの風がひどく 恋人は来ない)
- 089 たかぢぢにぬぶて ふりむかてみれば あんぢぢやみりゆり かなやめらぬ
 (高ぢぢ(峠)に上って 振り向いてみれば、あの峠は見えるけどいとしい人は見えない)
- 090 種 おろしやんちえ 餅むれが来やおたな あたらしやありしよらばんも くれてたほれ
 (種おろしや 餅もらいが来た、惜しいでしょうけど呉れてください)
- 091 旅ぬ下れ上りや 十日と思ふ二十日 何時が鳥戻て 吾愛人見りゆり
 (旅の下り上りは 十日と書いていたら二十日 いつ鳥に戻って 恋人と会えるのだろうか)
- 092 旅や浜やどり 草枕ごころ 寝ても忘れぬ 吾玉黄金
 (旅で浜宿りをしているのか 草を枕としているのか寝ても忘れられない 私の恋人よ)
- 093 玉黄金親や 生しどなされより 肝だましそろて なしがなりゆめえ
 (子供よ、親とは 生むことしかできない、気力体力共に揃って どうして生む事などできよう)
 (あとは自分で努力しなさい)
- 094 玉ぬ石ぬぶてい 何ぬ祝いとうりゆり 西東ぬ稲霊 招き寄せろ
 (玉の石にのぼって 何の祝いをしましょう 西東の稲だまを 招き寄せよう)
- 095 一ば二ち三ち四ち五ち六ち七ち八ちこんじゆ九ち十
 (一二三四五六七八九十) *「七ち・」から歌いだし「一ち・」に戻り「十」まで歌う。
- 096 月とながめても 星とながめても わんかなおもかげや わすれならぬ
 (月を眺めても 星を眺めても、私は恋人の面影が忘れられない)
- 097 月ぬ夜なれば しばがくれいもれ 闇ぬ夜なれば まみちいもれ
 (月の夜ならば 道端の木立に隠れながらいらっしゃい、闇の夜ならば 道の真ん中をいらっしゃい)
- 098 鼓ぐわや打てば 馬のこど打ちゆる まましゃぐわや打てば ままな [ももな] たちゆり
 (鼓を打てば 馬の皮を打つ、継子を打てば 子供を打った継母の名が立つ)

- 099 てらましょや 蝶なてい飛びゆり 用安ゆきじよ主や 蝶うさお
 (笠利の平のマシヨは蝶になって飛ぶ、ゆきじよ主がその蝶(彼女)をつかまえようとする)
 トシ イ 特 サガ ア ウミ ウ 床
- 100 年やとて行きゆり 先や定まらぬ 荒れの海に浮しゆる 舟のごとに
 (年をとって先も定まらない心細さは、荒れた海に浮かぶ舟のようだ)
 トシ カン トシ ナ ジョウ
- 101 年ゆたんちおもて 鏡とてみれば 年や今わらべえ もとぬ十八
 (年とったと思って鏡を取って見れば、年はまだ子供 昔の十八才だ)
 トチ カ マ ヨク ラメ トコ コショウ
- 102 殿内あみしゃれや 果報な生れやしガ 米倉や前なし 床や左手
 (ご当家の奥様は 幸せなお生まれです、米倉を前にして床の間を左に座っていらっしゃる)
 ト タ トリ 特 ミ ト ワ コロ ミ
- 103 飛び立ちゆる鳥だもそ先見ちど飛びゆる 吾ぬやなきや心 見ちどきやおた
 (飛び立つ鳥は行く先を見て飛ぶ、私はあなた達の心を見てやって来ました)
 ト エ バナイ 死 ウ ノ 初
- 104 虎ぬ絵ばかけて やなぎ花活けて 旅ぬ下れ上りや かふさ希お
 (虎の絵を掛けて 柳花を活けて、旅の下り上りの 無事を祈ろう)
 ト ア イ ア ト ア
- 105 取り合わせどありよる行き合わせどやりよる かなが取り合わせで なきややうがで
 ((偶然の)取り合わせ巡り合わせです、あなた恋人の取り合わせであなたたちに会いました)
 トリ ヨ ヨカ コロシカ ネ
- 106 鳥はうとたか まだ夜は夜半 心静かに 寝ておじやる
 (鶏が鳴いたかと思ったがまだ夜中だ、安心して寝ていらっしやい)
 カガ カナ サ ヨウ ウシ マ
- 107 長い刀は 差し様がござる 後ろさがれば 前あがる
 カガ ア
- 108 なきや拝み欲しゃや わみやさねなりゆり わみやさねなても うがみぶしゃや
 (貴方達に会いたくて心がしめつけられる、心がしめつけられても やはり会いたい)
 ユ アノ シイ キヌ ケブ ムカ
- 109 なきやくま寄らて 遊びたる節や 昨日や今日とめば 昔なりゆり
 (あなたたちがここに寄って遊んだ時は、昨日今日と思っていたら昔のことになってしまった)
- 110 なきやはじよめあらぬ わきはじよめあらぬ けさぬうやふじぬ しいつけはじよめ
 (あなたたちが始めたのでも私たちが始めたのでもない、昔のご先祖様が躰けた(定めた)のです)
- 111 なきやもまねまねと わきやもまねまねと たざりまねまねと あそでたはれ
 [たげに] [よさりしよせら]
 (あなたたちも久しぶり 私たちも久しぶり、互いに久しぶりですね 遊んで下さい)
 ニシ
- 112 なきやや西めえぐり わぬやひぎやめえぐり めえぐりあうときや あわれはなそ
 (あなた方は西へ私は東へ行きますが、巡り会う時は話をしましょう)
 ナカ ア ワ メ ケ
- 113 情かけ欲しゃや 吾ぬどありやしガ よそぬ目ぬしげく 口ぬうとるしや
 (情けをかけたい私であるが、他人の目がしげく 噂が恐ろしい)
 コエ コエ キ
- 114 なつか声きけば いきやぬかれらぬ とてやあらし声 聞かしたはれ
 (よい歌声を聞くとたまらない気持ちになる、どうぞもっと良い声を聞かして下さい)

- 115 今ふりゆる雨よ わ庭に降れよ かなが涙ちおもて いちてぬれら
(今降っている雨は 私の庭に降れ、恋人の涙だと思って 出て濡れよう)
ニサカツ rome ハサ ハカツ サ
- 116 二三月なれば 桃の花咲きゆり わ八月なれば わはな咲きゆり
(二三月になれば 桃の花が咲く、八月になれば 私の青春が花開く)
ニカセフ マ マクラ マ フ ニシ マクラ
- 117 北風ぬ吹かば 真南あぶし枕 真南ぬ吹かば 北あぶし枕
(北風が吹けば 南が豊作、南風が吹けば 北が豊作)
ニシ ユ ヒキヤ ユ ニシキヤニヤマ マ
- 118 西からも寄りゆり 東からも寄りゆり 西東ぬ稲霊 招きよせろ
(西からも寄って来る 東からも寄って来る、西東の稲霊を 招き寄せよう)
マ ト マ ヨカセ ノ
- 119 にじきとて待ちゆれ 床とて待ちゆれ 夜半風つれて 忍できゃおろ
(ムシロを敷いて待っていないさい床をとって待っていないさい夜中に風を連れて 忍んで行きましょう)
コシ ヨト コ
- 120 はじよめて 今年はじよめて 嫁取りすれば しゃおて子ほぎめて
(今年初めて、嫁を迎えれば ちやほやして)
ハハ ハハ ミハハ
- 121 走る走るは なお道走る やくぬやよたに みちはしろ
(歌意未詳)
ハカツ シイ
- 122 八月の節や よりもどりもどり わきゃはたちごろや いついもどりゆり
(八月の節は 寄り戻ってくる、私達の二十歳の頃は いつ戻るのだろうか)
ハツカヨ ク ヒマ
- 123 二十日夜ぬ暮れて はぎぬひきやらんときや かなにおもなせば あかぬ昼間
(二十日夜が暮れて (暗くて) 足が進まない時は、恋人の事を思えば 明るく昼間のようだ)
ハ ニイ イダ フ
- 124 花なれば匂 枝もちやいらぬ なりふりやいらぬ 人やこころ
(花ならば匂い 枝ぶりは問題ではない、なりふりは構わない人は真心が大事だ)
ハ シイマサ サ セツ
- 125 花やふくもとて 節待ど咲きゆり きもちゃげぬ節ぬ まわしぐるしゃ
(花は咲きたいのを我慢して 季節を待って咲く、待ち遠しい節は なかなか巡って来ない)
ハ モト ニト 加 サ ニト 加 サ ハ ハ ハ
- 126 花や根元あれば 二度返て咲きゆり 二度返て咲かぬ花 な花わ花
(花は根元があれば 二度返って咲く、二度返って咲かない花は あなたの花、私の花)
ハマキ マツキ シサキ
- 127 浜崎ぬ松木 白鷺のとぐら わきゃがねとぐらや あんまふすいくろ
(浜先の松の木は 白鷺のねぐら、私たちのねぐらはお母さんの寝床)
ハマジヨガチ シナ ゴエ フサビ
- 128 浜門口うれて 汐鳴り声きけば かなが冬旅や やらしぐるしゃ
(浜の下り口に下りて 汐の音を聞けば、恋人を冬旅には 出たくない)
ニフ キ 加フ
- 129 はやお庭に しだら木ぼうえとて にしの風吹くとき さらさらざらむきゆり
(風が吹く庭に しだら木を植えて、北風が吹くと さらさらと音をたてる)
ヒル マイ トキ キ マイ
- 130 昼ぬ灯ついでとめららん時や 肝ぬ灯ついでとめてにやだな
(昼の明りをつけても 見つからない時は、心の明りをつけて 捜してみるとよい)

- 131 ヒル ミズイブ ワ ブ
 昼間水欲しゃや こねてこねられり 吾んかなみ欲しゃや こねやならぬ
 (昼間水が欲しいのは 堪えれば堪えられるが、私が恋人に会いたい気持ちは 堪えられない)
- 132 ヒル ムル ムル ムカチ
 昼やきもがよい 夜や夢がよい わきやが胸中や ひまやねらぬ
 (昼は心で通い 夜は夢で通う、私達の胸の内は 暇がない)
- 133 フネ シヅメ ヨ ヒト ミ ノ
 舟の新造と おなごの良さは 人が見みたがる 乗りたがる
 (歌意略)
- 134 フネ タ タ ヨケ タ トマ イケチ セ
 舟は出そ出そ 夜明けに出そよ 泊り入口に 瀬がござる
 (歌意略)
- 135 ソ
 ふりかかれかかれ わぬにふりかかれ ふりかかるとなきやや 袖やなざぬ
 (私に寄りかかりなさい、寄りかかるあなたを 袖にはしません)
- 136 ほこらしやや いついよりもまさり いつもこのごとに あらしたはれ
 (誇らしいことはいつよりも勝っている、いつもこのごとくにあって下さい)
- 137 コツイ コツイ
 ほーめらべや 言付けぬたばこよ またも言付けや もつれたばこ
 (ホーメラベや 言付けをした煙草、またも言付けや もつれ煙草)
- 138 丸 クワ ムナ ウ キョ
 ほーめらべや 誰がなしゃる子かよ 目鼻うちそろて 生まれ美らさ
 (ホーメラベや 誰が産んだ子か、目鼻がうちそろって美しく生まれついた)
- 139 マ
 曲がりよたかちぢに ちょちんぐわぼとほし うりがあかがりし のでいもれ
 (曲がり高ちぢ(峠)に 提灯を灯し、その明かりを見て 忍んでいらっしやい)
- 140 マクラ ハ ヨ キヌ ケフ ムカシ
 枕ならべて 話す夜はいついが 昨日や今日とめえば 昔なりゆり
 (枕を並べて 話した夜はいつのことだったか 昨日か、今日かと思えば 昔のこととなってしまった)
- 141 ミハタ イ ゲタ ハ
 道端ぬ石や 下駄ぬ歯とかたき きもだかさもてば どしどかたき
 (道端の石は 下駄の歯の敵である、気位の高い人は 友達が敵となる)
- 142 シ シヤミ イヤ
 道びきぬ三味や 医者よりもまさり ねなしもるかなが うずでききゆり
 (道びきの三味線は 医者よりも勝っている、寝ていらっしやる恋人が 起きて聞く)
- 143 ミヤマ オヤマ ハ ケフ ヒ キョ
 深山奥山に つぼどたる花や 今日よかる日に さしゆり美らさ
 (深山奥山につぼんでいた花が、今日よき日に 美しく咲く)
- 144 コイ コイ
 むかしわきゃ声や かめぬなりしゆたがよ こねだかせひきし わ声からし
 (昔は私の声は 瓶に響くような良い声だったが、最近風邪をひいて 声をからした)
- 145 カト イシ
 むつれ草取りやに むつろにすれば 縁ぬねじさらめ むつれぐるしゃ
 (むつれ草を取るように 彼女とむつみあおうとするが、縁がないのだろうか、むつみあえない)
- 146 ムチ
 餅欲しゃもあらぬ しよし欲しゃもあらぬ きながめぬたより まくできやおた
 (餅が欲しくてではない 酒が欲しくてではない、楽しみごとのために 大勢でやって来たのです)

- 147 餅やかしゃ抱きゆり かしゃや餅抱きゆり 餅かしゃのごとに 抱しゆりぶしゃや
(餅は柏の葉を抱いている 柏の葉は餅を抱いている、餅と柏葉のようにあなたを抱いていたい)
- 148 めでたの 若松様よ 枝も榮えて 葉もしげる
(歌意略)
- 149 もとどもとなりゆる すらぬもとなりゆめえ すらぬもとなれば ねなしかずら
(根元は根元 末の枝も根元になる、末が根元になればそれは根無しかずらだ)
- 150 やはや後々に ちしえきよたるいへのぼ はるぬけえもらしゃや なきやがいえしゃろ
(順序よく(歌を)つけようと思うが、ついて来れないのは未熟だからと 貴方達が言ったでしょう)
- 151 山から 谷底見れば 植えたなすびぬ 花ざかり
(歌意略)
- 152 やまと旅すれば 月読でど待ちゆる 黄泉が旅すれば 何説でまちゆる
(大和に旅すれば 帰りを月日を数えて待つ、あの世に旅をすれば 何を数えて待つのか)
- 153 山ぬ木ぬ高さ 風にくまれり きもだかさもてば よそがにくむ
(山の木の高いのは 風に憎まれる、人は気位が高いと 他人に憎まれる)
- 154 波打際ぬいぶや いどかけてつりゆり やんぬ女童や さぢしつりゆり
(屋仁の浜のイブは 餌をつけて釣るが、屋仁の娘は サジ(ハンカチ)で釣る)
- 155 夜明け白雲ぬ 行き別れみれば かなといきわかれ あれがごと
(夜明けに白雲が 別れて行くのを見ると、私と恋人が別れるのも あのようなのである)
- 156 夜中三味線や 医者よりもまさり ねなしもるかなが うずでききゆり
(夜中の三味線は 医者よりも勝っている、寝ていらっしやる恋人が 起きて聞く)
- 157 夜中目ぬさめて 眠られぬときや じろぬ端ゆとて たばこながめ [みしよれ]
(夜中に目が覚めて 眠られない時は、いろいろ端で 煙草を吸いなさい)
- 158 よねやくまゆらて いろいろぬあすび あしゃや島戻てい いさたばなし
(今晚はここに寄っていろいろの遊びをしよう、明日は自分の村に戻って 今晚あったことを話そう)
- 159 夜走る舟や かくれ瀬とかたき かな待ちゆる夜や どしとかたき
(夜走る舟にとっては 隠れ瀬は敵である、恋人を待つ夜は 友達が敵となる)
- 160 別れてやいきゆり 何ば形見おせろ 汗肌ぬ手拭 形見おせろ
(別れて行くのに 何を形見に差上げましょうか、私の汗肌をふいた手ぬぐいを 形見に差上げましょう)
- 161 別れとおもて さしゆる杯や 涙におされて 取りやならぬ
(お別れと思って さす杯は、涙で 取るができない)
- 162 わぬや今わらべえ 歌しらぬやしが 生まれぬなきやや ゆしてたほれ
(私はまだこどもなので 歌を知りません、先に生まれたあなた達先輩方 教えて下さい)

- 163 わぬや今わらべえ きじる人やおらぬ 逃ぎ牛の如に うしゃげはしゃげ
(私は今こどもで束縛する人はいない、逃げ牛のごとくにはしゃぎまわる)
- 164 わらべえ妻かめて 側寄れば泣きゆり 何時が抱きほでし 寝首抱きゆり
(幼い妻をもらったがそばに寄ると泣いてしまう、何時になったら寝首を抱けるのか)
- 165 吾んやんめ石垣金ぬなりゆり 浜ぬゆりずな米なりゆり 沖のくろうしゅ酒なりゆり
(私の家の前の石垣は金になる、浜に寄る砂は米になる、沖の黒潮は酒になる)

資料2 『奄美民謡（秋名）八月踊歌集録』 翻刻資料

凡例

本資料は、秋名集落金久地区に在住の重田留蔵氏が、昭和60年に後身の指導のために作成されたムチムレ（餅もらい）および八月踊りの歌の歌詞集の翻刻である。

- ・原文は漢字とカタカナ表記になっている。読みやすさの便のためにカタカナ部分はひらがなに改めた。
- ・漢字の旧字体、異体字は新字に改めた。
- ・歌詞冒頭にふられた番号は重田氏によるもの。
- ・各歌詞末尾（ ）内に、資料1における対応歌詞の通し番号を記した。
- ・原文は縦書きになっており、歌詞一首内の句の切れ目は記載されていない。

奄美民謡（秋名）八月踊歌集録

60.10.重田留蔵 記

秋名八月踊の歌詞と餅糞歌

- 1 種おろしやんちえへー 餅もれが来やおたな あたらしやありしよらばんもくれてたほれ (90)
- 2 餅やかしや抱きゆりへーかしやや餅だきゆりなー もちかしのごとにへーだしゆりぶしややー (147)
- 3 もち慾しやもあらぬへー 正中ふしやもあらぬなー きながめぬたより まくできやおた (146)
- 4 とのちあみしやれやへー かふなまれやしがなー よねぐらやめなし とくやこしよで (102)
- 5 今日ぬよかるひにへー よわつけておせろなー 今日よりが先や およべばかり (066)
- 6 今日ぬほーこらしややへー いちえよりもまさりなー いちえもこのごとに あらしたほれ (065)
- 7 いちえもこのごとにへー あればたまがねなー のてにこのしのき わぬやとりゆり (028)
- 8 八月のせつや よりもどりもどり わきやがはたちごろ いちえもどりゆり (122)

変調

- ・ あみしやれやー かふなまれ 一ちば二ち三ち四ち五ち六ち七ち八ちこんなこのつど (095.102)
- ・ 吾んやんめ石垣 金ぬなりゆり 浜ぬゆりずな米なりゆり 沖のくろうしゆ酒なりゆり (165)
- ・ はやてお庭に しだら木ばやれささうえとて 西の風吹くとき さらさらざらむきゆり (129)

(一) アラシャゲ

- 1 八月のせつや よりもどりもどり わきやがはたちぎよりえや いちえもどりゆる (122)
- 2 西からもよりゆり ひぎやからもよりゆり にしひぎやぬにやだま まねきよせろ (118)

- 3 今年はろどしや かほどしどありよる やねぬにいがなしや あぶしまくら (069)
- 4 なきやはじよめあらぬ わきやはじよめあらぬ けさぬうやふじぬ せつけはじよめ (110)
- 5 けさぬうやふじぬ しまたてぬわるさよ かながしまわしま まぎりわかそ (067)
- 6 けぶぬよかろ日に よわつけておせろ けぼよりえがさきや およべばかり (066)
- 7 けぶぬほーこらしやや いつよりもまさり いちえもこのごとに あらしたほれ (065)
- 8 何時も此の如に あればたまくがねよ 何故にこのしのき 吾ぬやとりゆり (028)
- 9 十七、八頃や 夜ぬくれどまちゆるな 何時が夜ぬくれて あそほやかな (080)
- 10 二三月なれば 桃ぬ花咲きよるな 吾八月なれば 吾花咲きゆり (116)
- 11 わぬや今わらべ きじるちゆやをらぬ 逃ぎ牛の如に うしゃげはしゃげ (162)
- 12 いこゝにすれば 後想影ぬ立ちゆり 居ろゝにすれば 義理ぬうとるしや (026)
- 13 送れゝよかな 浜じよがれおこれな 洋上のり出せば 汐風頼も (048)
- 14 浜門口うれて 汐鳴り声きけば 彼が冬旅や やらしぐるしや (128)
- 15 想影や立ちゆり 浜うれて見れば 白波や立ちゆて かなやめらぬ (053)
- 16 思てさえ居れば 後先どなりゆり 節や水車 めぐりあゆり (054)
- 17 節や水車 水しまわさりよりな かなが節わ節 まわしぐるしや (077)
- 18 想影ぬたてば 言沙汰しゆりと思え 胸ぬつまぐみば 泣しゆりとおもえ (052)
- 19 荒ればもたちゆり 凧ればも立ちゆりな かなが想影ぬ 忘れぐるしや (020)
- 20 旅やはまやどり 草枕ごころな 寝ても忘れらぬ 吾玉黄金 (092)
- 21 玉黄金親や 生しどなされよるな 肝だましそろて なしがなりゆめ (093)
- 22 あんま想影や 時々ど立ちゆりな かなが想影や 朝ま夕ま立ちゆり (022)
- 23 別れてやいきゆり 何ばかたみおせろ 汗膚ぬ手拭 形見おせろ (160)
- 24 汗膚ぬてのげ 形見取てからや うしろかる軽と いもれしよせら (009)
- 25 やまと旅しれば 月読でど待ちゆる 黄泉が旅しれば ぬゆで待ちゆる (152)
- 26 旅ぬ下れ上りや 十日と思は二十日 何時が鳥戻て 吾愛人見りゆり (091)
- 27 虎ぬ絵ばかけて 柳花活けてな 旅ぬうれのりや かふさ希お (104)

(二) 今の踊り

- 1 いまのおどりわ よう勢がそろた 踊り習わば いま習え (029)
- 2 さんだまけゝ 煙草種おろせ おろしそだてて のだばかり (075)
- 3 長い刀わ 差し様がござる うしろさがれば まえあがる (107)
- 4 かなとはなすは 枕もいらぬ たがいちがいぬ うでまくら (057)
- 5 枕ならべて はなす夜は いちえが昨日や今日とめば 昔なりゆり (140)
- 6 合わんでのげに あわそにすれば 夜ぬよがらすの なきわかれ (021)
- 7 五尺てのげに 名前ば染めて かなが手とたり わのてとたり (068)
- 8 舟はだそゝ 夜明けに出そよ 泊り入口に 瀬がござる (134)
- 9 沖のとなかに さよ松立てて 上り下りぬ ふねを待つ (047)
- 10 鳥はうとたか まだよわ夜半 心静かに ねておじやる (106)

変調

- 山から 谷底見れば 植えたなすびぬ 花ざかり (151)
- はじよめてへへーやれこれ 今年始めて 嫁取りすれば しゃおて子ほぞめて (120)

うとたかへへーやれこれ 鳥わうとたか まだよわよなか (106)

となかにへへーやれこれ 沖のとなかに (047)

かたなわへへーやれこれ 長いかたなわ (107)

てのげにへへーやれこれ 五尺てのげに 名前ばそめて (068)

(三) 喜界湾泊り

- | | | |
|----|--------------------|-------------------------|
| 1 | ききやわんどまり 汐なり声きけば | ちらげちようるし ちらぬやぐら (059) |
| 2 | とのちあみしやれや かふなまれやしが | 米倉やめなし 床やこしょ手 (102) |
| 3 | なきやまねまね、と わきやまねまねと | たぎりまねまねと あそでたほれ (111) |
| 4 | お十五夜のお月 かん美らさてりゆり | かながじよにたてば くもてたほれ (049) |
| 5 | 遊び好き吾ぬや とめてとめらぬ | しまのしりくちに とめてあそぼ (010) |
| 6 | しまぬしりくちにとめてとめらぬときや | ひるぬまつけて とめてあそぼ (078) |
| 7 | 昼ぬまちつけて とめらぬときや | きもぬまちつけて とめてにやだな (130) |
| 8 | 花やふくもとて 節待ちど咲きゆる | きもちやげぬ節ぬ まわしぐるしゃ (125) |
| 9 | 花や根元あれば 二度かえて咲きゆり | 二度返えて咲かぬ花 なはなわはな (126) |
| 10 | ひるま水慾しやや こねてこねられり | わんかなみぶしや こねやならぬ (131) |
| 11 | 白金ぬ花や 水かけていける | なさけかけみしよし いけてたほれ (084) |
| 12 | 情かけぶしやや わぬどありやしが | よそぬ眠ぬしげく くちぬうとるしや (113) |

(四) ホーコラシャ

- | | | |
|----|---------------------|------------------------|
| 1 | ほーこらしやや いちえよりも勝り | 何時もこのごとに あらしたほれ (136) |
| 2 | 何時もの如に あればたまがね | のてにこのしのき 吾ぬやとゆる (028) |
| 3 | 月の夜なれば しばがくれいもれ | やみぬ夜なれば まみちいもれ (097) |
| 4 | すばやどぐちあけて かなまちゆる夜や | よあらしやしげく かなやめらぬ (088) |
| 5 | 飛び立ちゆる鳥だもそ先見ちどとびゆる | わぬやなきや心 みちどきやおだ (103) |
| 6 | 雨ぬなま降りや 道ぬなびろさや | かなとなまあそび わかれぐるしや (017) |
| 7 | 先降らばふらじ 後降らばふらじ | なまふりゆる雨ぬ うらみぶしや (073) |
| 8 | なきや拝みぶしやや わみやさねなりゆり | わみやさねなても うがみぶしやや (108) |
| 9 | うがみばどしりゆる うがまずしりゆめ | 拝で想影ぬ 立てばきゃししゆり (030) |
| 10 | こねだこのごろや 夢しげさやしが | きもちやげぬかなば 拝もちおもて (072) |
| 11 | よねやこまよらて いろ、ぬあしび | あしやや鳥戻て いさたばなし (158) |
| 12 | 遊ぶ夜ぬ浅さ 宵と思ば夜半 | 鳥うたふとめば な夜ぬあける (011) |

(五) ホーメラベ

- | | | |
|---|--------------------|------------------------|
| 1 | ほーめらべや ことちけぬたばこよ | またも言付けや もつれたばこ (137) |
| 2 | むつれ草取りやに むつろにすれば | 縁ぬねじさらめ むつれぐるしゃ (145) |
| 3 | ほーめらべや たるがなしゃるくわかよ | めはなうちそろて うまれぎよらさ (138) |
| 4 | 縁とたまがね ぬかばちゆどさらめ | うちふらいふらて ぬかばきゆらく (046) |
| 5 | にじきとてまちゆれ 床とて待つちゆれ | 夜半風つれて 忍できやおろ (119) |
| 6 | わらべとじかめて 側寄れば泣きゆり | 何時が抱きほでし ね首亦抱きゆる (164) |

(六) アマダサガリヤ

- | | | |
|---|--------------------------------|--------------------------------|
| 1 | あまだ下がりややひゆんかまち
いちていもれうちゆんきや | やんくぶ下がりやとつちぶる
にしゆておせろ (016) |
| 2 | あまだいうぬさがて まやぬ目ぬだるさよ | きゆらとちかめて わん目ぬだるさ (015) |
| 3 | 油つけ頭 雨降ればしわじわやよ | きゆらさ生まれれば 夜ぬしわじや (014) |
| 4 | きゆらさ生まれれば 花かぢと染みゆり | わぬやいえしや生れて つぶしだきゆり (062) |
| 5 | 花なれば匂 枝もちやいらぬ | なりふりやいらぬ 人やこころ (124) |

(七) アガンムラクワ

- | | | |
|---|-------------------|------------------------|
| 1 | あがんむらあかくわ 雪むらぬはぐき | きやんめになれば ゆばしちゆみち (003) |
| 2 | きやんめになとて ゆるくで居れば | あんまふれもんや ゆたばともし (061) |
| 3 | 道端ぬ石や 下駄はとかたき | きもださをなご どしとかたき (141) |
| 4 | 夜走しる舟や かくれ瀬とかたき | かな待ちゆる夜や どしとかたき (159) |
| 5 | 別れと思て さしゆるさかずきや | 涙におされて とりやならぬ (161) |

(八) 曲ガリヨタカチヂ

- | | | |
|---|---------------------|--------------------------|
| 1 | まがりよたかちぢに ちよちんがぼとほし | うれがあかがりし のでいもれ (139) |
| 2 | たかちぢのほて ふりむかてみれば | あんちぢやみりゆり かなやめらぬ (089) |
| 3 | いち代ちどいしやる まち代ちどいしゆて | 男あやばなや あれやこれや (027) |
| 4 | 男きゆら花や 七花咲きゆり | をなごいえしや花や 一花また咲きゆり (051) |
| 5 | 夜明け白雲ぬ いき別れ見れば | 愛人といき別れ あれが如に (155) |

(九) シュンカネクワ

- | | | |
|---|------------------------|-------------------------|
| 1 | しゆんかねくわが節や わがくなしうかば | 三味線もちいもれ ちけておせろ (083) |
| 2 | うしうかば鳴りゆめ さげてうしやんちなりゆめ | わんかなおもがねが ひちとなりゆる (033) |
| 3 | 夜中三味線や いしやよりもまさり | ねなしいもるかなが うずでききゆり (156) |
| 4 | 夜中目ぬ覚めて ねむらぬ時や | じろぬ端ゆとてなが たばこみしよれ (157) |
| 5 | うまれ稲がなし かまかけてみぶしや | 秋名きよらめらべ 手かけみぶしや (043) |

(十) 波打際ヌイブ

- | | | |
|---|--------------------|---------------------------|
| 1 | なんごらぬいぶや むどかけてちりゆり | やんぬ女童や さぢしつりゆり (154) |
| 2 | しゆぐちうつなみや うちがさねがさね | わぬや女童と どみしよがさね (081) |
| 3 | しゆぐちあろう石や かくれたりめたり | かくれよそのぎ おれがごとに (080) |
| 4 | 遊ぶ夜ぬあささ 宵と思はぬ夜半 | 鳥うたうとめば なよぬあける (011) |
| 5 | うらきれてみぶしや かくれたまくがね | 見ればなつかしや むんやいやらじ (044) |
| 6 | 浜崎ぬ松木 しらさぎのとぐらよ | わきやがねとぐらや わんあんまふちくろ (127) |

秋名八月踊りの歌詞の数々

- | | | |
|---|-----------------------|-----------------------------|
| 1 | 種おろしやんちえへーもちもれが来やおたな | あたらしやありしよらばんもへーくれてたほれ (090) |
| 2 | もちやかしや抱きゆりへーかしやもちだきゆり | もちがしやのごとに抱しゆりぶしやや (147) |
| 3 | もち慾しやもあらぬ 正中慾しやあらぬ | きながめのたより まくできやおた (146) |

- 4 殿内あみしやれや かふな生れやしが 米倉や前なし 床や左手 (102)
- 5 今日ぬ佳日に 祝つけておしよろ けぶよりがさきや およべばかり (066)
- 6 今日のほーこらしやや 何時より勝り いちえもこのごとに あらしたほれ (065)
- 7 何時もこのごとに あればたまこがね 何故にこのしのき わぬやとりゆり (028)
- 8 八月の節や より戻りもどりゆり わきやはたちごろや いちえもどりゆり (122)
- 9 十七、八頃や 夜ぬくれど待ちゆる いちえが夜ぬくれて あそほやかな (080)
- 10 二三月なれば 桃の花咲きゆり 吾ん八月なれば わはな咲きゆり (116)
- 11 わぬや今わらべ きじるちゆやをらぬ にぎ牛のごとに うしやげはしやげ (162)
- 12 汝きやはじよめあらぬ わきやはじよめあらぬ けさぬうやふじの しつけはじよめ (110)
- 13 けさぬうやふじぬ 島たてぬわるさ かながしまわしま まぎりわかそ (067)
- 14 わぬや今わらべ 歌しらぬやしが 生まれぬなきやや ゆしてたほれ (162)
- 15 うきよかりじまに 永久居られよめ あそでとくみしよれ かりぬ世さめ (031)
- 16 西からもゆりゆり ひぎやからもゆりゆり 西ひぎやぬ稲霊 まねきよせろ (118)
- 17 今年はろ年や かほどしどありゆる やねの稲がなしや あぶしまくら (069)
- 18 朝夕みちあがりや しょちよがまぬおよべ よねしょみちあがりや ひらせおよべ (008)
- 19 やまと旅すれば 月読でど待ちゆる 黄泉が旅すれば ぬゆでまちゆる (152)
- 20 浜門口うれて しゆなり声きけば かなが冬旅や やらしぐるしや (128)
- 21 おこれおこれよかな 浜門がれおこれ 洋上のりだせば 潮風たのも (048)
- 22 旅やはまやどり 草枕ごころ ねても忘れぬ わたまくがね (092)
- 23 想影や立ちゆり 浜うれてみれば 白浪や立ちゆて 愛人やみらぬ (053)
- 24 荒れればもたちゆり 凧ればもたちゆり かながおもかげや 忘れぐるしや (020)
- 25 思てさえ居れば 後さきどなりゆる 節や水車 めぐりあゆり (054)
- 26 節や水車 水しまわされり かなが節わ節 まわしぐるしや (077)
- 27 想影ぬ立てば 言沙汰しゆりと思え 胸ぬつまぐめば 泣しゆりとおもえ (052)
- 28 昼やきもがよい 夜や夢がよい わきやが胸中や ひまやねらぬ (132)
- 29 あんま想影や ときどきどたちゆる かながおもかげや 朝まゆまたちゆり (022)
- 30 別れてやいきゆり ぬばかたみおせろ 汗はだぬてのげ かたみおせろ (160)
- 31 汗はだぬてのげ かたみとてからや うしろかろがろと いもれしよせら (009)
- 32 いこゝにすれば あとおもかげぬ立ちゆり 居ろゝにすれば 義理ぬうとるしや (027)
- 33 虎ぬえばかりや やなぎ花いけて 旅のうれのりや かふさねがお (104)
- 34 旅ぬうれのりや 十日とめば二十日 何時がしまもどて わかなみりゆり (091)
- 35 鳥やだぬ鳥も 変るぎやねらぬ 水にいかされて 言葉どかわろ (079)
- 36 別れとおもて さしゆるさかずきや 涙におされて とりやならぬ (161)
- 37 お十五夜ぬお月 かねぎゆらさ照りゆり かながじよにたてば くもてたほれ (049)
- 38 月ぬ夜なれば しばがくれいもれ やみぬゆるなれば まみちいもれ (097)
- 39 花なればにおい 枝もちやいらぬ なりふりやいらぬ ちゆやこころ (124)
- 40 池うけてきよらさ やおしどりめどり 庭立ててきよらさ こがねをなり (025)
- 41 うまれ稲がなしや かまかけてみぶしや 秋名きよらめらべ 手かけみぶしや (043)
- 42 あまだ魚ぬさがて まやぬ目ぬだるさ きよらとちかめととて わん目ぬだるさ (015)
- 43 遊びずきわぬや とめてとめらぬ 鳥ぬしりくちに とめてあそほ (010)
- 44 鳥ぬしりくちに とめてとめらんとときや ひるぬ灯つけて とめてあそほ (078)

- 45 肝ぬまちちけて とめららんときや 肝ぬ灯ちけて とめてにやだな (130)
- 46 たまくがね親や なしどなされより きもだましそろて なしがなりゆめ (093)
- 47 花やふくもととて 節待ちど咲きゆり きもちやげぬ節ぬ まわしぐるしゃ (125)
- 48 花やもとあれば 二度かえて咲きゆり 二度かえて咲かぬ花 なはなわはな (126)
- 49 年ゆたんちおもて 鏡とてみれば 年やなまわらべ もとぬ十八 (101)
- 50 わらべ妻かめて そばよれば泣きゆり 何時がだきほでし ねくびだきゆり (164)
- 51 白雲やまさり 風つれていきゆり わぬやかなつれ いこかしのき (085)
- 52 夜明け白雲ぬ いきわかれみれば かなといきわかれ あれがごとに (155)
- 53 道引きぬ三味や 医者よりもまさり ねなしもるかなが うずでききゆり (142)
- 54 二十日夜ぬくれて はぎぬひきやらんときや かなにおもなせば あかぬひるま (123)
- 55 ひるま水慾しやや こねてこねられり わんがかなみぶしやや こねやならぬ (131)
- 56 白金ぬ花や 水かけていけるな なさけかけみしよし いけてたばれ (084)
- 57 情かけぶしやや わぬやありやしが よそぬ目のしげく くちぬうとるしや (113)
- 58 すばやどぐちあけて かなまちゆるゆるや よあらしやしげく かなやめらぬ (088)
- 59 飛びだちゆる鳥だもそ さきみちどとびゆる わぬやなきや心 みちどきやおた (103)
- 60 雨ぬなまぶりや 道ぬなびろさり かなとなまあそび わかれぐるしや (017)
- 61 先降らばふらじ 後降らばふらじ 今ふりゆる雨ぬ うらみぶしや (073)
- 62 今ふりゆる雨よ わにわかれてふれよ かながなだちおもて いぢてぬれら (115)
- 63 山ぬ木ぬたかさ 風にくまれり きもだかさもてば よそがにくむ (153)
- 64 なきや拌みぶしやや わ身やさねなりゆり さねなてもわぬや うがみぶしやり (108)
- 65 うがみぼどしりゆる うがまずしりゆめ うがおておもかけぬ まさてたちゆり (030)
- 66 こねだこのごろや 夢しげさありやしが きもちやげぬかなば うがもちおもて (072)
- 67 よねやこまよらて いろゝぬあそび あしやや鳥もどて いさたばなし (158)
- 68 夜中目ぬさめて ねむらぬときや じろぬはたゆとて たばこながめ (157)
- 69 あかる白雲に なわかけてぬしゆりよ およばらぬかなに 手さしぬしゆり (002)
- 70 いきよたまくがね よしでよしまれめ かほな節あらば またちうがも (023)
- 71 夜はしる舟や かくれ瀬とかたき かな待ちゆる夜や どしとかたき (159)
- 72 ふりかかれかかれ わぬにふりかかれ ふりかかるなきやや 袖やなさぬ (135)
- 73 打てばうちぶしやや よなりしゆるつづみ よればよりぶしやや かなかおそば (042)
- 74 つづみぐわやうてば 馬のこどうちゆる まましぐわや打てば ままなたちゆり (098)
- 75 かなげましよかれて しばかれどしよたる けほしよましよかれて なおてつしやろ (056)
- 76 あのよめわらべの なまぬうたきけば やはやあとゝに ちせろごとに (012)
- 77 やはやあとゝに ちしえきよたるえのば はろぬくもらしやや なきやがいえしやろ (150)
- 78 なつか声きけば いきやぬかれらぬ とてやあらし声 きかしたほれ (114)
- 79 打ち出さぬうちや いきややきやがと思てよ 一つうちだせば さみやしらぬ (040)
- 80 むかしわきや声や かめぬなりしゆたがよ こねだかせひきし わ声からし (144)
- 81 歌すればよかな 歌ごなしすれよ 歌にこなされて いこかしのき (037)
- 82 歌まむぎしゆしや ことやありよらぬ うたぬいきむぐり おめどしゆたろ (038)
- 83 歌やわが役ぬ きながめどなりゆる きながめぬうたば ゆしゆてぬしゆり (039)
- 84 もとどもとなりゆる そらぬもとなりゆめ すらぬむとなれば ねなしがずら (149)
- 85 あそぶ夜ぬあささ よねとめば夜中 鳥うたうとめば な夜ぬあける (011)

- 86 白ろし石垣に はゆるおもかずら はい先やねらじ もとにもどら (087)
- 87 一でちどいしゃる 未代ちどいしゃる おとこあやばなや あれやこれや (027)
- 88 浜崎ぬ松木 白さぎぬとぐら わきやがねとぐらや あんまふしくろ (127)
- 90 夫慾しやもちゆとき 妻ふしやもちゆとき あやはじきふしやや 命まぎり (050)
- 91 分水嶺はる水や 川とめてとまる わぬやかなとめて 加那ととまら (034)
- 92 しゅぐち打つ波や うちがさねがさね わぬやかなと どみしよかさね (082)
- 93 しゅぐちある石や かくれたりめたり かくれよそのぎや おれがごとに (081)
- 94 月とながめても 星とながめても わんかなおもかげや わすれならぬ (096)
- 95 きも医者もあらぬ あげらしやもあらぬ とかくうてんとの つもりさだめ (060)
- 96 節としばさしや 七日へざめりゆり きもちやげぬかなや ぬほざめりゆり (076)
- 97 あらせつもいきゆり しばさしもいきゆり 節としばさしや やねどきやおろ (018)
- 98 打ちはてぬつづみ 踊りはてどんが めらべわかものや にやわかぐるしや (041)
- 99 枯木くだめしゆて なり木ひきよせて うてらばむはかれ かなとちゆみち (058)
- 100 片枝や枯れて 片ゆだや咲きゆり 咲かぬ片枝も 咲ちたほれ (055)
- 101 なきやや西むぐり わぬやひぎやむぐり めぐりあうときや あわれはなそ (112)
- 102 雲ぬよどみばど 風むよどまじや わぬがうたながれ ここでとまら (064)

資料3 実況演唱歌詞資料

凡例

・本資料は、1986年9月9日、アラセツ当日、浜での平瀬マンカイ祭事ののちに、夕方公民館前で行われた八月踊りの演唱歌詞を記録したものである。以下に歌われた曲目を示す。各曲名の冒頭（ ）内に付された番号は歌われた曲順を示す。

- (1) <アラシャゲ>
- (2) <今の踊り>
- (3) <喜界湾泊まり>
- (4) <ほーこらしゃ>
- (5) <赤木名観音寺>
- (6) <シュンカネクワ>
- (7) <波打際ぬいぶ>
- (8) <曲がりよたかちぢ>
- (9) <今の踊り>

(この後、手踊り<六調>が奏演されてこの日の踊りは終了した。)

- ・各歌詞の頭には、演唱番号の後に、男女の別、資料1における該当歌詞番号を記した。mは男、fは女の演唱。
- ・資料4に楽譜を掲載した曲<アラシャゲ>、<喜界湾泊まり>、<ほーこらしゃ>、<赤木名観音寺>、<シュンカネクワ>、<波打際ぬいぶ>については、表記は実際に演唱された形に従ったため、資料1と若干異なるものがある。資料1と言い回しが異なるものについては歌詞末尾に*を付した。
- ・八月踊りの各曲旋律は、各々固有のはやし詞や句の反復構造を持っているが、ここでは元の歌詞の形(8886、7775)で示した。曲によっては奏演形式の関係から、歌詞の全体は歌われない。

(1) <アラシャゲ>

1 f122	八月の節や	よりもどりもどり	わきやはたちごろや	いつもどりゆり
2 m008	朝汐みちやがりや	しょちよがまのおよべ	よね汐みちやがりや	平瀬およべ
3 f069	今年はろどしや	かほどしどありよる	来年ぬ稲がなしや	あぶしまくら
4 m069	今年はろどしや	かほどしどありよる	来年ぬ稲がなしや	あぶしまくら
5 f122	八月の節や	よりもどりもどり	わきやはたちごろ	いつもどりゆり
6 m110	なきやはじよめあらぬ	わきやはじよめあらぬ	けさぬうやふじの	しいつけはじよめ
7 f067	けさぬうやふじぬ	島建ての悪さ	かながしまわしま	間切わかそ
8 m069	今年はろどしや	かほどしどありよる	来年ぬ稲がなしや	あぶしまくら
9 f012	あのよにせぬきやの	今ぬ歌きげば	やはや後々に	ちしよるごとに

10m150 やはや後々に ちしえきよたるえのば はるのきもらしやや なきやがいえしやろ.

<アラシヤゲ>ホラシ

11 f 122 八月の節や	よりもどりもどり	わきやはたちごろ	いついもどりゆり
12m042 打てばうち欲しやや	よなりしゆる鼓	寄れば寄り欲しやや	かなかおそば
13 f 012 あのよねせんきやの	今ぬ歌きけば	やはや後々に	ちしよるごとに
14m150 やはや後々に	ちしえきよたるいえのば	はるぬけえもらしやや	なきやがいえしやろ
15 f 035 歌かわせかわせ	節かわせかわせ	歌のかわりばど	節もかわる
16m035 歌かわせかわせ	節かわせかわせ	歌のかわりばど	節もかわる

いま おど

(2) <今の踊り>

1 f 029 今の踊りは	よう勢がそろた	踊り習わば	いま習え
2 m 029 今の踊りは	よう勢がそろた	踊り習わば	いま習え
3 f 107 長い刀は	差し様がござる	後ろさがれば	前あがる
4 m 047 沖のとなかに	さよ松立てて	上り下りぬ	舟を待つ
5 f 057 かなと話そは	枕もいらぬ	互いちがいの	腕枕
6 m 075 さんだまけまけ	煙草種おろせ	おろしそだてて	のだばかり
7 f 107 長い刀は	差し様がござる	後ろさがれば	前あがる
8 m 057 かなと話そは	枕もいらぬ	互いちがいの	腕枕
9 f 047 沖のとなかに	さよ松立てて	上り下りぬ	舟を待つ
10m106 鳥はうとたか	まだ夜は夜半	心静かに	寝ておじやる

<今の踊り>ホラシ 1

11 f 120 はじよめて	今年のはじよめて	嫁取りすれば	しやおて子ほざめて
12m106 鳥はうとたか	まだ夜は夜半	心静かに	寝ておじやる
13 f 047 沖のとなかに	さよ松立てて	上り下りぬ	舟を待つ

<今の踊り>ホラシ 2 (ドンドン節)

14m121 走る走るは	なお道走る	やくぬやよたに	みちはしろ
15 f 102 殿内あみしやれや	果報な生れやし	米倉や前なし	床や左手
16m148 めでたの	若松様よ	枝も栄えて	葉もしげる
7 f 069 今年はろどしや	かほどしどありよる	来年ぬ稲がなしや	あぶしまくら
18m069 今年はろどしや	かほどしどありよる	来年ぬ稲がなしや	あぶしまくら
19 f 035 歌かわせかわせ	節かわせかわせ	歌のかわりばど	節もかわる

ききやわんど

(3) <喜界湾泊まり>

1 f 122 八月の節や	よりもどりもどり	わきやはたちごろ	いついもどりゆり
2 m 122 八月の節や	よりもどりもどり	わきやはたちごろ	いついもどりゆり
3 f 069 今年はろどしや	かほどしどやりよる	来年ぬ稲がなしや	あぶしまくら

4 m110	なきやはじよめあらぬ	なきやはじよめあらぬ	けさぬうやふじの	しつけはじよめ*
5 f067	けさぬうやふじの	鳥建てぬ悪さ	かながしまわしま	間切わかそ
6 m114	なつか声きけば	いきやぬかれらぬ	とてやあらし声	聞かしたほれ
7 f085	白雲やまさり	風つれていきゆり	吾ぬやかなつれて	いこかしのき
8 m035	歌かわせかわせ	節かわせかわせ	歌のかわりばど	節もかわる

(4) <ほーこらしや>

1 f136	ほこらしや	いつよりもまさり	いつやこのごとに	あらしたほれ*
2 m136	ほこらしや	いつよりもまさり	いついもこのごとに	あらしたほれ
3 f028	何時やこのごとに	あれば玉黄金	何故にこのしのみ	わがえとりゆり*
4 m008	朝汐みちやがりや	しよちよがまのおよべ	よね汐みちやがりや	平瀬およべ
5 f122	八月の節や	よりもどりもどり	わきやはたちごろ	いつもどりゆり
6 m110	なきやはじよめあらぬ	わきやはじよめあらぬ	けさぬうやふじの	しつけはじよめ
7 f067	けさのうやふじぬ	鳥建てぬ悪さ	かながしまわしま	間切わかそ
8 m024	いくつ比べても	気の毒どなりよる	もとに似る花の	一もとねらぬ
9 f149	もともととなりゆめ	すらぬもとなりゆめ	すらぬもとなれば	ねなしかずら*
10 m031	浮き世かりじまに	永さ居らりりよめ	あそでとくみしよし	かりの世さめ
11 f085	白雲やまさり	風つれていきゆり	吾ぬやかなつれて	いこかしのき
12 m136	ほこらしや	いつよりもまさり	いつやこのごとに	あらしたほれ*
13 f036	いこいこにすいれば	後想影立ちゆり	居ろ居ろにすれば	義理のとうるしゃ*
14 m098	鼓ぐわや打てば	馬のこど打ちゆる	まましやぐわや打てば	ままたちゆり

<ほーこらしや>ホラシ1

15 f136	ほこらしや	いつよりもまさり	いつやこのごとに	あらしたほれ*
16 m069	今年はろどしや	かほどしどありよる	来年ぬ稲がなしや	あぶしまくら
17 f122	八月の節や	よりもどりもどり	わきやはたちごろや	いつもどりゆり
18 m110	なきやはじよめあらぬ	わきやはじよめあらぬ	けさぬうやふじぬ	しつけはじよめ
18 f067	けさぬうやふじぬ	鳥建てぬ悪さ	かながしまわしま	間切わかそ

<ほーこらしや>ホラシ2 (ドンドン節)

19 m151	山から	谷底見れば	植えたなすびぬ	花ざかり
20 f066	今日の佳日に	祝つけておせろ	今日よりが先や	およべばかり
21 m066	今日の佳日に	祝つけておせろ	今日よりが先や	およべばかり
22 f028	何時もこのごとに	あれば玉黄金	何故にこのしのみ	吾ぬやとりゆり
23 m151	山から	谷底見れば	植えたなすびぬ	花ざかり
24 f035	歌かわせかわせ	節かわせかわせ	歌のかわりばど	節もかわる

あかきな かのんせ

(5) <赤木名観音寺>

1 f001	赤木名観音寺や	伊津部かち直ろ	直ろ直ろ	な音ばかり
2 m001	赤木名観音寺や	伊津部かち直ろ	直ろ直ろ	な音ばかり
3 f122	八月の節や	よりもどりもどり	わきやがたちごろや	いつもどりゆり*

4 m069	今年はろどしや	かほどしどやゆる	来年ぬ稲がなしや	あぶしまくら*
5 f066	今日の佳日に	祝ついでておせろ	今日よりが先や	およべばかり
6 m102	殿内あみしやれや	果報な生れやしが	米倉や前なし	床や左手
7 f076	節としばさしや	七日へえざめりゆり	きもちやげぬかなと	ぬへえざめりゆり*
8 m097	月の夜なれば	しばがくれいもれ	闇の夜なれば	まみちいもれ
9 f085	白雲やまさり	風つれていきゆり	吾ぬやかなつれて	いこかしのき
10m098	鼓ぐわや打てば	馬のこど打ちゆる	まましやぐわや打てばもなたちゆり	
11 f012	あのよねせんきゃの	今ぬ歌きけば	やはや後々に	ちしゆるごとに
12m150	やはや後々に	ちしゆきよたるいえのば	はるのけえもらしやや	なきやがいえしやろ
13 f036	手ふりふりよかな	なほがれ手振り	手振りぎよらさせる	わ玉黄金*
14m080	十七八頃や	夜ぬくれど待ちゆる	いついが夜ぬくれて	あせばやかな
15 f110	なきやままねまねと	わきやままねまねと	たげにまねまねと	よさりしよせら

<赤木名観音寺>ホラシ (ドンドン節)

16m148	めでたの	若松様よ	枝も栄えて	葉もしげる
17 f069	今年はろどしや	かほどしどありゆる	来年ぬ稲がなしや	あぶしまくら
18m024	いくつ比べても	気の毒どなりゆる	もとに似る花の	一もとねらぬ
19 f036	いこいこにすれば	後想影ぬ立ちゆり	居ろ居ろにすれば	義理ぬうとるしや
20m035	歌かわせかわせ	節かわせかわせ	歌のかわりばど	節もかわる

(6) <シュンカネクワ>

1 f083	しゅんかねくわや節や	わがくなしうしやが	三味線もちいもれ	つけておせろ*
2 m083	しゅんかねくわや節や	わがくなしうしやが	三味線もちいもれ	つけておせろ*
3 f122	八月の節や	よりもどりもどり	わきやはたちごろや	いつもどりゆり
4 m065	今日のほこらしや	何時よりも勝り	何時やこのごとに	あらしたはれ*
5 f028	何時やこのごとに	あれば玉黄金	何故にこのしのき	吾がえとりゆり*
6 m065	今日のほこらしや	何時よりも勝り	何時やこのごとに	あらしたはれ
7 f069	今年はろどしや	かほどしどありゆる	来年ぬ稲がなしや	あぶしまくら
8 m122	八月の節や	ゆりもどりもどり	わきやはたちごろ	いつもどりゆり
9 f076	節としばさしや	七日へえざめりゆり	きもしやげのかなや	ぬほざめりゆり
10m069	今年はろどしや	かほどしどやゆる	来年ぬ稲がなしや	あぶしまくら
11 f114	なつか声きけば	いきやぬかれらぬ	とてやあらし声	聞かしたはれ
12m111	なきやままねまねと	わきやままねまねと	たげにまねまねと	よさりしよしら
13 f036	いこいこにすれば	後想影ぬ立ちゆり	居ろ居ろにすれば	義理ぬとるしや
14m160	別れてやいきゆり	何ば形見おせろ	汗肌ぬ手拭	形見おせろ
15 f009	汗肌ぬ手拭	形見取てからや	後ろかるがると	いもりしよしら
16m105	取りやわせどありゆる	行きやわせどありゆる	かなが取りやわせで	なきやぼうがで*
17 f111	なきやままねまねと	わきやままねまねと	たざりまねまねと	よさりしよしら
18m080	十七八頃や	夜のくれど待ちゆる	いついが夜のくれて	あせばやかな

<シュンカネクワ>ホラシ1 (ウントノマイ)

19 f045	うんとのまいが	にっさいな	さようんた	にっさいな
20m045	うんとのまいが	にっさいな	さようんた	にっさいな

21 f 045	うんとのまいが	にっさいな	さよどうんた	にっさいな
22m045	うんとのまいが	にっさいな	さよどうんた	にっさいな
23 f 086	しるわしるわ	しどろの	もゆるもゆる	
25 f 045	うんとのまいが	にっさいな	さよどうんた	にっさいな
26m045	うんとのまいが	にっさいな	さよどうんた	にっさいな
29m045	うんとのまいが	にっさいな	さよどうんた	にっさいな
30 f 045	うんとのまいが	にっさいな	さよどうんた	にっさいな

<シュンカネクワ>ホラシ 2 (口説)

24m165	吾んやんめ石垣金ぬなりゆり	浜ぬゆりずな米なりゆり	沖のくろうしゅ酒なりゆり
27m095	一ば二ち三ち四ち五ち六ち七ち八ちこんじゅ九ち十		
28 f 165	吾んやんめ石垣金なりゆり	浜ぬゆりずな米なりゆり	沖のくろうしゅ酒なりゆり*

<シュンカネクワ>ホラシ 3 (ドンドン節)

31m035	歌かわせかわせ	節かわせかわせ	歌のかわりばど	節もかわる
--------	---------	---------	---------	-------

やんごら

(7) <波打際ぬいぶ>

1 m154	波打際のいぶや	いどかけてつりゆり	やんの女童や	さでしつりゆり
2 f 122	八月の節や	よりもどりもどり	わきやはたちごろや	いついもどりゆり
3 m097	月ぬ夜なれば	しばがくれいもれ	闇ぬ夜なれば	まみちいもれ
4 f 114	なつか声きけば	いきやぬかれらぬ	とてやあらし声	聞かせたほれ
5 m069	今年ほろどしや	かほどしどやりよる	来年ぬ稲がなしや	あぶしまくら
6 f 076	節としばさしや	七日へえざめりゆり	きもちやげのかなや	ぬへえざめりゆり
7 m024	いくつ比べても	気の毒どなりよる	もとに似る花の	一もとねらぬ
8 f 149	もとどもとなりゆる	すらのもとなりゆめ	すらのむとなれば	ねなしかずら
9 m122	八月の節や	よりもどりもどり	わきやはたちごろ	いついもどりゆり
10 f 053	想影ぬ立てば	浜うれてみれば	白浪や立ちゆり	愛人やめらぬ*
11 m122	八月の節や	よりもどりもどり	わきやはたちごろ	いついもどりゆり
12 f 076	節としばさしや	七日へえざめりゆり	きもちやげぬかなや	ぬへえざめりゆり
13 m085	いきゆる白雲や	風つれていきゆり	吾ぬやかなつれて	いこかしのき*
14 f 012	あのよねせんきやの	今の歌きけば	やはや後々に	ちしゆるごとに

ま

(8) <曲がりよたかちぢ>

1 f 139	曲がりよたかちぢに	ちよちんぐわばとほし	うりがあかがりに	しのでいもれ
2 m111	なきやまねまねと	わきやまねまねと	たげにまねまねと	よさりしょせら
3 f 008	朝汐みちやがりや	しょちよがまのおよべ	よね汐みちやがりや	平瀬およべ
4 m069	今年ほろどしや	かふどしどやゆる	来年ぬ稲がなしや	あぶしまくら
5 f 012	あのよねせぬきやの	今ぬ歌きけば	やはや後々に	ちしゆるごとに
6 m150	やはや後々に	ちしえきよたるいえのば	はるぬけえもらしやや	なきやがいえしやろ
7 f 031	浮き世かりじまに	永さ居られよめえ	あそでとくみしよし	かりぬ世さめ
8 m114	なつか声きけば	いきやぬかれらぬ	とてやあらし声	聞かしたほれ

9 f 097	月の夜なれば	しばがくれいもれ	闇の夜なれば	まみちいもれ
10m097	月の夜なれば	しばがくれいもれ	闇の夜なれば	まみちいもれ
11 f 116	二三月なれば	桃の花咲きゆり	わ八月なれば	わはな咲きゆり
12m105	取り合わせどありよる	行き合わせどやりよる	かなが取り合わせで	なきやうがで
13 f 035	歌かわせかわせ	節かわせかわせ	歌のかわりばど	節もかわる

いま おど
(9) <今の踊り>

1 f 029	今の踊りは	よう勢がそろた	踊り習わば	いま習え
2 m029	今の踊りは	よう勢がそろた	踊り習わば	いま習え
3 f 047	沖のとなかに	さよ松立てて	上り下りぬ	舟を待つ
4 m106	鳥はうとたか	まだ夜は夜半	心静かに	寝ておじやる
5 f 047	沖のとなかに	さよ松立てて	上り下りぬ	舟を待つ
6 m057	かなと話そは	枕もいらぬ	互いちがいの	腕枕
7 f 107	長い刀は	差し様のござる	後ろさがれば	前あがる
8 m068	五尺でのげに	名前ば染めて	かなが手とたり	吾の手とたり
9 f 075	さんだまけまけ	煙草種おろせ	おろしそだてて	のだばかり
10m021	合わんでのげえに	あわそにすれば	夜ぬよがらすの	なきわかれ
11 f 029	今の踊りは	よう勢がそろた	踊り習わば	いま習え
12m075	さんだまけまけ	煙草種おろせ	おろしそだてて	のだばかり
13 f 057	かなと話そは	枕もいらぬ	互いちがいの	腕枕
14m107	長い刀は	差し様のござる	後ろさがれば	前あがる
15 f 047	沖のとなかに	さよ松立てて	上り下りぬ	舟を待つ
16m107	長い刀は	差し様のござる	後ろさがれば	前あがる

<今の踊り>ホラシ 1

17 f 120	はじよめて	今年はじよめて	嫁取りすれば	しやおて子ほざめて
18m106	鳥はうとたか	まだ夜は夜半	心静かに	寝ておじやる
19 f 120	はじよめて	今年はじよめて	嫁取りすれば	しやおて子ほざめて
20m047	沖のとなかに	さよ松立てて	上り下りぬ	舟を待つ

<今の踊り>ホラシ 2 (ドンドン節)

21 f 151	山から	谷底見れば	植えたなすびぬ	花ざかり
22m148	めでたの	若松様よ	枝も栄えて	葉もしげる
23 f 012	あのよねせんきゃの	今ぬ歌きけば	やはや後々に	ちしよろごとに
24m150	やはや後々に	ちしえきよたるいえのば	はるぬけえもらしゃや	なきやがいえしゃろ

<今の踊り>ホラシ 3 (口説)

25 f 095	一ば二ち三ち四ち五ち 六ち七ち八ちこんじゅ九ち十			
26m129	はやてお庭に	しだら木ばうえとて	にしの風吹くとき	さらさらざらむきゆり
27 f 129	はやてお庭に	しだら木ばうえとて	にしの風吹くとき	さらさらざらむきゆり

資料4 秋名八月踊りの旋律採譜・舞踊採譜

旋律採譜凡例

- ・旋律採譜・舞踊採譜において元とした音声・映像資料の記録日時を下に示す。
舞踊採譜に関してはこの他に1992年3月14日の調査資料も参考としている。

曲名	旋律採譜	舞踊採譜
1. <アラシャゲ>	1986.9.9	1986.9.9、1990.9.28
2. <今の踊り>	1986.9.9	1986.9.9、1990.9.28
3. <喜界湾泊まり>	1986.9.9	1990.9.28
4. <ほーこらしゃ>	1986.9.9	1986.9.9
5. <ほーめらべ>	1990.9.28	1990.9.28
6. <あまだ下がりゃ>	1990.9.28	1990.9.28
7. <あがんむらくわ>	1990.9.28	1990.9.28
8. <波打際ぬいぶ>	1986.9.9	1986.9.9、1990.9.28
9. <シュンカネクワ>	1986.9.9	1986.9.9、1990.9.28
10. <曲がりよたかちぢ>	1986.9.9	1990.9.28
11. <赤木名観音寺>	1986.9.9	1990.9.28
12. <てらましょ>	1986.9.9 (浜での演唱)	1986.9.9
13. <ヒヤヌガヘー>	1990.9.28	1990.9.28

[奏演形態]

- ・太鼓は旋律の歌い出しの前から打ち出し、一曲を通じて打ち続けられるが、その拍周期が踊りの周期と一致している為、舞踊採譜にリズムパターンを記すにとどめた。
- ・旋律は、男女別に記し、ヴァリアンテ（節や演唱者による旋律変化）は、必要に応じて五線譜内、もしくはその上方に示し、節によるヴァリアンテは該当節番号を記す。
- ・各曲の踊り始めから、歌詞に通し番号をつける。普通は女性側から歌い出すので、原則的には奇数番が女性、偶数番が男性となる（ただし例外の演唱例あり）。ある曲でホラシ旋律に変わっても、その踊りが終了するまでは通し番号を続ける。
- ・掛合において各番で相手側が入ってくる位置を ↓ で示す（ハヤシ部分にも適用）。
例：↓3. 2番（女）の演唱において3番（男）がここから歌い始める。
- ・各番での演唱の中断場所は演唱歌詞部分の後に // で示す。
- ・各番冒頭でサキダチ（歌い出し）のみが歌う部分は、該当部分歌詞を [] で囲む。
- ・歌詞中、演唱されなかったシラブル、または聞き取れない部分は () で囲む。
- ・ある節（番）において歌われない旋律・拍部分はその該当歌詞部分に――→を記す。

[リズム]

- ・採譜に関して、読譜上便宜的に妥当な拍節を採用し、冒頭の五線譜上に拍子記号を記す。作譜の上で不規則拍節となる場合、その都度該当小節に拍子を記す。
- ・曲のテンポは、原則的に各節の冒頭部分のテンポを記録する。

[音高]

- ・記譜の音高は原則的に実音表記の方法をとるが、曲或いは一曲内の節によっては移調表記し実音との音程関係を各曲冒頭に記した。
- ・楽譜上で常にシャープ・フラットがつく音に関しては、便宜的に調号と同様の表記を用いるが、これは特定の調性または音階・旋法を表すものではない。
- ・半音以下の音高変化は、各音符に矢印↑・↓を付す。これはその1音についてのみ有効とする。
- ・音高不確定音は、五線譜上の近似位置に×の譜頭で記す。
- ・連続的（ポルタント）音高移動は、音符間に実線をひく。
- ・コブシや細かなメリスマなど装飾音は、通常よりも小さな装飾音符で記す。
- ・裏声の部分はその音符の上に*印を付ける。

[歌詞]

- ・1990年採集曲及びくてらましょ>については、各曲間に演唱歌詞を示した（1986年採集曲については資料3参照）。歌詞冒頭にその曲における演唱通し番号、男女の（女：f 男：m）、資料1における該当歌詞番号を付した。ただし表記は実際の演唱に従ったため、資料1とは若干異なるものがある。資料1と言い回しが異なるものには歌詞末尾に*を付した。

舞踊採譜凡例

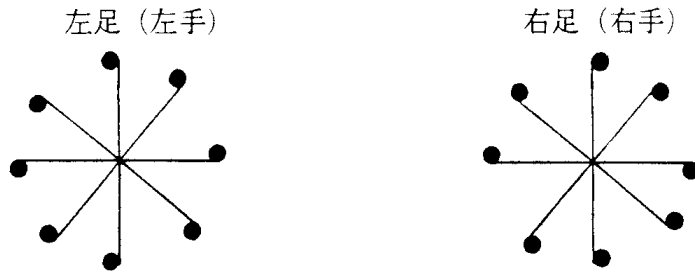
- ・舞踊採譜において元とした音声・映像資料の記録日時は旋律採譜凡例参照。
- ・採譜方法は小林公江氏の記譜法（小林1982参照）を採用した。以下にその記譜の凡例を示す。

◆中心となる記号とその使用方法

左足（或いは左手）を示す → ● ← 右足（或いは右手）を示す
 ↑
 体の中心を示す線

体の中心を示す線と、左右の足（或いは手）を示す記号に方向を示す線を組み合わせ、重心の移動や手の動きを示す。

左足を前に出す (左足に重心が移動したことを示す)	●	左手を前に出す
右足を前に出す (右足に重心が移動したことを示す)	●	右手を前に出す
左足を左横に出す	●	左手を左横に出す
右足を左横に出す	●	右手を左横に出す
左足を右横に出す	●	左手を右横に出す
右足を右横に出す	●	右手を右横に出す
左足を後ろに出す	●	左手を後ろに出す
右足を後ろに出す	●	右手を後ろに出す

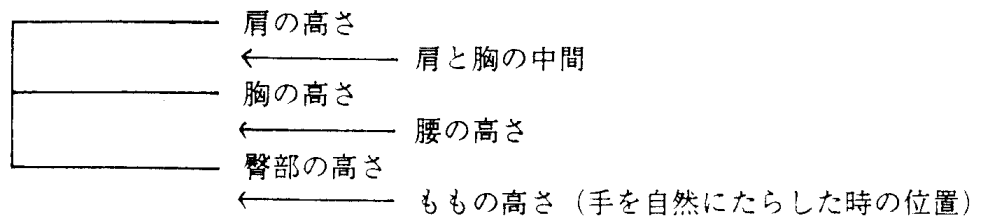


重心を示す記号 1.左足に重心があることを示す 2.右足に重心があることを示す	● 1. ● 2. ●	手の甲或いは手を 合わせたことを示す 1.左手 2.右手
足が空中にあることを示す	○	
足と地面の接触を示す	⊗	
足の一部で重心を支えていることを示す。黒い部分が重心を支える。	●	手先を示す。黒い方が手の甲、 白い方が手の平を示す。

○、⊗、●は●と同じように使用する。(左右の区別や方向など)

◆手に関する表記について

手の動きは、肩を中心として、前後左右、及び上下に動く。この両方を同時に記すために、次のような欄を使用する。この場合、手の高低は手の甲、手の平の位置を示す。

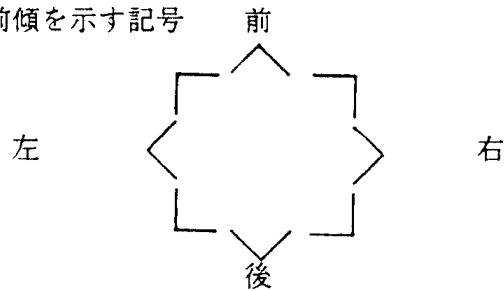


	手を体の横に自然にたらしめた状態を示す。
● ●	肩幅で手を前に出す。手の甲を上にする。
○ ○	肩幅で手を前に出す。手の平を上にする。
○ ○	肩幅で手を前に出す。手の平は内側、手の甲は外側を向く。

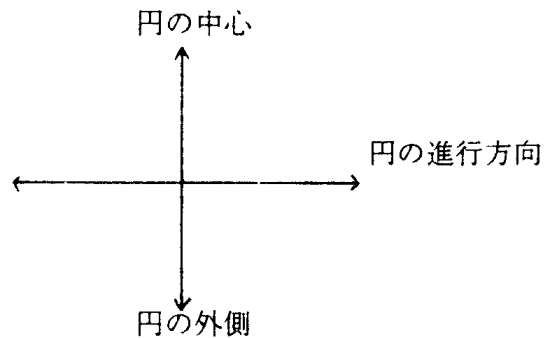
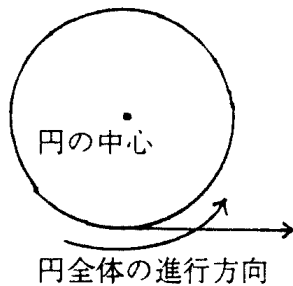
◆その他の記号

∩ 手首のひねりを示す。

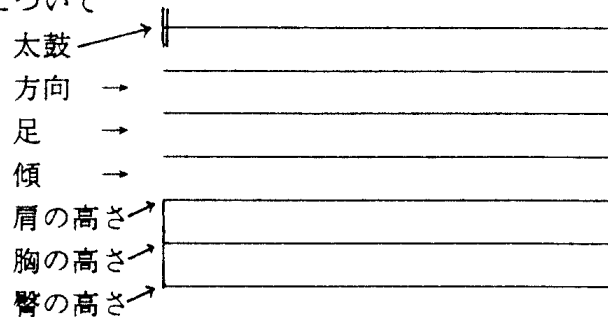
・体（上体）の前傾を示す記号



・方向 中心となる体の方向を示す



・譜表について



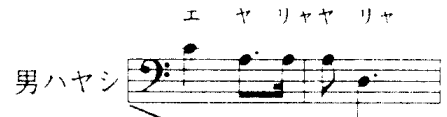
- ◆付記
- 1.踊りの1フレーズと見られる動きには矢印線をつけてその運動を示した。
 - 2.動きの終り（手の下ろし方など）も矢印線を引いて示した。
 - 3.両手の平を叩く箇所は補足として譜中に「叩」字を記した。

1. <アラシヤゲ>

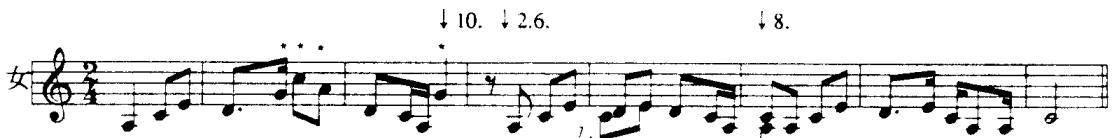
実音は男女とも長2度上。ただし女性9番、男性10番は長3度上。
 演唱歌詞は資料3参照。



- ♩=80~
1. ---[しつ... -や-] よーりも どーり もーどーり ハレ わーきゃはた ---ち ごーろ
 3. ---[とし... -や-] かーほど しーど あーりよーる ハレ やーねぬ に ---が なーし
 5. ---[しつ... -] やー よーりも どーり もーどーり ハレ わーきゃはた ---ち ごーろ
 7. ---[ふ-]じ- -ぬ- し-まだ て-ぬ わ-る- さ ハレ か-ながし ---ま わ-し
- ♩=84~
9. [にせぬ] き+ -ぬ- な-まの う-た き-け- ば ハレ や-はや あ ---と あ---と



1. ウやー いーついもー どーりゆりーヨオンドー ハーレ わーきゃはた ---ちー ご
3. イやー あーぶしー まーくらーヨオンドー ハーレ やーねぬ //
5. ウやー いーついもー どーりゆりーヨオンドー ハーレ わーきゃはた ---ちー ご
7. イまーまーざりー わーかそーヨオンドー ハーレ かーながし ---まー わ
9. オにーちーせろー ご ---とにーヨオンドー ハーレ やーはや あ ---とー あ



1. わきゃはた ---ち ご ---ろ ウやー いーついもー どーりゆりーヨオンド
5. わきゃはた ---ち ご ---ろ //
7. かながし ---ま わ ---し イまーまーざりー わーかそ //
9. やはや あ ---と あ ---と //



2. [あさしゆ]み ーちゃがーり ーや しょちよがま ーの おーよ ーべ ハレ
 4. [ことし]は ーろ どーし ーや かほど し ーど あーりよーる ハレ
 ♪ =83~ 6. [なきや]はじょーめ あーら ーぬ わきやは じょーめ あーら ーぬ ハレ
 ♪ =90~ 8. [ことし]は ーろ どーし ーや かほど し ーど あーりよーる ハレ
 10. [やは]や あ ーと あーと ーや ちせきよた ーる えーの ーば ハレ



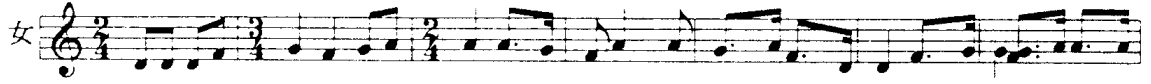
2. ーよねしゆ み ーちゃが り ーや ひらせ お ーよ べ ーヨーン ドハレー よねしゆ
 4. ーやねの にーが な し ーや あぶしま ーく ら ーヨーン ドハレー やねの
 6. ーけさぬ うーや ふ じ ーの しつけ は ーじ め ーヨーン ドハレー けさぬ //
 8. ーやねの にーが な し ーや あぶしま ーく ら ーヨーン ドハレー やねの
 10. ーはるの き ーも → <アラシャゲ>ホラシ 10.



2. み ーちゃが ーり イハレ よねしゆみーちゃが り ーやー // (ひら せ お よ べ)
 4. に ーが な ーし イヤー やねの にーが な し ーやー //
 8. に ーが な ーし イハレ やねの にーが な し ーやー //

・最後の3小節間（※部分）はこの演唱では歌われなかったが、同日（1986.9.9）の浜での演唱録音から補った。

<アラシャゲ>ホラシ 男性10番、女性11番の実音は半音下。



♩ =132~ 11. -----→[しつゝ]やー より も どー り も ーどー り ハレ わ ーきゃは
 ♪ =138~ 13. -----→[きゃーのー] なまのうー たきーけーばハレやーはや
 15. [うたかわ ーせー] ふしかわーせかーわーせハレうーたの



11. た ー ち ー ぎ ー ろ オ や い ー つ い も ど ー ー り ゅ り ー ヨ ン ド
 13. あ ー と あ ー と オ に ち ー し ょ ろ ー ぎ ー と に ー ヨ ン ド
 15. か ー わ り ー ば ア ど ふ ー し の か ー ー わ ろ ー ヨ ン ド



10. (<アラシャゲ>10.から続く) -----→
 ♪ =136~ 12. -----→(うち) おしやーや よ な り ー し ゅ ー る つ づ ー み ー ハ レ
 14. -----→(あと) あと ー に ち せ き ー た ー る い え ぬ ー ば ー ハ レ
 ♪ =145~ 16. [うたかわ せ] か わ ー せ ー ふ し か ー わ ー せ ー か わ ー せ ー ハ レ



♪ =108 10. -----→ら しゃや な きやが ー え ー しゃろ ヨ ン
 12. よ れ ば よ ー り ぶ しゃや かなが ー お ー そ ば ヨ ン
 14. は ろ の き ー も ら しゃや な きやが ー え ー しゃろ ヨ ン
 16. う た の か ー わ り ば ど ふ し も ー か ー わ る ヨ ン



10. ド ハ レ は る の //
 12. ド ハ レ よ ー れ ば よ ー り ぶ ー しゃ ア や かなが ー お ー そ ば
 14. ド ハ レ //
 16. ド ハ レ う ー た の か ー わ り ー ば // (踊終了)

2. <今の踊り>

実音は男女とも半音下。演唱歌詞は資料3参照。

男ハヤシ



♪=66~ 1. [いま] の おどりは よせ が そろ た (オヨ) お
 ♪=72~ 3. [かな] と はなそは まくら も い らぬ た
 ♪=76~ 5. [とり] わ う とたか まだよ は よ な か こ
 ♪=84~ 7. [あわ] ん て のげに あわそ に すい れ ば よ
 9. [ごしゃく] て のげに なまえ ば そ め て か

↓4. ↓2. ↓6.8.10.



1. ど-----り な ら わ ー ば い ま な ら お ヤイキュラサ
 3. が-----い ち が い の う で ま く ら
 5. こ-----ろ し ず か に ね て お じ ゃ る
 7. る-----の よ が ら す の な き わ か れ
 9. な-----が て と た り わ て と た り



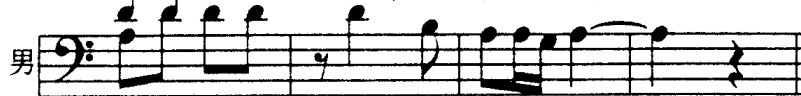
2. [さん]だ まけまけ たばこだ ね お ろ せ ソリヤ おろしよ
 4. [おき]の となかに さよまつ た て て ソリヤ のほり
 6. [おき]の となかに さよまつ た て て ソリヤ のほり
 ♪=88~ 8. [かな]と はなそは まくらも い らぬ ソリヤ たがい
 ♪=90~ 10. [とり]は うとたか まだよは よ な か ソリヤ オころ

6.8.



2. - そ だ - て - て の だ ば か り } ヤイキュラサア ヤイキュラサノ
 4. - く だ - り - の ふ ね を ま つ
 6. - く だ - り - の ふ ね を - ま つ
 8. - ち が - い - の う で ま - く ら
 10. - し ず - か - に ね て ご ざ れ

↓7. ↓3.5.9. ↓11.ホラシ1



ハ リ ヤ コ リ ヤ シ ョ シ ヤ イ キ ユ ラ サ

<今の踊り>ホラシ 1 男女とも実音は半音下。



♩=120〜 11. はじよめて へー へ ヤレコー レ こ と し はじよー めて



11. よ め と り しゃ お て しゃ お て こ ほ ざ め て -



♩=139〜 12. はじよめて へ へ ヤレコー レ こ と し はじよ めて



12. よ め と り しゃ お て しゃ お て こ ほ ざ め て -

<今の踊り>ホラシ2 (ドンドン節)

実音は男女とも半音下。

男は16番以降、さらに譜より長2度高く歌われた。

女

♩=140~ 13. -----> めで - たの - わ か ま - つ さ - まよ ナ え - だ も
 ♩=144~ 15. [けえぶの -] よ か る ひに - よ わ つ けて お - せろ ナ けえ - ぶ よ
 ♩=148~ 17. [しらく] も や ま さり - か ぜ つ れて い - きゅり ナ わ - ぬ や

女

13. さ か える エ はも し げる な アリヤドンドン シャコレ ドンシャー セ -
 15. りー が さ き や エ およ べ ばかり
 17. か - な つ れて エ い こ か し の き

男

14. はついが つい のせ ついや エ より も どり も どり ナ わ きや は
 16. なつか ご えき けば エ い き や ぬか れ らぬ ナ と て や
 18. うたか わ せか わ せ エ ふ し か わ せ か わ せ ナ う た の

男

14. た - ち ご ろ や エ いついも - どりゆり } アリヤドンドン シャコレ ドンシャー セ -
 16. あ - ら し ご え - きか し た ば れ
 18. か わ り ぼ ど - ふ し も か わ る

(踊終)

3. <喜界湾泊まり>

演唱歌詞は資料3参照。

3. (にとし) は -- ろ ど -- し --
 7. (しら)[くも -- や] ま -- さ --

♩ = ca. 63

女

- 1.3.
1. はちが つ --- の し --- ち --- や --- よ --- り --- も ど --- り ---
 3. (にとし) は --- ろ ど --- し --- や --- か --- ほ --- ど し --- ど ---
 5. [けさぬ] う --- や ふ --- じ --- の --- し --- ま --- た て --- の ---
 7. (しら)[くも --- や] ま --- さ --- り --- か --- ぜ --- つ れ --- て ---

女

1. も --- ど --- り ハ --- レ わ き ♪ --- は --- た --- ち --- ご --- ろ オ --- や --- い --- つ --- も
3. や --- ゅ --- る ハ --- レ や ね --- の --- に --- が --- な --- し イ --- や --- ハ --- あ --- ぶ --- し
5. わ --- る --- さ ハ --- レ かな --- が --- し --- ま わ --- し イ --- ま --- ま --- ざ --- り
7. い --- き ♪ --- り ハ --- レ わ ぬ --- や --- か --- な --- つ --- れ イ --- て --- い --- こ --- か

男ハヤシ

↓ 6.

女

1. ど --- り ♪ り --- ヤ --- ヨ ン ド ハ --- レ --- わ --- き ♪ は た --- ち --- ご --- ろ →
3. ま --- く --- ら --- ヤ --- ヨ ン ド ハ --- レ --- や --- ね の に --- が --- な --- し
5. わ --- か --- そ --- ヤ --- ヨ ン ド //
7. し --- の --- き --- ヤ --- ヨ ン ド ハ --- レ --- わ --- ぬ や か --- な --- つ --- れ →

女

1. わ き ♪ --- は --- た --- ち --- ご --- ろ オ --- や --- い //
3. や ね --- の --- に --- が --- な --- し イ --- や --- あ --- ぶ --- し //
7. わ ぬ --- や --- か --- な --- つ --- れ エ --- て --- い --- こ --- か //

男 

2. [ハレはちが] つのしつ... --- やーよーりーもどーりー
 ♩=64~ 4. [ハレなきは] じよめあら---ぬーな---きゃ---はじよ---めー
 6. [ハレなつか] ごえきけ---ばい---き---やぬ---かー
 ♩=68~ 8. [ハレ]うたかわせかわ---せふ---し---かわ---せ-

男 

2. もどーりハレわきゃはた---ちごーろオやいつも
 4. あらぬハレけさぬう---やふーじイのしつけ
 6. れらぬハレとてやあ---らしーごオえきかし
 8. かわーせハレうたのーか---わりーばアどふしも

女カケ声 コリヤコリヤタイ

男 

2. どーりりーヤヨンドハレわきゃはた---ちごーろ → ハレ
 4. はじよめーヤヨンドハレけさぬう---やふーじ → ハレ
 6. たほれーヤヨンドハレとてやあ---らしーご ハレ
 8. かわるーヤヨンドハレうたのーか---わりーば ハレ

↓ 5.7. ↓ 3.

男 

2. わきゃはた---ちごーろ //
 4. けさぬう---やふーじ //
 6. とてやあ--- //
 8. うたのーか---われーばアどふしもかわるヤヨンド (踊終了)

4. <ほーこらしゃ>

男女とも実音は1オクターブ下。

演唱歌詞は資料3参照。

• =ca.104~

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-------|--------|-----|---|----|----|----|------|---|------|------|------|---|------|-----|---|-----|-----|---|---|-----|---|---|
| 1. | ----- | [ほーこら] | しゃや | ー | いー | つよ | りー | も--- | ま | さ--- | り | い | | | | | | | | | | | |
| 3. | [いつ | や] | こー | の | ご | と | にー | あ | れ | ば | た--- | ま--- | こ | が--- | ね | の | | | | | | | |
| 5. | はち | が | つー | の | せ | つ | や | ー | よ | ー | り | も | ど | ー | り | わ | | | | | | | |
| 7. | [けさ | の] | うー | や | ふ | じ | ぬ | ー | し | ー | また | て | ー | の | --- | わ | る | --- | さ | か | | | |
| 9. | [もと | ど] | も | と | な | り | ゆ | め | ー | す | ー | ら | の | も | ー | と | --- | な | り | ゆ | め | す | |
| 11. | [しら | く] | も | ー | や | ま | さ | り | ー | か | ー | ぜ | つ | れ | ー | て | --- | い | き | ゆ | --- | り | わ |
| 13. | [いこ | い] | こ | ー | に | す | い | れ | ば | ー | あ | と | め | か | ー | げ | --- | た | ち | ゆ | --- | り | お |

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|----|---|----|---|----|---|------|---|---|-----|-----|------|---|-----|---|---|-----|-----|----|---|---|---|---|---|---|---|
| 1. | つー | や | こー | の | ご | と | に--- | あ | ら | し | た | ほ--- | れ | ア | ナ | レ | ー | イ | シ | ョ | | | | | | |
| 3. | てー | に | こー | の | しー | の | き--- | わ | が | え | と | り | ゆ | --- | り | ア | ナ | レ | ー | イ | シ | ョ | | | | |
| 5. | きゃ | は | た | ー | ち | ご | ろ | ー | や | --- | い | つ | も | ど | り | ゆ | --- | り | ア | ナ | レ | ー | イ | シ | ョ | |
| 7. | な | ー | が | し | ー | ま | わ | ー | し | ー | ま | --- | ま | ぎ | り | わ | か | --- | そ | ア | ナ | レ | ー | イ | シ | ョ |
| 9. | ら | ー | の | も | ー | と | な | ー | れ | ー | ば | --- | ね | な | し | か | ず | --- | ら | ア | ナ | レ | ー | イ | シ | ョ |
| 11. | ぬ | ー | や | か | ー | な | つ | れ | ー | て | --- | い | こ | か | し | の | --- | き | ア | ナ | レ | ー | イ | シ | ョ | |
| 13. | ろ | ー | お | ろ | ー | に | す | れ | ー | ば | --- | ぎ | り | の | と | う | る | --- | しゃ | ア | ナ | レ | ー | イ | シ | ョ |

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|---|---|----|---|---|----|---|----|---|------|---|---|-----|-----|---|------|----|-----|-----|-----|---|----|---|---|---|---|---|---|
| 1. | ナ | い | つ | ー | や | こー | の | ご | と | に--- | あ | ー | ら | し | た | ほ--- | レ | ー | イ | シ | ョ | // | | | | | | |
| 3. | ナ | の | て | ー | に | こー | の | しー | の | き--- | わ | ー | が | え | と | り | ゆ | --- | り | ア | ナ | レ | ー | イ | シ | ョ | | |
| 5. | ナ | わ | きゃ | ー | は | た | ー | ち | ご | ろ | ー | や | --- | い | つ | も | // | | | | | | | | | | | |
| 7. | ナ | か | な | ー | が | し | ー | ま | わ | ー | し | ー | ま | --- | ま | ぎ | り | わ | か | --- | そ | ア | ナ | レ | ー | イ | シ | ョ |
| 9. | ナ | す | ら | ー | の | も | ー | と | な | ー | れ | ー | ば | --- | ね | な | し | か | ず | --- | ら | ア | ナ | レ | ー | イ | シ | ョ |
| 11. | ナ | わ | ぬ | ー | や | か | ー | な | つ | れ | ー | て | --- | い | こ | か | し | の | --- | き | ア | ナ | レ | ー | イ | シ | ョ | |
| 13. | ナ | お | ろ | ー | お | ろ | ー | に | す | い | れ | ー | ば | --- | ぎ | り | の | // | | | | | | | | | | |



4. [あさしよ] み-ちゃがりや しょちよがまの-



- 2. ----- [ほ] こら しゃや いつより もー まさー り い
- 4. [あさしよ] み ちゃが りや しょちよがまの--- およー べ よ
- ♩ =106 6. [なきやは] じよめあ らぬ わきやは じよめ--- あらー ぬ け
- ♩ =110 8. [いくつ] くらべ て も きのどくど--- なりよー る も
- ♩ =114 10. [うきよ] かりじ まに なげさおら--- れりよー め あ
- 12. ----- [ほこら] しゃや いつより も--- まさー り い
- 14. [つづみぐわ]やう てば うまのこど--- うちゅー る ま



- 2. つ も こー のご とー に--- あ らし た ほ--- れ アナ レー イ ショ
- 4. ね しよ みー ちゃがりーや--- ひ らせ およ--- べ アナ レー イ ショ
- 6. さぬ うー やふ じーの--- し つけ は じよ--- め アナ レー イ ショ
- 8. とに にー るは なーの--- ちよもと ねら--- ぬ アナ レー イ ショ
- 10. そで とー くみ しよし--- かりの よさ--- め アナ レー イ ショ
- 12. つや こー のご とー に--- あ らし た ほ--- れ アナ レー イ ショ
- 14. ま しゃ ぐわー やう てば--- ま まな た ちゅーり アナ レー イ ショ



- 2. ナ い つ や もー のご と にー あー らし た ほ //
- 4. ナ よ ね しよ みー ちゃが りやー ひー らせ お よー べ
- 6. ナ け さぬ うー やふ じーの--- しー つけ は じよー め
- 8. ナ も とに にー るは なーの--- ちよーもと ねらー ぬ
- 10. ナ あ そで とー くみ しよし--- かりの よさー め
- 12. ナ い つ や こー のご と にー あー らし た ほー れ
- 14. ナ ま ま しゃ ぐわー やう てば--- まー まな た ちゅー り

<ほーこらしゃ>ホラシ 1

女性の実音は1オクターブ下。

女性の17番以降はさらに半音ほど高くなる。



- ♩ =116 15. -----> [ほーこ] ら しゃ---やー いーつより も ま さー り ハレ
 ♩ =123 17. [はちが つーの] せ つー ---やー よーりも ど りも どー りーハレ
 ♩ =123 19. [けさぬ う]ーや ふ じー ---ぬー しーまた て の わ るー さ ハレ

↓ 16. 20.ホラシ2(ドンドン節 譜略)



15. い つ や こー の ご と ---に あ ら し た //
17. わーきゃは たー ち ご ろ ---やー い つ も ど ---りゆ りーヤシヨ レ
19. か な が しー ま わ し ---まー ま ざ り わーか そーヤシヨ レ



16. [はーろ] どーし ---やー かー ほど し ど あ り ゃーる ハレ や ね の
18. [じょ]ーめ あーら ---ぬー わー きゃは じょめ あーらー ぬ ハレ け さ ぬ

↓ 19.

↓ 17.



16. にーが なーし ---やー あ ぶ し まーく ら ヤシヨレあぶし まーく ら
18. うーや ふーじ ---ぬー し つ け はーじょめ ヤシヨレし つ け はーじょめ

5. <ほーめらべ>

実音は男女とも半音下。男性↓hの音は後半ではbまで下がりがち。

この演唱では、例外的に男性から歌い出している。



- ♩=65~ 1. [はちがつーの] せ --- つい イーやー --- よりも どーり も --- どり ヨーハレ
 3. [ことし]はーろ ど --- し イーやー --- かほどしーど あーりよる ヨーハレ
 ♩=74~ 5. [はちがつーの] せ --- つい イーやー --- よりも どーり も --- どり ヨーハレ
 7. [いくつ]くーら べ --- て エーもー --- きのどくーど なーりよる ヨーハレ
 ♩=76~ 9. [ふしか]わーせ か --- わ アーせー --- ふしかわーせ か --- わせ ヨーハレ



1. わきゃは たーち ご --- ろ オーやー --- いついも どーりゆり --- ヤショ レーハレ
 3. やねの にーが な --- し イーやー --- あぶしまーくら --- ヤショ レーハレ
 5. わきゃは たーち ご --- ろ オーやー --- いついも どーりより --- ヤショ レーハレ
 7. もとに にーる は --- な アーの --- ちよもとねーらぬ --- ヤショ レーハレ
 9. うたの かーわれ --- ば アーど --- ふしもかーわる --- ヤショ レーハレ

2.6.8.



1. わきゃは たーち ご --- ろ オーやー --- いついも どーりゆり --- ヤショレ
 3. やねの にーが な --- し イーやー --- あぶしまーくら --- ヤショレ
 5. わきゃは たーち ご --- ろ オーやー --- いついも どーりより --- ヤショレ
 7. もとに にーる は --- な アーの --- ちよもとねーらぬ --- ヤショレ
 9. うたの かーわれ --- ば アーど --- ふしもかーわる --- ヤショレ (踊終了)



2. [あのよ] ね—せ—ん—きや —の —な—まのう—た き—けば—ヨ ハレ
 ♩=70~ 4. [はちが つ...]-の—せ—つい —や —よ—りもど—り も—どり—ヨ ハレ
 6. [なつか] ご—え—き—け —ば —い—きやぬ—か れ—らぬ—ヨ ハレ
 8. うたか わ—せ—か—わ —せ —ふ—しかわ—せ か—わせ—ヨ ハレ



2. や はやあ— —と—あ—と— オに ち—しよろご— —と に—ヤショーレ ハレ
 4. わきやはた— —ち—ご—ろ— オや い—ついもど— —りゆり—ヤショーレ ハレ
 6. と てやあ— —ら—し—ご— オえ き—かせた— —ほ れ—ヤショーレ ハレ
 8. う たの か— —わ—り—ば— アど ふ—しもか— —わ る—ヤショーレ ハレ



2. や はやあ— —と—あ—と— オに ち—しよろご— —と に—ヤショーレ
 4. わきやはた— —ち—ご—ろ— オや い—ついもど— —りゆり—ヤショーレ
 6. と てやあ— —ら—し—ご— オえ き—かせた— —ほ れ—ヤショーレ
 8. う たの か— —わ—り—ば— アど ふ—しもか— —わ る—ヤショーレ

5. <ほーめらべ>演唱歌詞

1m122	八月の節や	よりもどりもどり	わきやはたちごろや	いつもどりゆり
2 f 012	あのよねせんきやの	今ぬ歌きけば	やはや後々に	ちしよるごとに
3m150	今年はろどしや	かほどしどありよる	来年の稲がなしや	あぶしまくら
4 f 122	八月の節や	よりもどりもどり	わきやはたちごろ	いつもどりゆり
5m122	八月の節や	よりもどりもどり	わきやはたちごろ	いつもどりゆり
6 f 114	なつか声きけば	いきやぬかれらぬ	とてやあらし声	聞かしたはれ
7m024	いくつ比べても	気の毒どなりよる	もとに似る花の	一もとねらぬ
8 f 035	歌かわせかわせ	節かわせかわせ	歌のかわりばど	節もかわる
9m035	節かわせかわせ	歌かわせかわせ	歌のかわりばど	節もかわる*

6. <あまだ下がりや>演唱歌詞

1m016	あまだ下がりややひゆんかまち 出てもれうっちゆんきや		やんくぶ下がりややとつといふる にしゆておせろ	
2 f 122	八月の節や	よりもどりもどり	わきやはたちごろや	いつもどりゆり
3m116	二三月なれば	桃の花咲きゆり	わ八月なれば	わはな咲きゆり
4 f 066	今日の佳日に	祝つけておせろ	今日よりが先や	およべばかり
5m080	十七八頃や	夜のくれど待ちゆる	いついが夜ぬくれて	あせほやかな
6 f 114	なつか声きけば	いきやぬかれらぬ	とてやあらし声	聞かせたはれ
7m012	あのよめわらべえの	今ぬ歌きけば	やはや後々に	ちしゆるごとに
8 f 150	やはや後々に	ちしえきよたるいえのば	はるのきもらしやや	なきやがえしやろ
9m135	ふりかかれかかれ	わぬにふりかかれ	ふりかかるとなきやや	袖やなさぬ
10 f 036	手ふりふりよかな	ななふえがれ手振り	手振りぎよらさせる	わ玉黄金
11m008	朝汐みちやがりや	しよちよがまぬおよべ	よね汐みちやがりや	平瀬およべ
12 f 035	歌かわせかわせ	節かわせかわせ	歌のかわりばど	節もかわる

7. <あがんむらくわ>演唱歌詞

1 f 122	八月の節や	よりもどりもどり	わきやはたちごろや	いつもどりゆり
2m008	朝汐みちやがりや	しよちよがまのおよべえ	よね汐みちやがりや	平瀬およべえ
3 f 114	なつか声きけば	いきやぬかれらぬ	とてやあらし声	聞かせたはれ
4m066	今日の佳日に	祝つけておせろ	今日よりが先や	およべばかり
5 f 042	打てばうち欲しやや	よなりしゆる鼓	寄れば寄り欲しやや	かなかおそば
6m122	八月の節や	よりもどりもどり	わきやはたちごろや	いつもどりゆり
7 f 114	なつか声きけば	いきやぬかれらぬ	とてやあらし声	聞かせたはれ
8m098	鼓ぐわや打てば	馬のこど打ちゆる	まましやぐわや打てば	ままたちゆり
9 f 066	今日の佳日に	祝つけておせろ	今日よりが先や	およべばかり
10 f 085	白雲やまさり	風つれていきゆり	吾ぬやかなつれて	いこかしのき
11 f 035	歌かわせかわせ	節かわせかわせ	歌のかわりばど	節もかわる

<あがんむらくわ>ホラシ (ドンドン節 譜略)

12m148	めでたの	若松様よ	枝も栄えて	葉もしげる
13 f 066	今日の佳日に	祝つけておせろ	今日よりが先や	およべばかり
14m035	歌かわせかわせ	節かわせかわせ	歌のかわりばど	節もかわる

6. <あまだ下がりや>

男性5,7番、女性4,6番の実音は半音上、男性9番以降、女性8番以降は長2度上。
1,2番は途中まで男女一緒に歌われたが以後の進行により奇数番を男性とした。



- ♩ =96~ 1. あまだ さがりやーやひゅんかま ち ハレーやんくぶ さがりややとっついふるいじて
 ♩ =99~ 3. [にさん が ついー] な れー ば ハレー も も の はー なー さ き ゅ り ヨ わ は ち
 ♩ =104~ 5. [じゅしちは ちー] ご ろー や ハレー よ の く れー どー ま ち ゅ る ヨ い つ い が
 7. [あのよめ わーー ら べえー] の ハレー な ま の うー たー き け ば ヨ や は や
 ♩ =110~ 9. [ふりか か れーー か かー] れ ハレー わ ぬ に ふー りー か か れ ヨ ふ り か
 11. [あさしゅみ ちゃー] が りー や ハレー し ょ ち ゃ が まー のー お よ べ ヨ よ ね し ゅ



1. も れ う っ ち ゅ ん き ゃ ハ レー に し ゅ て お せー ろ ヤ シ ョ レ い じ て も れ
 3. が つ い な れ ば ハ レー わ は な さ き ゅー り ヤ シ ョ レ わ は ち が つ い
 5. よ ぬ く れ て ハ レー あ そ ほ や かー な ヤ シ ョ レ い つ い が よ ぬ
 7. あ と あ と に ハ レー ち し ゅ る ご とー に ヤ シ ョ レ や は や あ と
 9. か る な き ゃ や ハ レー そ そ や な さー ぬ ヤ シ ョ レ ふ り か か る
 11. み ち ゃ が り や ハ レー ひ ら せ お よー べ ヤ シ ョ レ よ ね し ゅ み ち ゃ

↓8. ↓12. ↓6,10. ↓4. ↓2.



1. う っ ち ゅ ん き ゃ ハ レー に し ゅ て お せーー ろ ヤ シ ョ レ //
 3. な れ ば ハ レー わ は な さ き ゅー り ヤ シ ョ レー
 5. く れ て ハ レー あ そ ほ や かー な ヤ シ ョ レー
 7. あ と に ハ レー ち し ゅ る ご とー に ヤ シ ョ レ //
 9. な き ゃ や ハ レー そ そ や な さー ぬ ヤ シ ョ レー
 11. が り や ハ レー ひ ら せ お よー べ ヤ シ ョ レー



2. [はちがー ついのー] せ ついや ハレー よりも どりー も どり ヨ わきやは
 4. [けえぶのー] よ かー る ひ に ハレー よ わつ け てー お せろ ヨ けえぶよ
 6. [なつか] ご えー き け ば ハレー い きや ぬ かー れ らぬ ヨ と て や
 ♩=109~ 8. [やはや] あ とー あ と に ハレー ち し え き た るー い え ぬ ば ヨ は る の
 10. [てふり] ふ りー よ か な ハレー な な ふ え が れー て ふ り ヨ て ふ り
 12. [うたか] わ せー か わ せ ハレー ふ し か わ せー か わ せ ヨ う た の

↓9.11. ↓7.



2. た ち ご ろー や ハレー い つ も ど り ゆー り ヤ シ ョ レ わ き や は た ち
 4. り が さ きー や ハレー お よ べ ば かー り ヤ シ ョ レ け え ぶ よ り が
 6. あ ら し ごー え ハレー き か せ た ぼー れ ヤ シ ョ レ と て や あ ら //
 8. き も ら し やー や ハレー な き や が え し やー る ヤ シ ョ レ //
 10. ぎ ょ ら さ せー る ハレー わ た ま こ がー ね ヤ シ ョ レ て ふ り ぎ ょ ら
 12. か わ り ばー ど ハレー ふ し も か わー る ヤ シ ョ レ う た の か わ

↓5. ↓3.



2. ご ろ や ハレー い つ も ど り ゆー り ヤ シ ョ レ //
 4. さ き や ハレー お よ べ ば かー り ヤ シ ョ レ //
 10. さ せ る ハレー わ た ま こ がー ね ヤ シ ョ レ -
 12. り ば ど ハレー ふ し も か わー る ヤ シ ョ レ - (踊終了)

7. <あがんむらくわ>

女性5番以降の実音は長2度上。男性6番以降はほぼ長2度下。

女

♪ =110~ 1. [はちが ついのーせー] ついーやー ーよりも ど り も どりー ヨ ハレ
 3. [なつか] ご えーきー けーばー ーいきや ぬ か れらぬー ヨ ハレ
 5. [うてば うちー]ぶー しゃーやー ーよなり しゅ る つづみー ヨ ハレ
 ♪ =112~ 7. [なつか] ご えーきー けーばー ーいきや ぬ ーか れらぬー ヨ ハレ
 9. [けえぶの] よ かーるー ひーにー ーよわつ けーて おせろー ヨ ハレ
 ♪ =116~ 11. [うたか] わ せーかー わーせー ーふしか わーせ か わせー ヨ ハレ

女

5. 7. 9.
 1. ーわきやは たち ごー ろ やー ーいつも どーりゆり ヤシヨレ ハレ
 3. ーとてや あら しー ご えー ーきかせ たーぼ れ ヤシヨレ ハレ
 5. ーよれば より ぶー しゃやー ーかなが おーそ ぼ ヤシヨレ ハレ
 7. ーとてや あら しー ご えー ーきかせ たーぼ れ ヤシヨレ ハレ
 9. ーけえぶよ りが さー き やー ーおよべ ばーか り ヤシヨレ ハレ
 11. ーうたの かわ りー ぼ どー ーふしも かーわ る ヤシヨレ ハレ //

↓12. ホラシ (ドンドン節 譜略) ↓10. ↓6. ↓4.8. ↓2.

女

5. 7. 9.
 1. ーわきやは たち ごー ろ やー ーいつも どーりゆり ヤシヨレ
 3. ーとてや あら しー ご えー ーきかしたーぼ れ ヤシヨレ //
 5. ーよれば より ぶー しゃやー ーかなが おーそ ぼ ヤシヨレ //
 7. ーとてや あら しー ご えー ーきかしたーぼ れ ヤシヨレ //
 9. ーけえぶよ りが さー き やー ーおよべ ばーか り ヤシヨレ //



2. [あさしゆみ] ちゃー がー りー やー しよちよがまーのー およべえ ヨ ハレ
 4. [けえぶの] よ かー るー ひー にー ーよわつ け てー お せろ ヨ ハレ
 6. [はちが] ついのー せー ついーやー ーよりも どりー もどり ヨ ハレ
 8. [つづみ] ぐわやー うー てー ばー ーうまの こどー う ちゆる ヨ ハレ
 ♩=114 10. [しらく] も やー まー さー りー ーかぜつ れ てー い きゆり ヨ ハレ



2. -----
 4. ーけえぶよ り が さー き やー ーおよ べえば か り ヤシヨレ ハレ
 6. ーわきやは たち ごー ろ やー ーいつ も ど りゆ り ヤシヨレ ハレ
 8. ーまましや ぐわや うー て ばー ーまま な た ちゆ り ヤシヨレ ハレ
 10. ーわぬや か な つー れ てー ーいこ か し の き ヤシヨレ ハレ



2. ーよねしゆ み ちゃ がー りー やー ーひら せ お よ べえヤシヨレ //
4. ーけえぶよ り が さー き やー ーおよ べえば か り ヤシヨレ ー
6. ーわきやは たち ごー ろ やー ーいつ も ど りゆ り ヤシヨレ ー
8. ーまましや ぐわや うー て ばー ーまま な た ちゆ り ヤシヨレ ー
10. ーわぬや か な つー れ てー ーいこ か し の き ヤシヨレ ー

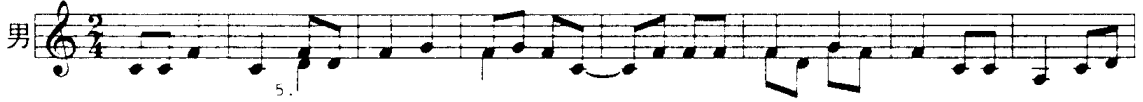
やんごら
8. <波打際ぬいぶ>

男性1番の実音は短三度下、7番は長2度下。

演唱歌詞は資料3参照。

この演唱では、例外的に男性から歌い出している。

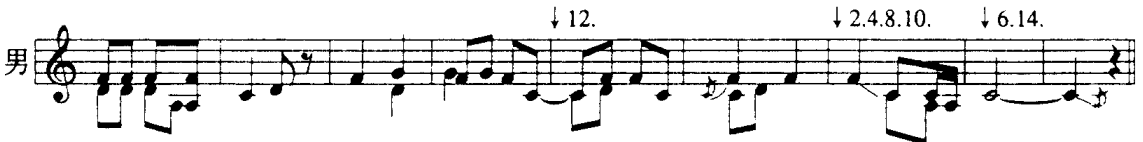
♩ = ca.102



- 1. [やんご] らのーいーぶーやーーいどか け てーつりゆりヨハレ
- 3. [つきの] ゆるーなーれーばーーしばが く れーいもれヨハレ
- 5. [ことし] はろどーしーやーーかほどし どーなりよるヨハレ
- 7. [いくつ] く]らーべー てーもーーきのどく どーなりよるヨハレ
- 9. [はちが] ついのーせー ついーやーーよりも ど りーもどりヨハレ
- 11. [はちが] ついのー]せー ついーやーーよりも ど りーもどりヨハレ
- 13. [いきゆる] しらーくーもーやーーかせつ れ てーいきゆりヨハレ



- 1. -やんの めわ らーべえーやーーさでし つ りゆり ヤショーレハレ
- 3. -やみの ゆる なーれーばーーまみち い も れ ヤショーレハレ
- 5. -やねの にが なーしーやーーあぶしま く ら ヤショーレハレ
- 7. -もとに にる はーなーのーーちゆもと ね ら ぬ ヤショーレハレ
- 9. -わきやは たち ごーろーやーーいついも ど りゆり ヤショーレハレ
- 11. -わきやは たち ごーろーやーーいついも ど りゆり ヤショーレハレ
- 13. -わぬや かな つーれーてーーいこかし の き ヤショーレハレ



- 1. -やんの めわ らーべえーやーーさでし つ りゆり ヤショーレ //
- 3. -やみの よる なーれーばーーまみち い も れ ヤショーレ -
- 5. -やねの にが なーしーやーーあぶしま く ら ヤショーレ -
- 7. -もとに にる はーなーのーーちゆもと ね ら ぬ ヤショーレ -
- 9. -わきやは たち ごーろーやーーいついも ど りゆり ヤショーレ -
- 11. -わきやは たち ごーろーやーーいついも ど りゆり ヤショーレ //
- 13. -わぬや かな つーれーてーーいこかし の き ヤショーレ -

♩ =ca.102



女

2. [はちが ついの] せ - つい-や- -よりも ど-り- も どり ヨ ハレ
 4. [なつか ごえ] き - け-ば- -いきやぬ-か- れ らぬ ヨ ハレ
 6. [せつと し] ば-さ - し-や- -なのかへえ-ざ- め りゆり ヨ ハレ
 8. [もとど も] と-な - りょ-る- -すらの も と-な りゆめ ヨ ハレ
 10. [おもか げぬた] て-ば(中断) はまう れ-て- み れば ヨ ハレ
 12. [せつと] し ば-さ - し-や- -なのかへえ-ざ- め りゆり ヨ ハレ
 14. あのよ ね せん きゃ - -の- -なまの う-た- き けば ヨ ハレ



女

2. -わきやは た ち ご - - ろ や- -いつも ど-りゆ り ヤシヨ レ ハレ
 4. -とてや あ ら し ご - - え- -きかせ た-ぼ- れ ヤシヨ-レ ハレ
 6. -きもちゃげ の か - - な や- -ぬへえざめ-りゆ り ヤシヨ レ ハレ
 8. -すらの も と な - - れ ば- -ねなし か-ず ら ヤシヨ レ ハレ
 10. -しらな み や た - - ちゅ-り- -かなや め-ら ぬ ヤシヨ-レ ハレ
 12. -きもちゃげぬ か - - な-や- -ぬへえざめ-りゆ り ヤシヨ レ ハレ
 14. -やはや あ と あ - - と-に- -ちしゆるご-と に ヤシヨ レ ハレ



女

2. -わきやは た ち ご - - ろ-や- //

4. -とてや あ ら し ご - - え- -きかし //

6. -きもちゃげ の か - - な-や- -ぬへえざめ-りゆ り ヤシヨ-レ -

8. -すらの も と な - - れ-ば- -ねなし か-ず ら ヤシヨ-レ -

10. -しらな み や た - - ちゅ-り- -かなや め-ら ぬ ヤシヨ-レ -

12. -きもちゃげぬ か - - な-や- -ぬへえざめ-りゆ り ヤシヨ-レ //

14. -やはや あ と あ - - と-に- -ちしゆるご-と に ヤシヨ-レ -(踊終了)

9. <シュンカネクワ>

男性2、18番の実音は半音下。演唱歌詞は資料3参照。



- ♩=68~ 1. [しんかなく]やふしや--- わがくなしうし---が---しゃみせんもち いもれ---つけておせ---
- 3. [はちがつ]のせつや--- よりもどりもど---り---わき*はたち ごろや---いつもどり---
- 5. [いつや この]ごとに--- あればたまこが---ね---の---てにこの しのき---わがえとり---
- 7. (ことし) [はろどし]や--- かほどしどあり---る---や---ねのにが なしや---あぶしまく---
- ♩=70~ 9. [せつとし]ばさしや--- なのかへ*ざめり*---り---き---もしやげの かなや---ぬほざめり*---
- 11. [なつか]ごえきけば--- いきやぬかれら---ぬ---と---てやあら しごえ---きかしたほ---
- 13. [いこいこ]にすれば--- あとめかげたち*---り---お---ろおろに すれば---ぎりぬとうる---
- ♩=75~ 15. [あせは]だのてのげ--- かたみとてから---や---う---しろかる がると---いもりしよし---
- 17. [なき*も]まねまねと--- わき*もまねまね---と---た---げにまね まねと---よさりしよし---

↓14. ↓4. ↓6.12. ↓8. ↓10.18. ↓2.16.



- 1. ろサーサ シュンカネケ---しゃみせんもち いもれ---つけておせ---ろサーサ シュンカネケ
- 3. りサーサ シュンカネケ---わき*はたち ごろや---いつもどりゆ---り //
- 5. りサーサ シュンカネケ---の---てに この しのき---わがえとりゆ---りサーサ //
- 7. らサーサ シュンカネケ---や---ねのにが なしや---あぶしまく---らサーサ シュンカネケ
- 9. りサーサ シュンカネケ---き---もちやげの かなや---ぬほざめりゆ---りサーサ シュンカネケ
- 11. れサーサ シュンカネケ---と---てやあら しごえ---きかしたほ---れサーサ シュンカネ //
- 13. し*サーサ シュンカネケ---お---ろおろに すれば---ぎりぬとうる---しや //
- 15. らサーサ シュンカネケ---う---しろかる がると---いもりしよせ---らサーサ シュンカネケ
- 17. らサーサ シュンカネケ---た---げにまね まねと---よさりしよし---らサーサ シュンカネケ



- 2. [しんかなく]やふしや--- わがくなしうし---が---しゃみせんもち いもれ---つけておせ---
- 4. [けえぶ]のほこらしやや---いつよりも まさ---り---い---つやこの ごとに---あらししたほ---
- 6. [けえぶ]のほこらしやや---いつよりも まさ---り---い---つやこの ごとに---あらししたほ---
- 8. [はちがつ]のせつや--- ゆりもどりもど---り---わき*はたち ごろや---いつもどりゆ---
- 10. [ことし]はろどしや--- かほどしど やよ---る---や---ねのにが なしや---あぶしまく---
- 12. [なきやもまね]まねと--- わきやもまねまね---と---た---げにまね まねと---よさりしよし---
- 14. [わかれて]やいきゆり---ぬばかたみ おせ---ろ---あ---せはだの てのげ---かたみおせ---
- 16. [とり*わ]せどありよる---いき*わせどありよ---る---か---ながとりや わせで---なきやぼうが---
- ♩=90~ 18. [じゅしち]はち ごろや---よのくれど まちゆ---る---い---ついがよの くれて---あせほやか---

↓5.11.15. ↓9.17.19ホラシ ↓7. ↓3.13.



- 2. ろサ ---サシュンカネケ---しゃみせんもち いもれ---つけておせ---ろサーサ シュンカネケ
- 4. れサ ---サシュンカネケ---い---つやこの ごとに---あらししたほ---れサーサ シュンカネケ
- 6. れサ ---サシュンカネケ---い---つやこの ごとに---あらししたほ---れサーサ シュンカネケ
- 8. りサ ---サシュンカネケ---わき*はたち ごろや---いつもどりゆ---りサーサ シュンカネケ
- 10. らサ ---サシュンカネケ---や---ねのにが なしや---あぶしまく---らサーサ シュンカネケ
- 12. らサ ---サシュンカネケ---た---げにまね まねと---よさりしよし---らサーサ シュンカネケ
- 14. ろサ ---サシュンカネケ---あ---せはだの てのげ---かたみおせ---ろサーサ シュンカネケ
- 16. でサ ---サシュンカネケ---か---ながとりや わせで---なきやぼうが---でサーサ シュンカネケ
- 18. なサ ---サシュンカネケ---い---ついがよの くれて---あせほやか---なサーサ シュンカネケ

＜シュンカネクワ＞ホラシ1 (ウントノマイ)

男性29番の実音は半音下。

↓31.ホラシ3 (ドンドン節 譜略) ↓20.22. ↓27.(口説)

♩=95 19. うんとのまいが につさいなー さよどんたにつさいなー うんとのまいがにつさいなー さよどんたにつさいなー
 ♩=100 21. 同上
 ♩=132 26. 同上
 30. 同上

♩=116 22. 同上
 ♩=132 29. 同上

20. うんとのまいがにつさいなー さよどんたにつさいなー うんとのまいがにつさいなー さよどんたにつさいなー
 ♩=116 22. 同上
 ♩=132 29. 同上

(ウントノマイ2)

↓24.

♩=120 23. しる わしるわー しどろの もゆる もゆるー

↓25.ホラシ2 (口説)

♩=120 24. しる わしるわー しどろの もゆる もゆるー

＜シュンカネクワ＞ホラシ2 (口説) 女性28番の実音は短2度上。

♩=130 25. (わんやんめ) いしがき かね なりゆりはー まのー ゆりー ずな
 27. ななつー やつ こんじゅー このー つ とていば たち みちー よち

↓28.(口説) ↓26.(ウントノマイ)

25. こめ なりゆー りおー きー の くろー うー しゅ さけ なりゆり
 27. いち ちむー ちなー なー ち やちー こんじゅ このつ と

♩=132 28. わんやんめ いしがき かね なりゆりは まー のしろー すな

↓29.(ウントノマイ)

28. こめ なりゆー りおー きー の くろー う しゅ さけ なー りゆり

10. <曲がりよたかちぢ>

演唱歌詞は資料3参照。

この採譜冒頭の前に女男各一節ずつ歌っているが、改めて歌い出した時点から採譜した。
女性dの音はやや低めに歌われる。

♩ = ca.105

女

- | | | | | | | | | |
|-----|---------------|------|---------|-------|------|-----|---------|-------|
| 1. | [まがりよ]たーかち | ぢーに | ちよーちーん | ぐわぼと | もし | ハレ | ちよーちーん | |
| 3. | [あさしよ]みーちゃがりー | や | しゅーちゅーが | まのお | よべ | ハレ | しよーちよーが | |
| 5. | [あのよ]ねーせぬ | きゃーの | なーまーの | うたき | けば | ハレ | なーまーの | |
| 7. | [うきよ | かーりじ | まーに] | なーげーさ | おられ | よめ | ハレ | なーげーさ |
| 9. | [つきの | よーる] | なれーば | しーばーが | くれい | もれ | ハレ | しーばーが |
| 11. | [にさん] | がーつな | れーば | もーもーの | はなさ | きゅり | ハレ | もーもーの |
| 13. | [うたか | わーせか | わーせ | ふーしーか | わ]せか | わーせ | ハレ | ふーしーか |

男ハヤシ入り ↓5.9. ↓7.11.13. ↓1.3.

女

- | | | | | | | | | |
|-----|------|------|----|------|-----|---|-----|----|
| 1. | ぐわぼと | もーしー | ー | うりが | あーか | が | りー | に |
| 3. | まのお | よーべー | ー | よねしよ | みーち | が | りー | や |
| 5. | うたき | けーば | ー | やはや | あーと | あ | とー | に |
| 7. | おられ | よーめ | ー | あそで | とーく | み | しよー | し |
| 9. | くれい | もーれ | ー | やみの | よーる | な | れー | ば |
| 11. | はなさ | きゅー | りー | はーち | がーつ | い | な | れー |
| 13. | わせか | わーせ | ー | うたの | かー | わ | れ | ばー |

女

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|------|---|---|----|----|---|---|---|------|-----|-----|-----|---|----|---|---|---|---|---|---|----|---|---|
| 1. | しーのー | で | マ | たい | も | れ | ハ | レ | しーのー | で | マ | たい | も | ー | れ | ー | | | | | | | |
| 3. | ひーら | ー | せ | マ | た | お | よ | べ | ハ | レ | ひーら | ー | せ | マ | た | お | よ | ー | べ | え | ー | | |
| 5. | ちーし | ー | る | マ | た | ご | と | に | ハ | レ | ちーし | ー | る | マ | た | ご | と | ー | に | ー | | | |
| 7. | かーり | ー | の | マ | た | よ | さ | め | え | ハ | レ | かーり | ー | の | マ | た | よ | さ | ー | め | え | ー | |
| 9. | まーみ | ー | ち | マ | たい | も | れ | ハ | レ | まーみ | ー | ち | マ | たい | も | ー | れ | ー | | | | | |
| 11. | わーは | ー | な | マ | た | さ | き | ゅ | り | ハ | レ | わーは | ー | な | マ | た | さ | き | ゅ | ー | り | ー | |
| 13. | ふーし | ー | も | マ | た | か | わ | る | ハ | レ | ふーし | ー | も | マ | た | か | わ | ー | る | ー | (踊 | 終 | 了 |

女性後半(下句)の入り ↓1.3.5.13.

男ハヤシ

- | | | | | | |
|-----|----|---------|------|------|---|
| 1. | ハレ | ちよーちーん | ぐわぼと | もーしー | ー |
| 3. | ハレ | しよーちよーが | まのお | よーべ | ー |
| 5. | ハレ | なーまーの | うたき | けーば | ー |
| 7. | ハレ | なーげーさ | おられ | よーめ | ー |
| 9. | ハレ | しーばーが | くれい | もーれ | ー |
| 11. | ハレ | もーもーの | はなさ | きゅーり | ー |
| 13. | ハレ | ふーしーか | わせか | わーせ | ー |

・ 6 節（男）は下句のみの演唱となった。

・ この演唱では 12 節（男）の後、女性が間違ってハヤシを入れ、それに続いて男性が「月の夜なればしは隠れいもれ」と B 句まで歌って中断し、その後楽譜の 13 節（女）に進行した。

♩ = ca.105

男

2. なきゃも まーねま ねーと わーきゃーも まねま ね と ハ レ わーきゃーも
 4. ことし は ろど しーや かーふーど しどや ゆる ハ レ かーふーど
 6. やはや あーとあ とーに ちーしゅーる マタごと に ハ レ ちーしゅーる
 8. なつか ごーえき けーば いーきーや ぬかれらぬ ハ レ いーきーや
 10. つきの よーるな れーば しーばーが くれいもれ ハ レ しーばーが
 12. とりやわ せーどや ゆーる いーきゃーわ せどや ゆる ハ レ いーきゃーわ

女ハヤシ入り ↓ 2.4.8. ↓ 10.12.

2. ま ねま ね ---と --- たげに まーねま ねーと
 4. し どや ゆ ---る --- やねの にーがな しーや
 6. マ タごと ---に --- //
 8. ぬ かれら ---ぬ --- とてや あーらし ごーえー
 10. くれいも ---れ --- やみの よーるな れーば
 12. せ どや ゆ ---る --- かなが とーりやわ せーで

男

2. なーきゃーば マタう が で ハ レ なーきゃーば マタう がーで ---
 4. あーぶーし マタま くら ハ レ あーぶーし マタま くら ---ら ---
 8. きーかーせ マタた ぼ れ ハ レ きーかーせ マタた ぼーれ ---
 10. まーみーち マタイ も れ ハ レ まーみーち マタイ もーれ ---
 12. なーきゃーや マタう が で ハ レ なーきゃーや マタう がーで ---

男性後半（下句）の入り ↓ 2. ↓ 4. ↓ 8. ↓ 10.12.

女ハヤシ

2. [ハレー] わーきゃーも ま ねま ねーと ---
 4. [ハレー] かーふーど し どや ゆーる ---
 8. ハレ いーきーや ぬ かれら---ぬ ---
 10. ハレ しーばーが くれいもーれ ---
 12. ハレ いーきゃーわ せ どや りょーる ---

あかきなかんのんぜ
 11. <赤木名観音寺> 女性1番の実音は長2度下。演唱歌詞は資料3参照。



- =60~ 1. [あかきな]かんのん ぜ -- や -- いつ -- ぶ か -- ち -- なお -- ろ な お -- ー -- ろ
- 3. [はちが]つのせ つい -- や -- より -- も ど -- り -- もど -- り わ き -- ー -- が
- 5. [けいぶの]は かる ひ -- に -- よわ -- つい け -- ー -- て -- おせ -- ろ けえぶ -- ー -- よ
- =68~ 7. [せつと]し ばさ し -- や -- な の -- か へ -- ー -- ぎ -- めえり -- む -- り き も -- ー -- ち
- 9. [しらく]も やま さ -- り -- か ぜ -- つ れ -- ー -- て -- い き -- む -- り わ ぬ -- ー -- や
- 11. [あのよ]ね せん] き -- ゃ -- め -- な ま -- む う -- た -- き け -- ば や は -- ー -- や
- 13. [てふり]ふ りよ か -- な -- な な -- ほ が -- れ -- て ふ -- り て ふ -- ー -- り
- 15. [なきも]ま ねま ね -- と -- わ き -- ゃ -- も ま -- ね -- ま ね -- と た げ -- ー -- に

↓16.ホラシ (ドンドン節 譜略 ♩=70~)



- 1. -- なお -- ろ -- な -- お -- ろ -- な -- お と -- ば か -- り ハ -- レ //
- 3. -- たち -- ご -- ろ -- や -- い -- つ も -- ど り む -- り ハ -- レ ヨイサヨイ //
- 5. -- りが -- さ -- き -- や -- お -- よ べ -- ば か -- り ハ -- レ ヨイサヨイサヨイ
- 7. -- げぬ -- か -- な -- と -- む -- へ え ぎ -- めえり -- む -- り ハ -- レ ヨイサヨイサヨイ
- 9. -- かな -- つ -- れ -- て -- い -- こ か -- し の -- き ハ -- レ ヨイサ //
- 11. -- あと -- あ -- と -- に -- ち -- し る -- ご と -- に ハ -- レ ヨイサヨイサヨイ
- 13. -- ぎよら -- さ -- せ -- ど -- わ -- た ま -- く が -- に ハ -- レ ヨイ //
- 15. -- まね -- ま -- ね -- と -- よ -- さ り -- し せ -- ら //



- 2. [あかきな]かんのんぜ -- や -- いつ -- ぶ か -- ち -- なお -- ろ な お -- ー -- ろ
- 4. [ことし]は -- ろどし -- や -- かほ -- ど し -- ど -- やゆ -- る や ね -- の
- 6. [とのち]あ -- みしれ -- や -- かふ -- な ま -- れ -- やし -- が よ ね -- ぐ
- 8. [つきの]よ -- るなれ -- ば -- しば -- が く -- れ -- いも -- れ や み -- の
- 10. [つづみ]ぐ -- やうて -- ば -- うま -- の こ -- ど -- うち -- る ま ま -- シャ
- 12. [やはや]あ -- と]あと -- に -- ちし -- きよた -- る -- いえぬ -- ば は る -- の
- 14. [じしち]は -- ちごろ -- や -- よぬ -- く れ -- ど -- まち -- る い つい -- が

↓3. 15.



- 2. -- なお -- ろ -- な -- お -- ろ -- な -- お と -- ば か -- り アリヤヨイサ //
- 4. -- なが -- な -- し -- や -- あ -- ぶし -- まく -- ら アリヤヨイサヨイサ -- //
- 6. -- らや -- め -- な -- し -- と -- こや -- こし -- ー -- で //
- 8. -- よる -- な -- れ -- ば -- ま -- みち -- いも -- れ アリヤヨイサヨイサ -- ヨイ
- 10. -- ぐわや -- ー -- う -- て -- ば -- も -- もな -- たち -- む -- り -- アリヤヨイサヨイサ -- ヨイ
- 12. -- けえも -- ら -- シャ -- や -- な -- きやが -- いえ -- シャ -- ろ アリヤヨイサヨイサ -- ヨイ
- 14. -- よぬ -- く -- れ -- て -- あ -- せば -- や -- か -- な アリヤヨイサヨイサ -- ヨイ

12. <てらましょ>

男女共に ♩ ♩ は ♩ ♩ のリズムに近い。
 女性5,7番の実音は半音上。男性2,8番は約半音下、4,6番は半音上。
 男女共に、#の音はf近くまで低くなる。

女

♩ =110~ 1. -----[てーら ま]しよ --やー はべえら な--ていとーびゅーり ハレ ゆ わん
 3. [はちが つ--の] せ つい --やー よりも ど--り もど--り ハレ わ きゃは
 ♩ =118~ 5. -----う--や ふ じえ --の- し まだ て--の わーる- さ ハレ か なが
 7. [なつか ご--え] き け --ば- い きや め--か れーら- め ハレ と てや
 ♩ =122~ 9. -----[ふ--り] よ か --な- な なほ が--れ て-ふーり ハレ て ふり
 ↓10.ホラシ(ドンドン節 譜略)

↓8. ↓2. ↓6. ↓4.

女

1. ゆ--き じよしゅ --やー はべえら う--さ おーヤシヨレ //
 3. た--ち ご ろ --やー いついも ど--りゅりーヤシヨレ //
 5. し--ま わ し --ま- ま ざり わ--か そーヤシヨレまざり わ--か そ -
 7. あ--ら し ご --え- き か し た--ほ れーヤシヨレ //
 9. きょ--ら さ せ --ど うー わ た ま こ--が ねーヤシヨレ //

♩ =112~ 2. -----[てーら] ましよ --やー はべえら な--ていとーびゅーり ハレ ゆ わん
 ♩ =114~ 4. -----[はじよめ] あら --ぬ- わ きゃは じょ--め あーら- め ハレ け さぬ
 ♩ =120~ 6. [けえぶの ほ--こら]しや --やー いついより--も ま-さーり ハレ いついや
 8. -----[てーら] ましよ --やー はべえら な--ていとーびゅーり ハレ ゆ わん

↓7. ↓9. ↓3.5.

男

2. ゆ--き じよしゅ --やー はべえら う--さ おーヤシヨレはべえら う--さ お -
 4. う--や ふ じえ --の- し つえけは--じよめーヤシヨレしつえけ は--じよめ -
 6. こ--の ご と --に- あら し た--ほ れーヤシヨレあら し た--ほ れ -
 8. ゆ--き じよしゅ --やー はべえら う--さ おーヤシヨレはべえら う--さ お -

12. <てらましょ> 演唱歌詞

1 f 099	てらましょや	蝶なてい飛びゆり	用安ゆきじよ主や	蝶うさお
2m099	てらましょや	蝶なてい飛びゆり	用安ゆきじよ主や	蝶うさお
3 f 122	八月の節や	よりもどりもどり	わきやはたちごろ	いついもどりゆり
4m110	なきやはじよめあらぬ	わきやはじよめあらぬ	けさぬうやふじえぬ	しつえけはじよめ
5 f 067	けさぬうやふじえぬ	鳥建てぬ悪さ	かながしまわしま	間切わかそ
6m065	今日のほこらしやや	何時よりも勝り	何時もこのごとに	あらしたほれ
7 f 114	なつか声きけば	いきやぬかれらぬ	とてやあらし声	聞かしたほれ
8m099	てらましょや	蝶なてい飛びゆり	用安ゆきじよ主や	蝶うさお
9 f 036	手ふりふりよかな	ななほがれ手振れ	手振りぎよらせどう	わ玉黄金

<てらましょ> ホラシ (ドンドン節 譜略)

10m151	山から	谷底見れば	植えたなすびぬ	花ざかり
11 f 122	八月の節や	よりもどりもどり	わきやはたちごろや	いついもどりゆり
12m035	歌かわせかわせ	節かわせかわせ	歌のかわりばど	節もかわる

13. <ヒヤヌガハー> 演唱歌詞

1m042	打ちえばうち欲しゃや	よなりしゆる鼓	寄れば寄り欲しゃや	かなかおそば
2 f 042	打てばうち欲しゃや	よなりしゆる鼓	寄れば寄り欲しゃや	かなかおそば
3m122	八月の節や	よりもどりもどり	わきやはたちごろや	いついもどりゆり
4 f 109	なきやとくま寄らて	遊びゆたる節や	昨日や今日とめば	昔なりゆり*
5m080	十七八頃や	夜のくれど待ちゆる	いついが夜のくれて	あそばやかな
6 f 036	いこいこにすれば	後想影立ちゆる	居ろ居ろにすれば	義理ぬとうるしゃ*
7m085	白雲やまさり	風つれていきゆり	吾ぬやかなつれて	いこかしのき
8 f 049	お十五夜の月や	かね美らさ照りゆり	かながじよにたてば	曇てたほれ*
9m002	あがる白雲に	縄かけてぬしゆり	およばらぬかなに	手さしぬしゆり
10 f 135	ふりかかれかかれ	わぬにふりかかれ	ふりかかるとなきやや	袖やなさぬ
11m114	なつか声きけば	いきやぬかれらぬ	とてやあらし声	聞かせたほれ
12 f 112	わぬや西めえぐり	わぬやひぎやめえぐり	めえぐりあうとうきや	あわれはなそ*
13m162	わぬや今わらべえ	歌の節しらぬ	生まれぬなきやや	ゆしてたほれ*
14 f 040	打ち出さぬうちや	いきややきやと思て	一つ打ち出せば	さみやしらぬ*
15m098	鼓ぐわや打てば	馬のこど打ちゆる	まましやぐわや打てば	ももなたちゆり
16 f 035	歌かわせかわせ	節かわせかわせ	歌のかわりばど	節もかわる

<ヒヤヌガハー> ホラシ (ドンドン節 譜略)

17m148	めでたの	若松様よ	枝も栄えて	葉もしげる
18 f 114	なつか声きけば	いきやぬかれらぬ	とてやあらし声	聞かせたほれ
19m122	八月の節や	よりもどりもどり	わきやはたちごろや	いついもどりゆり
20 f 036	いこいこにすれば	後想影立ちゆり	居ろ居ろにすれば	義理ぬとうるしゃ*
21m066	今日の佳日に	祝つけておせろ	今日よりも先や	およべばかり
22 f 135	ふりかかれかかれ	わぬにふりかかれ	ふりかかるとなきやや	袖やなさぬ
23m147	餅やかしゃ抱きゆり	かしゃや餅抱きゆり	餅かしゃのごとに	抱しゆりぶしやや
24 f 036	手振りふりよかな	ななふえがれ手振れ	手振りぎよらせせる	わ玉黄金*
25m010	遊びずき吾ぬや	とめてとめらぬ	鳥ぬしりくちに	とめてあそば
26 f 035	歌かわせかわせ	節かわせかわせ	歌のかわりばど	節もかわる

13. <ヒヤヌガヘー>

男性1～3番の実音は半音下。女性の2番は半音下、6番以降は半音上。
この演唱では、例外的に男性から歌い出している。

男

13.15.

3.7.13 3. 1.3. 13. 1.

♩=98~ 1. [うちえば う ち ぶ しゃ や かり しゅ つ づ ー み
3. [はちが] つい の せ つい や よ り も ど る も ど ー り
♩=108~ 5. [じゅしち] は ち ご ろ や よ れ ぐ れ ぐ まい ち ー る
7. [しらくも ー ち ら ー] ま さ り ー かに せ つ け ー て き ー り
♩=116~ 9. [あがくる し ー ら ー] く さ ー ー に ば わ か け ー て ぬ ー り
11. [なつか] ー ー え ー き け ー ー ば ー ない ー ぬ ー か ぬ ー ら ー ぬ
♩=118~ 13. [わぬや な ー ま ー] わ ー ら ー べ ー う た の ふ ー ー し ー ら ー ぬ
15. つづ み ぐわ や ー う ー て ー ー ば ー う ま の こ ー ー し ー ら ー ぬ

男

3.9.15. 1.

1. ヒ ヤヌガヘ ー よ れ ば ー り ー ぶ ー しゃ わ かい なつ が お そ ー
3. ヒ ヤヌガヘ ー わ き は た ー ち ー ぐ ー ろ ー わ かい なつ が お そ ー
5. ヒ ヤヌガヘ ー い つ が よ ー の ー く ー れ ー て あ い そ こ ほ か や し か ー
7. ヒ ヤヌガヘ ー わ ぬ が や ー な ー つ ー れ ー て あ い そ こ ほ か や し か ー
9. ヒ ヤヌガヘ ー お よ ば ー ら ー ぬ ー か ー な ー に ー て さ か し ぬ ー
11. ヒ ヤヌガヘ ー と て き や あ ー ら ー し ー な ー く ー い ー き か し せ て た ー
13. ヒ ヤヌガヘ ー さ ま ま し ー ぐわ ー や ー な ー う ー て ー ー ば ー も ー な ー た ー
15. ヒ ヤヌガヘ ー ま ま し ー ぐわ ー や ー な ー う ー て ー ー ば ー も ー な ー た ー

男

1.3. 1.

1. ば ー ヨ ノ ヒ ヤヌガヘ ー よ れ ば ー り ー ぶ ー しゃ や かい なつ が
3. り ー ー る ヒ ヤヌガヘ ー わ き は た ー ち ー ぐ ー ろ ー わ かい なつ が
5. な ー ヨ ノ ヒ ヤヌガヘ ー い つ が よ ー の ー く ー れ ー て あ い そ こ ほ か や
7. の ー ー き ヒ ヤヌガヘ ー わ ぬ が や ー な ー つ ー れ ー て あ い そ こ ほ か や
9. し ー ー り ヒ ヤヌガヘ ー お よ ば ー ら ー ぬ ー か ー な ー に ー て さ か し
11. れ ー ヨ ノ ヒ ヤヌガヘ ー と て き や あ ー ら ー し ー な ー く ー い ー き か し
13. れ ー ヨ ノ ヒ ヤヌガヘ ー さ ま ま し ー ぐわ ー や ー な ー う ー て ー ー ば ー も ー
15. る ー ヨ ノ ヒ ヤヌガヘ ー ま ま し ー ぐわ ー や ー な ー う ー て ー ー ば ー も ー

男

↓8. ↓16. ↓2.4.14. ↓6.10.12. 1.

1. お そ ば ー ヨ ノ ヒ ヤヌガヘ ー ー
3. ど ー り ー ー る ヒ ヤヌガヘ ー ー
5. や か な ー ヨ ノ ヒ ヤヌガヘ ー ー
7. し ー の ー ー き ヒ ヤヌガヘ ー ー
9. ぬ ー し ー ー り ヒ ヤヌガヘ ー ー
11. た ー ぼ ー れ ー ヨ ノ ヒ ヤヌガヘ ー ー
13. た ー ぼ ー れ ー ヨ ノ ヒ ヤヌガヘ ー ー
15. た ー ち ー る ー ヨ ノ ヒ ヤヌガヘ ー ー



女

♩ = 104 ~ 2. [うてば] う - ち - ぶ - しゃ - や - よ な り す - - る つ - づ - - み
 4. [なきやとう] く - ま - ゆ - ら - や - あ し び ゆ た - - - る つ せ - - つ い - - や
 6. [いこい] こ - に - す - れ - - ば あ と ね め え か ら - - - げ た て - - ち ゆ - - る
 ♩ = 112 ~ 8. [おじご] や - の - つ - き - - や か ね ん ん じ ゃ ら - - - さ て か - - り ゆ - - り
 10. [ふりか] か - れ - か - か - - り わ ぬ に や ふ - - - り さ て か - - り
 12. [わぬや] に - し - め え - く - - り わ ぬ に や ひ - - - り さ て か - - り
 14. [うちだ] だ - さ - ぬ - う - ち - や い さ や き - - - と お - か - も - - て
 16. [うたか] か - わ - せ - か - わ - - せ じ ゃ - - - せ せ せ せ せ せ せ せ せ せ せ



2. ヒ ヤ ヌ ガ へ よ れ ば よ - り - ぶ - し ゃ - や か な が し お そ り
 4. ヒ ヤ ヌ ガ へ へ よ き ぬ や け え - ぶ - と - め - ば び な り が し お な
 6. ヒ ヤ ヌ ガ へ へ お お ろ お じ ゃ - ぶ - と - め - ば び な り が し お な
 8. ヒ ヤ ヌ ガ へ へ お お ろ お じ ゃ - ぶ - と - め - ば び な り が し お な
 10. ヒ ヤ ヌ ガ へ へ お お ろ お じ ゃ - ぶ - と - め - ば び な り が し お な
 12. ヒ ヤ ヌ ガ へ へ お お ろ お じ ゃ - ぶ - と - め - ば び な り が し お な
 14. ヒ ヤ ヌ ガ へ へ お お ろ お じ ゃ - ぶ - と - め - ば び な り が し お な
 16. ヒ ヤ ヌ ガ へ へ お お ろ お じ ゃ - ぶ - と - め - ば び な り が し お な



2. ば ヨ ノ ヒ ヤ ヌ ガ へ // き ぬ や け え - ぶ - と - め - ば び な り が し お
 4. しゃ ヨ ノ ヒ ヤ ヌ ガ へ へ お お ろ お じ ゃ - ぶ - と - め - ば び な り が し お
 6. れ ヨ ノ ヒ ヤ ヌ ガ へ へ お お ろ お じ ゃ - ぶ - と - め - ば び な り が し お
 8. ぬ ヨ ノ ヒ ヤ ヌ ガ へ へ お お ろ お じ ゃ - ぶ - と - め - ば び な り が し お
 10. ろ ヨ ノ ヒ ヤ ヌ ガ へ へ お お ろ お じ ゃ - ぶ - と - め - ば び な り が し お
 12. ぬ ヨ ノ ヒ ヤ ヌ ガ へ へ お お ろ お じ ゃ - ぶ - と - め - ば び な り が し お
 14. る ヨ ノ ヒ ヤ ヌ ガ へ へ お お ろ お じ ゃ - ぶ - と - め - ば び な り が し お
 16. る ヨ ノ ヒ ヤ ヌ ガ へ へ お お ろ お じ ゃ - ぶ - と - め - ば び な り が し お



4. な り り ヨ ノ //
 6. とう る し ゃ ヨ ノ //
 8. た ば れ ヨ ノ //
 10. な さ ぬ ヨ ノ //
 12. は な ら そ - ヨ ノ //
 14. し ぬ ヨ ノ //
 16. か わ る - ヨ ノ //

1. <アラシャゲ>舞踊譜 右回り（反時計回り）周期6拍

テンポが上がると叩かなくなる。
 (→の向きの人もある。)

※ 手の振りには男女共に、肩から上に両手を上げ、左右を上下交互に動かしながら手首をひねる人もいる。

2. <今の踊り>舞踊譜 ^{いま おど} 左回り（時計回り）周期6拍

3. <喜界湾泊まり>舞踊譜 ^{ききやわんど} 右回り（反時計回り）周期14拍

1990年9月28日の演奏では、手の振りにはほとんど行われず採譜できなかった。

4. <ほーこらしゃ>舞踊譜 右回り(反時計回り) 周期20拍

5. <ほーめらべ>舞踊譜 右回り(反時計回り) 周期16拍

1990年9月28日の演奏では、手の振りはほとんど行われず採譜できなかった。

6. <あまだ^ま下がりゃ>舞踊譜 右回り(反時計回り) 周期18拍

1990年9月28日の演奏では、手の振りはほとんど行われず採譜できなかった。

7. <あがんむらくわ>舞踊譜 右回り(反時計回り) 周期20拍

Musical score for 'あがんむらくわ' dance. The score is written on three staves. The top staff is a melody line in 2/4 time, consisting of 20 measures. The middle staff shows dance steps with arrows indicating direction: up, up-right, right, up-right, up. The bottom staff shows footwork with circles and arrows indicating the path of the feet.

8. ^{やんごら}<波打際ぬいぶ>舞踊譜 右回り(反時計回り) 周期14拍

Musical score for 'やんごら 波打際ぬいぶ' dance. The score is written on three staves. The top staff is a melody line in 1/4 time, consisting of 14 measures. The middle staff shows dance steps with arrows indicating direction: up, up-right, right, up-right, up. The bottom staff shows footwork with circles and arrows indicating the path of the feet.

9. <シュンカネクワ> 舞踊譜 右回り (反時計回り) 周期 14 拍

※腰を落し右膝を折る。

ホラシ 1 (ウントノマイ) 舞踊譜 右回り (反時計回り) 周期 1 1 拍

10. <曲がりよたかちぢ> 舞踊譜 右回り (反時計回り) 周期 1 3 拍

あかきな かんのみせ

11.<赤木名観音寺>舞踊譜 右回り(反時計回り) 周期14拍

Musical notation for item 11, 14/4 time signature, 14 measures. The notation consists of three staves. The top staff shows a melody line with notes and rests. The middle staff shows a sequence of notes with arrows indicating movement directions (up, down, left, right). The bottom staff shows a sequence of notes with arrows indicating dance steps, including a final note marked with a circled 'q'.

12.<てらましょ>舞踊譜 右回り(反時計回り) 周期16拍

Musical notation for item 12, 16/4 time signature, 16 measures. The notation consists of three staves. The top staff shows a melody line with notes and rests. The middle staff shows a sequence of notes with arrows indicating movement directions (up, right, up-right). The bottom staff shows a sequence of notes with arrows indicating dance steps, including a final note marked with a circled 'δ'.

13.<ヒヤヌガヘー>舞踊譜 右回り(反時計回り) 周期14拍

Musical notation for item 13, 14/4 time signature, 14 measures. The notation consists of three staves. The top staff shows a melody line with notes and rests. The middle staff shows a sequence of notes with arrows indicating movement directions (up, right, up-right, up). The bottom staff shows a sequence of notes with arrows indicating dance steps, including a final note marked with a circled '叩'.

叩く時有り。